

東京立正女子短期大学

論 叢

(創立記念号)

目 次

巻頭のことば	岩 本 経 丸	1
東京立正女子短期大学創立趣意書		2
現代教育の危機と教育革新	岩 本 経 丸	5
戦後における女子高等教育の発展	藤 本 満 治	15
教育課程から見た明治二十年前後の私立女子学校	神 辺 靖 光	32
武氏祠画象石における「巨樹」について	土 居 淑 子	65
ラジオ的表現論	庄 司 寿 完	80
イレクトリック、タイプライター	井 口 美 登 利	87
「灯台へ」について	小 林 幹 男	96
冷凍鯨肉及び加工鯨肉中のカルボニル化合物について	太 田 禎 子	7
「白鯨」と「ハックルベリ・フィン」について	近 藤 久 美 子	1

昭和四十一年

巻頭のことば

東京立正女子短期大学開学記念式典実行委員長 学監 岩 本 経 丸

東京立正女子短期大学開学記念式典に際し、拙速ではあるが、「東京立正女子短期大学開学記念論叢」を出すこととなった。研究紀要としないでただ論叢としたのは、開学後なお日が浅く、教員諸氏の研究業績は未だ実らず、さればと言って旧稿を再録することは編者にも筆者にも良心がゆるさず、従ってここに集録されたものは、本短期大学の建学の精神にふれる創立趣意書を巻頭に、一般教育ないし教職課程に関する論叢が多くなり、専門学科に関する学術研究論文が比較的に少くならざるを得なくなったがためである。これが「論叢」の弁である。

大学の第一の使命は、言うまでもなく研究にある。短期大学は、大学の二分の一の存在であって、その使命が二分の一であるわけではない。ここには厳とした独自の使命があり、それに対する研究の責任が存在している。特に、教授、助教授、専任講師たるものは常に何等かの研究業績を積み重ねなければならない。これは所属する学問共同体に対する教育職の義務であり、またそういう社会的地位を与えられたものが社会の所遇にこたえる道でもある。そこで、大学経営の側に立つ者にとっては、これらの業績を、定期的に、あるいは事ある毎に、その時その時において世に

発表する機会をつくるのが大学行政の中心的な仕事となってこなければならない。かく考えたことにより、拙速ではあるが、ここに一部の専任教員によって現在まとめられた稿だけを集め、これに女子教育に関する諸論叢を加え一冊とし、これをとりあえず発表することとした。かくの如き次第を述べて、あえて犯かした「拙速」の弁とする。

さて、論叢と拙速の弁につづき、なお二つの点をお願い申し上げたい。その一つは、この論叢は、この女子短期大学の建学の理念を明らかにするとともにその展開をはかる実践の道の探求を意図しているものとしてご覧いただきたいということである。そして、その二つは、現代女子教育の新しい道の樹立について努力しつつあるわれわれに対して、大方のご支援を得たいというわれわれの願である。

この東京立正女子短期大学記念論叢発行の趣旨を一言でまとめれば、それは、誕生後間もない一女子短期大学が、あたかも入社直後の一社員のように、極めて控え目に、多少恥じらいながら、しかし覚悟と希望にもえて、世間に向って行う自己紹介の姿勢であり、かつ、ことばでもある。この論叢に各位のご清鑑が加えられればまことに幸である。

東京立正女子短期大学創立意書

学校法人堀之内学園

東京立正高等学校同中学校は、その前身である立正高等女学校創立以來ここに四十周年を迎えました。この時にあたり、かつての開校式式辭において創立者岡田日婦上人によって述べられた大学設置の抱負は、ようやくその実現の機を迎え、学校法人堀之内学園理事会は、昭和三十九年秋、満場一致、その第一歩として、東京立正女子短期大学の創立を決議し、これをもって学園創立四十周年記念事業とすることになりました。

おもんみるに、学校法人堀之内学園の母体である堀之内妙法寺は、遠く徳川末期より、寺内において僧風教育を興し、宗門人材を養成してきたのでありますが第二十九世武見日恕上人に及んで堀之内梅檀林を創設、代々の住職自ら林長を勤め、教頭と多数の講師を任用し、常に全国より集まった宗門徒弟を收容してその教育にあたるとともに、他面において、一般育英の事業にも着手、明治三十七年小石川の地に茗谷学園を建て、東大、早大、東洋大の文学部に通う宗門子弟を收容して参りました。これ等の学生の中からは元総理大臣石橋湛山、元立正大学学長守屋貫教、立正学園女学校（現立正学園女子短期大学の前身）創立者馬田行啓等をはじめ多くの有為の材が輩出したのであります。続いて第三十世、後の

身延山第八十二世法主岡田日婦上人に至り現在の地に立正高等女学校を創立、初代校長に日本女子大学、東洋大学、立正大学等に教授であった高島平三郎を招聘、更に続いて第三十一世堀日正上人の代において妙法寺東側より北側の地に堀之内中学校（旧制）の開設が行われました。然るところ、立正高等女学校ははげしく戦災を蒙り、また堀之内中学校は戦後の激動期と学制改革の影響を受けて存立困難に陥り、遂に立正高等女学校に合併せられ、爾来学園名を学校法人堀之内学園とし、学園は新制高等学校と中学校を経営し、校名を東京立正と改めました。また続いて妙法寺第三十二世学校法人堀之内学園第二代理事長大塚日大上人の代に至って、本学園創立と戦後再建の功労者、第三代校長、大僧正馬田即貞を中心として戦災の復興と新たな発展を完遂し、今日の盛大を見ることを得たのであります。

歴代の住職によって推進されてきました堀之内妙法寺のこの育英・教育の事業は、過去に幾多の曲折を経ては来ましたが、新法人設立以來、人と処と時の利を得、今日の東京立正高等学校同中学校として完全に結実することを得たのであります。本短期大学出願当時の現況について述

べますと、創立者の長弟大塚日大上人を理事長に、創立者の有髪の弟子であった岩本経丸を校長とし、高校生急増のピーク時においては教職員百二十三人、中高生徒三千百名を擁し、校地二七七八平方メートル、普通教室五十六、特別教室十四、管理系統各室二十二、視聴覚設備完成の大講堂、水泳プールと食堂を併せ持つ総合体育館、図書館、生徒会各室等を含め、この建坪総数延一五〇〇〇余平方メートルに及び、その約九四％は鉄骨ないし鉄筋コンクリート建となり、実験実習の諸設備と教材教具図書等の内容整備も一応の充足を見ております。卒業生は昭和四十年春をもって一万二千名に達し、ここに城西地区における女子教育の一勢力としての地歩をきずき上げたと思せましょう。この時にあたり、教育事業についての伝統精神と、現在の法人、教職員団、父兄団、生徒会、同窓会の平生の理想と悲願をこめて、大学設立の第一期授業として米英文学語学を専修する東京立正女子短期大学創立を実現したのであります。

さて、今日の日本に存在する米英文学・語学に関する女子の大学の多くは、主としてキリスト教主義に立脚していますが、新しく計画されたこの女子短期大学の精神は、大乘仏教精神とよき日本の伝統の上に立つて、新しい世界宗教の実現をはかろうとする悲願に支えられながら、日本婦人としての自主性ある信仰と教養と思想の三つの基礎を涵養し、また、国際語としての米英語の読み、書き、聞き、話す四技能を修得し、それにもとづいて、現代日本各層のエリートにとってのよき助手となり、ないしは、自らエリートたるにふさわしい能力を備えた日本的女性を世に送ることを期するものであります。かく述べますと、定員百名、

米英文学と語学の単科短期大学という計画では、いさか名実ともなわない謗をまねかれないと思いますが、しかし、その計画はどこまでも第一次計画であって、近く教授団の養成と校地の大規模拡張を実現し得た際には、第二次計画として総合大学建設を実現したいと念願しています。その具体策としては、只今計画中の教職コースからは総合的文学科ないし部を、秘書コースからは女子商経学科ないし部を、教養コースからは女子経営管理学科ないし部（広く人間関係の場における）を発展的に開設し、更に将来は総合女子大学の建設に進みたいという念願を持つものであります。

将来計画の商経学科及び経営管理学科にそれぞれ「女子」の二字を冠する理由について一言触れておきたいと思ひます。すなわち、今日の文明はなんといっても男子中心の文明であることを免れず、従って、全人類的ないし全人間的文明とは申せません。今日の文明人は、生命と生命価値の生産に人類の第一義的意義を認めようとする着想を忘れ、反って、その手段にすぎない物資ないし財貨に目的価値をおき、従って、これ等の大量製造と（生産という言葉をここに使いたくありません）、大量消費に文明発達の尺度があるかの如く錯覚し、しかも、かくの如き経済活動を専ら感性的享楽ないし低俗安易な楽天的人生観の用に供しようとしています。これはまことに由由しい現代文明人の錯誤であると申さねばなりません。

これを人間本来の姿に立ち直らせるには、一般の低俗化と商品化を是正する一方において、生命の翌日の活動力ないし労働力の再生産をはか

りつつあるところの、また、生命価値を深めるための唯一の場であるところの家庭の意義を再認識し、この上に「新しい女子文明」を建設する以外にはないと信じます。製造・分配・消費という経済の三活動の目的は、人間存在の第一義をなす生命及び生命価値の生産そのものに直結するものでなければなりません。そして、この第一義生活に直接触れるものが主婦であるとすれば、これに対する一般の自覚と信念の確立および教養と識量の増進が欠くべからざるものとならざるを得ません。そのようなものの確立と増進をはかるためには、女子教育の新理念が生まれ、これに基づく新教育が当然興らねばなりません。ここにいう「女子」とは、単なる女性の意味ではなく、女性が直接に当面している人類の第一義的生活の再発見とその発展を意味します。東京立正女子短期大学の創立と今後の教育活動は私たちのこの胸のうちに動く新理念実現のための実践に外なりません。

われわれの尊崇する日蓮上人が、妙法の正しい理法を立てて、その下において蓮華の如き実践世界を建設せよと説かれ、また、一天四海をあげて妙法の真理に至らしめよ、と教えられたことを新らしく見直したいと思います。そして、このみ教えの精神こそ前述の新理念の中核となるものであることを信じます。現代文明社会一般に対し、また、全人類に対し、法華経精神広宣流布の一つの道として、東京立正女子短期大学の創立の意義を実現しようとするものであります。（本書は申請書に添付せられたものに二三の字句を訂正したものである。昭和四十一年四月一日）

現代教育の危機と教育改革

(特に、女子教育改革の目標について)

学 監 岩 本 経 丸

一 現代教育に対する

一般的不信と不安をさぐる

近年の教育界におこった諸事件や新現象をとおして、現代の教育に対する一般的不信と不安がとみに高まったことは否定できない。各教養雑誌や新聞が大学の現状批判をすることがしばしばであり、また、一九六六年初頭は高校入試科目および東京都の学校群問題で甲論乙駁が行われたが、特に今日の大学問題は現下の教育不信の中心点の観がある。

中央公論は一九六二年の三、六、十一月の各号から一九六三年の一月号にわたって、各角度から大学改造を論じ、一九六六年の三月号では再び大学改造論の特集を行った。

また雑誌「理想」は一九六一年四月号に大学論を特集し、一九六三年一月号には大学の危機について、そして一九六六年八月号では教育全般の危機を扱った特集号を出している。朝日新聞も一九六六年六月に大学の危機について連載記事をかかげた。大学の危機、さらには、教育そのものの危

機が論ぜられるに至った背景には、先ず第一に、次ぎから次ぎにと尽きない学生運動ないし学校騒動があり、第二に、現代学生の各方面での素質低下という問題があり、第三に、進展してやまない社会の諸要請と今日の大学諸制度との間の違和や高等学校以下の教育課程の不安定も介在している。これらの三者から、あるいはそれらの相互関連の中から今日の教育に対する不信感や不安感が醸成されてくると言えるであろう。さてそこで、そうであるとすると、このような三つの主現象の原因は一体どこにあるのかを、さらに考えねばならないのだが、そこにはまた一つの共通原因を発見しないわけにはいかない。すなわち、それは日本全般の思想的蒙昧性である。以下これについて、いささか所見を述べることとする。

(2)

ここに日本全般の思想的蒙昧性と名づけるものは今日の学生運動とそれをめぐる諸般の現象の中に端的に露呈している。前述の三点のうち第二、第三の問題はしばらくおき、第一の学生運動を取り上げてみるに、その代表的なものは、国公立大学における学寮費や学生会館をめぐる学生運動と全学連の介入のもとに行われた早大騒動や理科大事件である。これらの運動に現われた一部学生の行動を観察すると、そこには次のような五つの一般的な現象が観取される。先ずその一つは、今日の学生運動は、それに参加している末端学生が意識しているかしては別として、悉く一九世紀的マルクス思想に支配されていることである。すなわち、主題と場所が異っても、いつも同じ方法と経路をとって闘われる。そして、彼等は始めから闘いのための闘いを意図し、あらゆる説得に応じないことが予め決定されている。攻撃目標である相手の言葉じりをとらえては仲間の感情をか

きたて、これによって仲間の闘争エネルギーを盛り立てようとする戦術はまことに巧妙である。しかも相手（特に警官）が実力行使に出るように巧みに誘導して、暴力行使の汚名を相手方にきせ、自己の暴力行為の妥当性を弁明しようとすることを決して忘れない。すこしうがったようだが、この点に關しては彼等のシンパである取材記者と密接な連絡のもとに行っているようだ。これは現代学生運動の一つのパターンとなった。こういう一つのパターンがいつまでも存続し得るような日本の思想的風土が、日本の思想的蒙昧性の一つの証拠であると言わねばならない。

第二は、このような学生運動が起った場合、どこの大学の教授団も、これを説得しようとする姿勢をとらないばかりか、今までの多くの例によれば、話し合いの美名にかくれて反って事件を迷路に追込み、あるいは研究者の立場にこもって傍観を続け、教育者として、また、大学行政の分担者としての責任も忘れてしまっている。これは一体何に原因するのであるうか。こういう状態がいつまでもつづくとすると、今日の大学教員は少くとも教育者としては失格者であることになる。

第三は、このような大学の諸事件を取り扱う報道機関の取材報道の仕方である。特に早大騒動の報道において甚だしく偏向していたと思えるのは、一部学生の破壊的行動の原因を解説する場合、現代私立大学の経営管理面に現れた時代的矛盾ないし弱点に由来することが強調されるだけで、学生運動の指揮をとっている肝心の核心がすこしも開明されないばかりか、この経営管理面につながる局部的、末梢的因果関係を、巧みに全面的、中枢的問題に關連づけていたことである。しかも、警官導入が大々的に、センセーショナルに、あたかも大学側の犯した不祥事であるかの如くに報道

されたのにもかかわらず、一部学生の建物占拠や校具器物の不法接出しについてはただ事実として片隅に報道されたにすぎず、奇怪な程に寛大であった。特に某大新聞にはこの傾向が明らかに出ていた。そしてまた、殆んど大部分の他大学の当事者が何故か早大騒動や理科大事件を対岸の火災視していたのも不思議であった。こういう中で新聞のかたよった記事は早大騒動の迷路入りを助成したという観すら生ずる。

第四は、イデオロギーにあやつられている一部学生団、灰色教授団、仮面をかぶった報道機関などに対してきびしく批判を加え、それらの是正をうながすような明確な論理を持った人々や、それを強く主張するだけの勇氣を持った人が識者の中から常に出てこないことである。日本人の立っている思想的基盤は一体どこにあるのであるうか。それとも日本人は思想的には寛大であるのだからか。それとも怯者であるのだろうか。

最後に第五としてあげるところは、このような一部学生の行動に対して一般学生が全く思想的に無力であることである。すなわち、現代学生はアルバイトをしても遊ぶ金をつくるのに、人生観や世界観を求めるために苦勞しようとはしない。彼等の多くは無信仰であるなどというより以前に、思想そのものが欠如している。従って、他から迫ってくる思想的強請や脅迫に対して抵抗する論理も勇氣も持ち合せていない。早大生の大部分は、あの騒動の間に旅行に出たり、自動車の運転免許取りに没頭したり、帰省してしまったものもいるということだ。個人の尊厳も憲法第十九条の思想と良心の自由の原則などは全く忘れられていた。

(3)

さて以上あげたような第一―五の現象は、今日の学生運動につきまとい

ている。しかも、この次は某大学の番だなどと、次の闘争場所が暗示されたりして、次から次へと左翼学生を使って行う社会革命演習が展開されていく。またこのような学生運動とそれをめぐる一般状況とは全く対蹠的に、極めて楽天的な現体制エリートが存在していることは、また一方における現代の重大問題である。彼等はただ漠然とした「マンパワーの向上」ということを教育機関に要請したり、当面の産業体制の中で直接に役立つ人間を求めるのに急である。また現代の諸学校も、これらの要求に応じようとするだけで、教育本来の使命である人間教育を忘れてしまっている。そしてこのような学校が現代の一流大学、一流高校といわれるものの実体である。こういった面からも人生観、世界観の脆弱な人間が生れざるを得ない。従って、また一九世紀的思想が教条的に信ぜられる思想的蒙昧性も残在し得るのであろう。ここに現代教育の危機の根源があると言えるであろう。

二 「現代」の基本的性格と現代の病根

(1)

現代日本には思想らしい思想は存在しないといっても極言ではない。すなわち、存在するものは十年一日の如くくりかえされ、今は既に創造性を失った一九世紀的マルクス思想と、真人間の開発を考えないでただ「人的能力」の開発を説く現実思想と、そのどちらへでも都合次第で便乗しようとする便乗主義、すなわち、根本的思想欠除症の三つである。そして日本の思想界はこの三つの混線状態から成っている。こういう中にあるのは、当然一般の倫理的破綻が生ぜざるを得ない。かくして、当面の責任官庁である文部省は一般に道德教育の振興を打出し、また私立学校に対しては宗

教教育の振作の暗示までかけなければならなくなってくる。そこで長洲一二氏もいうように、産業の求めているマンパワーと文部省の説く道德心との現代の二頭立て馬車は果して何処へ向って進んで行くのかという問題もある(中央公論、一九六二年、十一月号)しかし、それとは全く別に、現代道德教育に対する無条件絶対反対の日教組や極左の思想戦指導方針との正面衝突が起り、この尾は既に長く引いていることを特に注意しなければならない。すなわち、これは普通の論理では解決できない永久対立の問題に運命づけられているのである。文部省の立案する道德教育は一九世紀的マルクス主義には絶対に対抗し受けつけない宿命がある。すなわち、彼等の教条主義的信仰によれば、プロレタリアートの独裁が実現し得ない前の体制は総て旧体制であり、旧体制下の倫理道德は論議を超越して一切虚偽であり、邪悪であるのである。新しい道德が、たとえ正しいように見えても、それは強欲は旧体制権力者の上手なごまかしにすぎないのだから、断乎として反対し、拒否しなければならないというのが現代教条主義者の考え方である。こういう発想があらためられない限り、いかに論争が続いても解決は出てこない。文部省は、こういうものを相手に説得しようとしたり、または逆に「相手にせず」などとも言わないで、こういう一九世紀的迷信思想の実体を世間に開明するとともに、現代の組織化、機械化社会の基本性格をも解説する努力を重ね、このつみ上げによって現代人の赴くべき目標と、そこへ進む道程の啓蒙に努力すべきだ。

(2)

現代社会の基本性格は、一応、巨大な組織社会、機械化社会として把握され、その中で一般の大衆化現象が起るとともに、人間の疎外感が延蔓し

つつあると考えられている。この巨大化、機械化、大衆化、人間疎外の四つの中心点のうち、最も支配的なのは人間疎外と機械化の問題である。そこで、この二つから現代社会の基本性格を素描してみる。

(3)

「人間疎外」の概念はヘーゲルに始まり、マルクスに至って具体的な現実としてとらえられた。すなわち、一九世紀中葉に至って石炭火力工場が急激に成長し、蒸気機関を原動機として各種の工作機械が使用されると共に、この人間理性の所産である新機械群と、それを芯にして立つ初期資本主義の経済体制とは、労働者の人間性を奪い、労働者を非人間的な、物的なものへ墮落せめてしまった。加えて、初期資本主義時代の過渡的現象として、人間の偉大な勝利としての機械が労働者の職を奪い、その家族を餓死せしめかねない恐ろしい敵となるという結果を生んだ。このような資本主義初期の過渡的時代においては、エンゲルスの「生産のあらゆる進歩は、同時に、被圧迫階級、すなわち大多数者の地位における退歩である」という言葉が生れてくるのも道理である。かくしてマルクスは人間に役立つ筈の進歩がなぜ人間疎外の具となったかを説明するために彼の共産主義思想を体系化した。従って、マルクス主義は一九世紀の過渡的時代の批判思想であるという事実は動かせない。そして、マルクスやマルクス時代にいわれた「機械」とは蒸気原動機と、それにつながる複雑な運動ベルトによって動かされる不健康で喧噪を極めた工作機械群のことであって、今日の美しい機械群とは基本的に性格も機構も工場環境をも異にしたものであった。この点はまことに重大であるが、何故かこの点は経済学者にも多くの文明批評家にも分析されていない。

マルクスが若し今日の二十世紀中葉に生れていたとしたら、彼の人間疎外論の内容も共産主義思想の体系も変っていたにちがいない。何故なら今日の機械は必ずしも人間を疎外しないからである。一口に機械といい、機械工業といっても、一九世紀中葉以後から二十世紀初頭にかけてと今日の二十世紀後半とは完全にその性格を異にしている。一九世紀は何んと言っても石炭火力時代であって、未だ電気モーターも内燃機関も普及していなかったが、二十世紀は電気時代であり、液体燃料時代であって、煙突を林立させ、煤煙を降らせる一九世紀的の蒸気機関工場は影を消してしまっている。このエネルギー源の相違によって機械の基本性格も性能も異なり、従って生産機構も労働者の生活様式にも著しい変化と相違が存在する。この二者の根本的相違についてオイゲン・ディーゼルは彼の技術論の中で「石炭時代では、エネルギーは人間の必要とする場所のどこへでも電線をたよりに、自分の方から出向いて行くこととなった」と述べている。このオイゲン・ディーゼルの言葉をさらに石油エネルギーに応用すれば、「今や石油エネルギーは、人間の赴くところのどこへでも同伴し得る重大なエネルギー源となった」と言い得るのである。一九世紀においては、ザールやマンチェスターのような石炭産地は、にわかに多数の人を吸収し、工業都市として大膨脹を上げた。そして、十九世紀の石炭工業都市にあっては、工場の煙突は林立し、その吐き出す煤煙は天をおおい、多数の都市愚がはびこりつつあった。工場の状況はといえば、天井一っぱいに悪魔のからくりのような運動装置が張りめぐらされ、名状しがたい騒音を発していた。このような状況は、大正の頃迄東京の城北や大阪一帯の地もおおっていたが、今や完全にそういう光景も体制も姿を消してしまった。それとうって

變つて電気エネルギーは、人間が昔から親しみ住んでいた場所の周辺やその中にまで入ってき、ある時は都市の個人の住宅や、山間の製材所や、農村のささやかな納屋の中にも赴き、そこに大小様々の機械を動かすこととなった。そして、このような二十世紀の機械は、マルクスの時代におけるような、金持ちの私物でも、独占物でも、また個人では手の届かない高根の花でもなく、万人の愛情と満足をもつて私有し得る手頃のものとしてどんどん普及して行つた。今や機械は、何人のところへも赴き、また逆にどのような大社会集団の巨大な計画にも応じて、あらゆる人間のあらゆる意志のとおりにサービスをし、しかも「人民」の誰にでも所有のできる道具となった。従つて、各種の都市悪を生み出した一九世紀の機械文明（実は蒸気機関文明）とその機械の私有者である初期資本家を目標としたマルクスの人間疎外論を今日の時代にそのまま適用することはできない。しかし、人間疎外の事實は、今日の時代でも厳として存在する。しかし、その存在する場所は大衆化現象や大きなビュロクラシーの中であり、従つていわゆる資本主義体制ばかりでなく、いわゆる社会主義体制の中にも当然存在する。何故なら、ヘーゲルのいう「精神が自己の本質から遠ざかつてその反対の物的なものに類落する」という傾向は現代の社会主義社会の方が反つて甚だしいからである。経済体制や社会機構といういわゆる下部構造が基本ではなく、反つて彼等の言う上部構造の中核である人間が根本であり、従つて人間それ自体の本性をよくつかむことが、人間疎外の解決となり、また真の教育建設の道に通ずるであらう。

(4)

今日の時代を一口に機械時代というが、この言葉の觀念もあいまいであ

る。機械時代とはどのようなことを意味するのか。現代は万事に機械がつかわれる時代であるが、その機械は無情に一定のからくりで動き、善悪を無視する没価値的精神に立つ非情なものであるというように解釈されるのが普通である。これで果してよいであろうか。機械は人間が作ったもので、人間の手足となつて、人間にサービスをおくるものである。従つて、人間が機械に期待するところは、人間の命令によつて正確に動くことで、機械それ自体は没価値的に動くところに価値がある。その基本的性格に影響されて、人間それ自体までが没価値的になるとすれば、それは人間それ自身の精神の欠陥であつて、機械の持つ責任ではない。この点をはつきり分析し、新しく人間対機械関係を解決することが、今日の教育改革の上にも重要な意義を持つてであらう。

(5)

機械時代という言葉をもどくように解釈したらよい。それは「人間の手足、その他の諸器官の機能が機械によつて画期的に代用され、また拡大された時代」と定義すべきであらう。そして今や、人間機能の一部を除く外、ほとんどの機能が機械によつて代行される時点に到達したことによつて、そういう時代が一応完成されようとしている。即ち、各種交通機械の発達によつて足が、各種作業機械の進歩によつて手が、大小の望遠鏡と顕微鏡によつて眼が、さまざまな有線無線の通信機械によつて口と耳が、そして実際に、各種の原動機の出現によつて筋肉の力が、巨大量の鉄鋼や合成建材によつて骨格が、そしてエレクトロニクスの発見によつて神経細胞迄がすばらしい性能をもつたものにおきかえられることになった。そして没価値的と言われる程に正確に、力強く動くようになった。しかも、これらの

機械は、小さい家庭の中からビツク・ビジネスの大工場にいたる迄、実に忠実に人間にサービシし、遂に奴隷を永遠に解放したばかりでなく、個人の筋肉労働や不快な労役の大部分から人間を自由にしてくれた。機械を没価値的な非情なものと解することは、その主人である人間が自らの精神的無能を告白する以外の何ものでもない。ここに、早大の高木純一教授もいう新しい「マン・マシン関係」の樹立が必要とならなければならない。この樹立される新しい関係が現代教育の一つの、しかし、重要な領域となるであらう。

(6)

さて、人間の諸機能が機械に代用されるばかりでなく、機械によって著しく高められる時代が現出したとしても、人間生活の中には機械化し得ない、また、機械とは別範疇に属する絶対的なものが厳存することを忘れてはならない。それは先ず第一に夫婦、親子、兄弟、朋友間の愛情と、第二に生命や労働力の再生産と、第三に人間教育の重要分野、特に乳児保育、幼児教育の領域である。これを換言すれば家庭生活の中心使命とそれをめぐる周辺の問題は依然として機械化し得ない領域であり、ここが人間の間たる尊厳な事実をつくり出す領域でもあるのである。そして、乳児保育と幼児教育の時期は人間の一生を決定するところの最も大切な時期であり、従ってこれを真に担当する資格者は母親とその最もよき防護者であるところの夫との二人以外には無い。この事実の再認識こそ、この人類三〇〇〇年の文化史の中で最も重要なことであつた筈であるのだが、遂に今日迄おろそかにされてきた。また、現代の人類は、この最も根源的な家庭生活の重大意義を反省しないで、ここから遊離した政治と経済の体制いぢりを

行っている。或はまた、極めて単純に、マンパワーを高めたり財貨の製造（大熊信行教授が力説されるように、財貨は生産ではなくて製造するものである——生産とは生命についてのみ言える）を増加し、ガルブレイスのいう「豊かな社会」をつくることによって、自然に家庭問題が解決していくかの如く錯覚している。否むしろ、この基本的なものには全然気付かず、盲目的に「豊かな社会」づくりを考えたり、「社会開発」や「人間開発」が物質的条件だけで考えられているのが現代である。現代とは、あらゆる面における人間喪失の時代であると言わねばならない。従つて教育そのものにも人間が失われ、大学までが工員教育や商人教育、事務員教育に随し、かくして「マンパワー」の向上があたかも機械の性能の向上をはかると同じように要請されてくる。

三、現代教育革新の目標

(1)

現代の二つの世界がそれぞれ推進しつつある「マンパワー」の向上と社会革命運動との二つは、要するに一つの現代信仰であり、現代迷信である。日本の産業体制は前者を要請し、急進的労働組合や左翼学生運動は後者の上にかまえている。そこでこの二つは、互に相容れない異質のもののように見えるが、しかし、その本質は全く同じである。すなわち、そのいずれもが科学万能思想に立ち、人間それ自体の真実の姿を見失っていることにおいて差別はない。人間が、人間を見失わないためには、実存哲学者達が述べるが如く、人間はその本質的存在においては一回性存在であり、時々刻々の創造生活を行っていることを自覚し、しかも、ここは科学の限界を

越えた領域であることを知らなければならない。このような生命現象獲得の一回性と創造性がまたげられるところに人間の物化、人間本質の頹落がはじまる。人間疎外とはこの現象に外ならない。従って人間疎外を救う道は科学や制度にだけたよるのではなくて、因縁生起の現実を如実知見する宗教的英知によらねばならない一面が厳存している。

さて、このような認識は、既に現代においてすでに目覚めつつあるように見えるが、その認識に近づいたと思われる人びとも、このような現象を根源的につかみ得ず、また、根源的に解決しようとしなくて、ただ機械文明をけなし、巨大社会や官僚制を攻撃するか、さもなくば独り高く己を持して、現代から超脱しようとするだけである。そしてまた、これらの人びとは現代教育を一つの墮落と見て、これに対して顔をしかめ、徒らに旧時代の教育精神にノスタルジアを感じている。しかし、現代の巨大化、機械化社会という本質的傾向を既往にかえずことは絶対にできない。キールのバーデ教授 (Prof. Dr. Baader, Kiel) も言うように「今日の世界事象の大いなる進行は、いささかも動かすことはできない」(『Wie leben wir morgen?』の第一論文一〇頁) のである。

(2)

現代の機械化、巨大化社会を拒否したり、逃避したりすることができないとすれば、ただ徒らに機械文明やそれによって作り出された各種の現代社会体制をなげいたり攻撃するだけで現代の解決が生れてこないことは明らかである。むしろ、機械はどこまでも人間にサービスを送る道具として見、その上に立つ人間の主体性のあり方を考へべきである。たしかに、大きな限界性と各種の制限条件のつきまといつていた蒸気機械によってつくら

れた機構には、人間性を没却し、人間性を破壊する傾向が甚だしかった。しかし、それは今日の電気と石油をエネルギーとする高度の機械文明の発達と、それを中核にして、より進歩した諸組織が出現しようとする傾向によって克服されようとしている。今日の機械文明は人間の物質的生活を平均して豊かにし、人類史上比類のない貢献をしつつあることは厳とした事実である。ところで、こういう現実からまた一つの迷信が出てきている。

それは「マンパワー」へのひたむきな期待である。しかし、先ず第一に考えねばならないのは、今日いわれる「マンパワー」の概念や、そういうものを開拓しようとする目的は、機械をつくりつたり操縦したりする人間の技術的諸能力を高めようとするところにその究極目的があるようである。ところで機械や機械が製造する財貨が目的とするところは、人間生活にサービスを送り、人間に消費されることにあり、陳列して、絶対至上のものとしてながめておくためのものでは決してない。そして、人間が機械のサービスを利用し、財貨を消費する目的は何であるかと言えば、それは人間存在を厚くし、一回性の創造的生活を意義深く営ましめることにある。人間生活の目的は、巨大な機械機構や高級な電子頭脳などをつくることそれ自体の中にあるのではなく、反って、これらを利用して人間存在の究極目的である創造的、生命的いとなみを豊かにすることにある筈である。しからば、人間の創造的、生命的いとなみとはなにか。それはまず第一に一個の人としては、一回性の自己存在を自覚し、個性的生活をいとなむこと、第二に社会的人間としては、そのような個性的生活を営む人間の共同目的をとらえ、それに協力し、この社会的目的を果すために個人の生活力ないし労働力を再生産すること、第三が、次代を担当する健康な生命を生産し、

保育すること、第四は、犠牲と愛情の場（家庭）において家族の基本的人間性の開発と陶冶することの四つであると言えるであろう。現代の時点における思想ないし教育における最も重要な仕事は、この創造的、生命的いとなみの四つの重点を自覚し、把握し、これにもとづいて真人間の姿を回復することである。真人間の姿は、急激に進行した機械化の過渡的現象の影に没して、一時その姿を消してしまったが、今やそれを回復しなければならぬ時がきた。

家庭の本質は、人類の歴史がどのように変わろうとも、その本質は少しも変わらずに存続してきたことを、さらにまた、家庭らしいものの安定ができたことによって歴史らしいものの発展が始まったということも、歴史の真実であったことを見直さねばならない。そして現代の家庭は、機械文明の生み出す豊かな富にささえられた上で、生命の再生産の場とし、原初的ロゴス成長の場とし、根源的知情意養成の場とし、そして、真実の愛情につつまれた心身安息の場として、その意義を一層深化し、多角化していかなければならない。教育の目標とするところは、これらのことを自覚し、かつ、実現するところの人間の内的な個性的精神的能力と外なる社会的技術的能力の開発にあると言えよう。

(3)

人類は古代から長く家庭を自然発生のままに放置してきた。歴史の各時代において、ここに人間生活の重心点はおかれてこなかった。かつて重心がおかれたところは王室であり、宮廷であり、教会であり、近代政府であり、巨大企業であり、大組織であった。人間本来の使命にとって副次的であるようなものが、今迄は常に歴史の正座を占めてきたばかりでなく、こ

ういうものはその時代その時代の人間疎外を現出する原因ともなってきた。その歴史的原因は何であったか。一にそれは、全人間の福祉をつくり出す労働力が、道具や家畜に背負いきれず、常に同じ人間である奴隷ないしは下位的な身分の者の犠牲によって供給されねばならなかったという矛盾、その二は、歴史の発展と正比例して進む社会機構の発展は常に内部矛盾をともない、いつもここで破綻をくり返してきたところにあった。この二つは常に歴史の安定を妨げ、従って家庭の意義に目を転ずる余裕をあたえなかった。今や、原動機と作業機の偉大な発達によって何十億万人とも計算できないような労働力源が供給され、また、各種のコミュニケーションの方法や社会科学の進歩と、それにもとづく社会的管理経営の技術の発達によって、人間の労働力管理や社会性調節の技術の問題も明るい解決の方向に向っている。労働時間の短縮や労働日の減少によって、多くのレジャーがつくり出され、またテレビによって家庭にいながら世界を知り得る時代ともなった。この時にこそ男女共に人間生活の根源である家庭生活への関心を喚起し、真実の人間を生かす根拠地としての家庭の再建をはかるべきである。若し、今後生れてくるレジャーが、山登りや、スポーツやダンスや、競馬や、オートレースなどばかりにいついやされるとしたら、平均寿命が七〇年以上にのびた人間は、その晩年をどのようにして過したらよいのかを迷わざるを得ない。単なるマンパワーに期待したり、社会機構を変革したりするだけで人間の生涯の幸福は絶対につく出せない。

(4)

さて、かく観察して来るとき、教育の第一目標は、莫なるマンパワーの増進でもなく、現代技術の修得に止るものでもなく、社会革命のための関

士の養成でもなく、マスコミに便乗するタレントをつくることでもない。

教育の各種目標のうち、究極するところの目標は、一切の機械を用いても果すことのできない創造的生命的いとなみの担い手としての人間をつくることにしばられてくる。そして、こういう努力の中に人間の生きがいがあることを教え、そのような生きがいを実現する道を教えることが教育の重大使命となってくる。従って、ここには新しい観念的教育の場が回復されるであろう。しかし、それは新教育のすべてではなく、不可欠な根拠であり、出発点であり、そして最後にはまたここが帰結点ともなるであろう。そして、この場所を具体的に指示するならば、前述の如くわれわれの家庭以外にはない。現代の「マンパワー」の要請は、このような基礎の上において行われる時において、始めて妥当性を持つてくるであろう。

こう考えてきた時、家庭の主婦の座にすわる女性の使命は重大である。大熊信行教授が指摘するように、家庭は消費の場ではなくて、反って家族の明日の生活力を再生産する場所であり、次代の生命を生産し、保育し、養育し、成人に対しては最後の安息を与え、ひとりの世界をつくり得る場所である。従って主婦たる者は、生産者であり、教育者であり、養護者であり、管理者である。この重大な使命については婦人自らの自覚も必要であるが、さらに必要であるのは、一切の男子が、自分たちが主として担当している財貨の製造事業の上にこの大切な人間的、生命的生産の仕事があるのを認識し、ここに人間究極の価値基準があることを自覚することである。そして、このような家庭が今日の一切の機械文明推進のエネルギー源となるのであるが、一方また、機械文明の製造する一切の財貨は根源社会である家庭と、それをかこむ大社会の福祉増進に奉仕しなければならない。

ここに一つの相互関係がある。経済学における循環理論は、精神的、倫理的、宗教的観点を交えて再編成されねばならない。国の政治、教育、経済の究極の目標は、世の母親に真実の宗教的愛情と喜びにみちて献身のできる場としての家庭を与えることである。そして、この家庭の成員となる者には、これをよく保ち、よく経営する能力と愛情を開発することである。そして最後の条件は、よき社会的環境と秩序の中において家庭の幸福を助成し保証する政策を行うことである。そしてこれらの一切を実現するための処置が現代教育の内容でなければならない。

(5)

かく見てくることによって、今日の教育改革と、それと関連する国や責任の地位にある諸企業、政治経済施策についての目標の素描をかかげる。

① 今日のマンパワー重視、ないし、物質的人間観、社会観にもとづく社会改革思想のあなたに、さらに新しく、真人間の樹立という教育の究極目標を明らかにする。これと同時に、小・中・高校の教育課程を全人的教育課程にあらためるとともに、大学の一般教育課程を根本的に改訂する。このために、校長、学部長、学長等の行政的業務を軽減し、教育者としての業務に安住させる。

② 大学の一般教育課程改訂の中心的所置として新学科「生活原論」を開設計、人間の発達段階、成長過程、また、その段階や過程における生活経営などについての用意を教え、特に人間生活の基底である家庭生活の意義を、生命的に、精神的に、倫理的に、社会的に把握し、これによって一個の人としての存在と社会的人間としての存在の両面を調節し、ここに現代的「知恩・報恩」の観念を確立する。

③ 高校以下の男女卒業生に対しては、成人式において、社会教育機関の手により、第二の義務教育として「生活原論」の集中講義を受講させる。

正しい方法の指導を開始する。

一九六六・九・一五

④ 女子教育は原則として短期大学以下とし、二年ないし三年の社会生活実習後には結婚ができるようにする。そのために公共団体が幹旋機関をつくる。

⑤ 家庭生活の新意義を確立するために、神島二郎教授がいう（同氏著、「日本人の恋愛観」）現代の独身者主義を改めなければならない。各機関や企業が男子を雇備する場合には、家庭を支える一個の人を雇備するという観念に立ち、妻には一万円、長子には五〇〇〇円、次子以下三〇〇〇円の扶助料を与える。この扶助料は国庫より支給し、財源は累進課税率引上げによる収入をもってあてる。

⑥ 初老期における再教育制度を設け、高年層の生産的能力を再生産し、これによって民族の教育的能力、管理的能力などの向上、生産性の増強をはかる。このためには、男子は五五歳以上の希望者を、女子は四五歳以上の希望者を再教育する。男子には主として初級、中級の管理業務、自営サービス業務を、女子には保育、各種のチューター、教員等の社会的仕事に再役する道を開く。（青年女子が教員になった場合、結婚によって退職したり、あるいは出産後、自分の子供にも、学童や生徒達にも、ともに完全に手が及ばず、どっちつかずの状態で職場にも家庭にも全能力が発揮できない今日の状態は国家的損失である。）

⑦ 家庭教育については、国ないし地方公共体の事業として、保健所の衛生指導に準ずる家庭教育相談所を設立し、乳幼児教育の理念の徹底と

戦後における女子高等教育の発展

(わが国における女子大学創設事情)

教授 藤 本 萬 治

目 次

- 一 戦前の女子高等教育の概況
- 二 新日本建設の教育方針
- 三 女子教育刷新要綱
- 四 新教育指針
- 五 女子教育研究会
- 六 女子大学連盟

七 大学設立基準設定協議会

八 大学基準協会・大学設置委員会

九 女子大学の創設

一〇 結び

一 戦前の女子高等教育の概況

明治二十年（一八八七）のことであった。木村秀子という人が女子として初めて大学（帝国医科大学）の選科に入学を許可されたということである。

わが国における女子の高等教育機関として最初に設立せられたのは、女子師範学校および高等女学校の教員養成を目的として明治二十三年（一八九〇）に東京に設置された官立の女子高等師範学校であった。明治三十七・八年戦役を経て、明治四十年代になるとわが国勢の発展とともに、奈良にも官立の女子高等師範学校が設置され、また私立の有名な女子専門学校が相續いで設けられた。なお大正に入ってから同八年（一九一九）臨時教育会議の答申に基づき国の高等教育機関の逐次拡張に対応して、多くの私立女子専門学校が設立され、大正十一年（一九二二）には、公立の女子専門学校が福岡次いで大阪、宮城、京都の各府県に設置されるに至った。こ

れらは、国勢の進展とともに女子の中等教育の拡充に伴い、さらに高等教育を受けようとする女子が多くなったためである。

わが国の高等教育は、大正時代を経て昭和時代に入り、年とともに大いなる進歩を遂げ、昭和二十年（一九四五）終戦の年の学校種別による学校数は次の通りであった。

種別	校数	種別	校数
帝国大学	七	高師男	四
官立大学	一二	女高師	三
公立大学	二	師範	五六
私立大学	二七	青年師範等	四七
		その他	三二
		教員養成	一四二

計 四八 計 一四二 計 三〇九

かように合計約五〇〇校という盛況を呈するに至ったが、そのうち女子の進学者は主として私立女子専門学校であって師範学校がこれに次ぎ、ただ一校の女子大学もなく、また当時の大学では女子の本科入学は原則として認めず、僅かに東北帝大と東京、広島両文理大が狭い門戸を開くに過ぎなかった。選科にしても女子の聴講を認めるところは極めて少なかった。世界の国中で文化の進歩し、教育の普及していると他も認め自らも任じていた国としては特異な事情であったと思う。

（註）昭和二十年（一九四五）高等教育における男女別学生生徒数（官、公、私立を合せて）

種類	総数	男	女
大学	九八、八二五	九八、六一九	二〇六
高師	四、五三三	三、一七一	一、三六二

師範	青年師範	その他	教員養成	専門	実業専門
五六、二六一	一〇、三二六	七五六	一二一、九〇一	八六、〇九二	九一、〇四九
三八、五三六	八、〇四五	七五六	八六、〇九二	八九、六八七	一、三六二
一七、七二五	二、二八一	—	三五、八〇九	—	—

女子の高等教育進学者の数が、男子に比してかように少なかったのは、大戦前の日本の家族制度や社会慣習において、女子の地位が男子同等に認められなかった因習によるもので、かつ男女共学は初等教育に限られた当時の教育制度の抑制もあって、欧米諸国に比し、わが国の女子の教育特に高等教育は遙かに後れていた次第である。女子はその宿命として家庭に留まるものとされ、高等教育を受けるのは却って妨げとなり、婚期を逸するという心配もあって、女子高等教育のために大学に進学の途を開けという制度改正の要望も起らなかったものと考えられる。

二 新日本建設の教育方針

昭和二十年八月十五日、終戦の詔書を天皇陛下のお声で学校の教室においてラジオを通じて承ったときは、非常な感激を覚えた。特に「総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レザラムコトヲ期スベシ」というお言葉に対しては長い戦争のために後れていた女子教育の振興を深く決心した次第であった。

昭和二十年八月十八日東久邇宮内閣の文部大臣に就任した前田多門は約一カ月後の九月十五日、「新日本建設の教育方針」を発表した。それによ

ると、まず第一に終戦の詔書の趣旨を体して、国民の教養を深め、科学的思考力を養い、平和愛好の念を篤くし、知徳の一般水準を昂めて、世界の進運に貢献するものたらしめようと一般方針をあげ、次に具体的な緊急対策として、教育の体勢、教科書、教職員に対する措置、学徒に対する措置、科学教育、社会教育、青少年団、宗教、体育、文部省機構の改革の十項目を示している。

昭和二十年十月九日には、前田文相（幣原内閣に留任）は東京都内の主な女子教育者を文部省に招いて、将来の女子教育のあり方を相談する懇談会を開いたが、時宜を得た民主的な話し合いであった。

昭和二十年十月五日には、「戦時教育令」が廃止された。同年十月十五、十六日には、文部省は、さきに発表した「新日本建設の教育方針」の徹底を期するため、全国の高等師範学校長をはじめ教員養成諸学校長等を招集して東京女子高等師範学校講堂において、「新教育方針中央講習会」を開会した。まず前田文相の訓示、次いで大村文部次官の挨拶があった。前田文相は、終戦後の教育刷新は政府と教育者が手を携えて干渉を受けず自主的に先手先手と改善に努力すべきであるとして、文相は学徒が戦時中、純心鋭意、戦線に銃後に献身奉公の実を挙げた点は国民の齊しく感銘する所であったが、この敗戦の帰結を見たことは吾々指導者の地位にある先輩として申訳がない。しかし、敗戦の示す幾多の教訓を学び取って、今後の教育上の新方針に資したいと思う。そもそも敗戦の原因の一つは精神方面にある。すみやかに教育界より軍国主義、極端狭隘な国家主義を排除し、平和愛好の精神を涵養し天地の公道人倫の常経に基づくべきである。吾人はここに改めて教育勅語を謹読して徳性の完成を図るとともに、国家社会

に対する純真な奉仕を全うすべきである。徒らに個人の自由を強調して責任を忘れるが如きは、民主主義の本意でない。将来の教育は極端な劃一主義に陥ることなく、真の人格の陶冶、道義の昂揚と真理の追及と理想に向って努力することが大切である。更に社会教育、女子教育、科学教育、体力の増進、芸能文化の振興、勤労教育につき新方針を示したが、特に女子教育については、「女子教育の水準を思いきって向上せしめる方針である」と強調したことは、注目すべき点であった。次に、大村次官も、その挨拶において、従来、女子教育については、男子のそれに比し極めて低調であったことは否めない。家庭生活に直接関係のある娯（しつけ）、礼法、手芸等については相当に力が注がれて来たが、政治、経済、社会等に関する教育は甚だ未熟であつてこの低度の母性に育くまれる家庭の子女に社会性、公民性、民主主義性の乏しいことは寧ろ当然のことである。今後は女子教育に一層の刷新向上が期せらるべきである。と述べている。

かように女子の教育が初等、中等、専門教育において女子に特有なものを除いては男子よりもその学力の程度において甚だ低いものであつたことは、戦前においては著しい事実であつて、女子の高等教育の軽んぜられていたことも当然であつたのである。

その後、新教育方針講習会は、戦後の交通、宿舎、食糧などの事情で全国各地において小範囲で開催されたのであるが、文部省は連合国軍最高司令部の教育政策に関する指令に先づいて、自主的に戦後のわが国の教育方針を発表してその徹底を図つたことは欣快なことであつた。

それから、一週間遅れて、同年十月二十二日には連合国軍最高司令部から「日本の教育制度の管理についての指令」が終戦連絡本部を通じて日本

「政府に発せられ、次いで同年十月三十日には「教員および教育関係官の調査、除外、認可に関する指令」が発せられ、更に同年十二月十五日には「国家神道、神社神道に対する政府の保証、支援、保全、監督並びに広布の廃止に関する指令」が発せられた。この指令によって日本古来の国民の信念であった国家神道（または純神道、惟神道）も一般宗教として判定され、また四十万人の教育者のうち十一万人が追放に処せられた根拠となった軍国主義、超国家主義の思想がこの指令の中で非難されている。同年十二月三十一日には、「修身、日本歴史、地理の停止についての指令」が出された。これら四つの指令は、日本の従来の思想および教育の進行に急ブレーキをかけ、大きな教育改革の動力となったのである。この第四の指令は修身、日本歴史、地理という国民教育の中心教科が戦前の超国家主義、軍国主義を教えたものであるという最高司令部の判断で、特にこれらの教科内容を修正して代案を作成するまでその授業を停止したのである。

三 女子教育刷新要綱

文部省はこれらの指令を受けたが一方において、同年十二月四日には、他の教育改革に先だつて自主的に、「女子教育刷新要綱」を定めてこれを閣議に諮り諒解を得てこれを発表した。その要綱によると、

女子教育刷新要綱

一 方針

男女間における教育の機会均等および教育内容の平準化ならびに男女相互尊重の風を促進することを目途として女子教育の刷新を図らんとす。

二 要領

差当り女子に対する高等教育機関の開放ならびに女子中等学校教科の男子中等学校に対する平準化を図り、且つ大学教育における共学制の採用を目途として左の措置をなさんとす。

三 措置

- (イ) 差当り女子の入学を阻止する規定を改廃し、女子大学の創設ならびに大学における共学制を実施する
- (1) 大学学部入学資格に関し
文部大臣の指定する女子専門学校卒業者等に入学資格の附与
- (2) 大学学部入学順位
- (3) 大学予科入学資格
- (4) 現に存する女子専門学校中適當なるものは女子大学たらしむる如く措置すること。
- (ロ) 女子高等学校の創設は追つて之を考慮するものとし、差当り女子専門学校、高等女学校高等科および専攻科中適當なるものを高等学校の教科と同等ならしむること。
- (ハ) 高等女学校の教科を中学校と同等ならしむること。
- (1) 基本的教科の構成を中学校と同等たらしむること。
- (2) 基本的教科の授業日数、毎週授業時数を中学校と同等たらしむること。
- (3) 教科書は中学校と同一のものをたしめることを建前とすること。
- (ニ) 大学高等専門学校の講義を女子に対して開放すること。
- (1) 女子に対し各学部の講義につき聴講生制度を採用すること。

(2) 教養向上、政治教育、科学教育等に関する大学専門学校等に対する拡張講座を開放し、一般女子にも之を開放すること。

この発表は、実にわが国女子教育の改革の劃期的声明であつて、しかも二た月前に発表した「新日本建設の教育方針」に関する前田文相の訓示にいう「女子教育の水準を思いきつて向上せしめる方針である。」と言明したことに對する具体的措置を示したものである。

こうした女子教育振興の機運に促がされて大正九年東京高等師範学校（東京文理科大学）東京工業専門学校（東京工業大学）東京商業専門学校（一つ橋商科大学）が昇格運動を起して大学に昇格した際、女子なるが故にとり残された東京女子高等師範学校は修業年限四カ年の女子の最高学府であつたところから、昭和二十二年三月三十一日学校教育法が公布されるに先ち、旧制大学令によつて国立女子大学に切替えるために、その創設趣意書並びに組織書を作成し、それに予算概算書を添えて昭和二十年十一月二十九日文部大臣に設置申請をした。その組織は文学部、理学部、家政学部、三学部より成る専門の大学であつた。文部省はこれを受理し、更めて省議に諮り、設置方針を定めてその予算を大藏省に請求した。しかし、戦後日がおおしく、国費に余裕がないという理由で、査定され、後に他の国立大学が設置される時まで延ばされた。

四 新教育指針

昭和二十一年一月一日天皇陛下は詔書を頒布された。その中に、明治天皇の樹てられた明治の初めの五箇条の御誓文の公明正大な国を回想され、

今また誓を新たにして国運を開かんとし、国を挙げて平和主義に徹し教養豊かに文化を築き新日本を建設しよう。思うに長い間の戦争も敗北に終り、失意の淵に沈まんとする傾きがあつて、道義の念は衰え、ために思想混亂の兆もあつて深憂にたえない。しかし、わが国では天皇は國民と共に在つて常に利害休戚を同じくしている。終始相互の信頼と敬愛とに依つて結ばれていて、その關係は單なる神話と伝説とに依つて生じたものではない。天皇を以て現人神（あらひとがみ）とし、かつ日本國民を以て他の民族に優越した民族であつて延いては世界を支配すべき運命を有するとの架空な觀念に基づくものではない。として歴史的眞実に基いて教えられ、今や国を挙げて当面の困苦を克服して、平和主義に徹し、教養豊かに文化を築き新日本を建設し、人類の福祉と向上とのために心を一にして相励ましこの大業を成就しようと願われた。

同年二月二十二日文部省は戦後における女子教育の推進の急務であることを認め、大学令を改正して、女子のために一般大学を開放してその入学を認めることにした。

同年三月四日には、第一次米國教育使節団が来日して、日本の教育者と懇談し、学校を視察して一カ月後その報告書を作成して三月三十一日最高司令部に提出した。その報告書は四月七日發表されたがこれによると、教育の基盤は「個人の価値と尊厳に對する認識である」と述べ、高等教育については、「これを受ける機会を少数者の特權とせず、多数者に与うべきである」ことを勧告している。

昭和二十一年五月十五日文部省は、「新教育指針」第一部前篇「新日本建設の根本問題」第一分冊（第一章より第三章まで）を發表し次いで同第

二分冊(第四章より第六章まで)を六月三十日発表した。更に後篇として、「新日本教育の重点」を十一月十五日に発表した。終りに第二部において、教育方法として教材の選び方、取扱ひ方、討論法の要領を示し、附録としてマッカーサー司令部発教育関係指令」を加えている。この「新教育指針」

は新しい日本の教育が何を以てとし、どのような点に重きをおき、それをどういう方法で実行すべきかについて、教育者の手びきとするために作られたものである。「新教育指針」第一部後篇「新日本教育の重点」においては、「女子教育の向上」の章を設け、(一)「なぜ女子教育を向上させなければならぬか」を説いて、今日の日本においてわれわれの強い関心を要求する問題は極めて多い。中でも女子教育の向上と改善とは、最も大切な、しかもさし迫った問題である。新日本建設の出発にあたり、いちはやく婦人に参政権を与えられた。また新しい憲法の草案においては、女子に男子と同等の権利を認めている。これによって女子の社会的地位は著しく高められ、それに伴って責任もまた頗る重きを加えることとなった。しかし、現在の日本の婦人が参政権をはじめ、新たに法律によって与えられるいろいろの権利を正しく用い、それに伴う義務と責任とをりっぱに果たすことがどうしてできるであらうか。女子を現状のままに止めておいたのでは、それはむずかしい。けれども教育さえ十分に与えるならば、その新しい義務と責任とをりっぱに果たし得るにちがいない。新しい民主的日本をつくるためには、国民の半数を占める女子の教育を革新し向上させることが、極めて大切なことである。次いで(二)「何が女子教育の向上を妨げていたか」を反省し、(三)「女子教育は何を以てすべきか。」(四)「どんな点に力を入れるべきか」(五)「女教師はどんなに重い責任を負っているか。」などを

述べているが個人的社会的責任に対する教育、科学教育、経済教育を押し進め、従来の家庭人から男子と相互していく社会人としての教養を身につけ、また子女の教育にも十分な資格を持つ女子たることを要望している。

五 女子教育研究会

終戦後におけるわが国の教育は、昭和二十年十月五日には「戦時教育令」が廃止され、次いで同月十日には「学徒勤労令」が廃止されて、長い間の緊張と努力が空しき平静に復したが、疎開、勤労、出征から帰って来た学徒を迎えても、学園は荒れ、校舎は戦災で立ち入る所もない有様であった。連合国軍最高司令部の教育に関する四つの指令、文部省の「新日本建設の教育方針」および「新教育指針」の発表があつても、教育の現場においては、教室を初め教科書、教具等を整備することが容易でなく、その上、極端な食糧難と住居難に耐えて、しかも敗戦の精神的打撃に克ち抜いていく、当時の教育者の苦悩はむしろ戦争のさなかの緊張した生活よりもつらかった。しかし、教育は結局は現場の仕事であるので、教育者が奮起しなければ、新教育の効果を取めることはできない。敗戦の国民の立ち上り、わけても教育を使命とする教師の自発奮励を要する時であった。

昭和二十一年八月十日には、新教育制度のあり方を審議する「教育刷新委員会」官制が公布された。同委員会は自主性をもった会議であつてその第一回総会は九月七日に開かれた。十二月二十七日には「教育の理念及び教育基本法に関すること」の建議書を作成提出したが、その中に女子教育の原則を基本法に明示すべきことを要望している。教育刷新委員会のこの

建議、およびさきに述べた文部省の「新教育指針」後篇の「女子教育の向上」の意見が同年十一月十五日に発表されるに先ち、教育者の側から自主的に盛り上った教育改新運動の一つに、「女子教育研究会」の設立とその活動があった。同会は都内著名な女子教育者学識経験者二十四名が発起人となり、その評議により、次のような趣意書および規約案を作り、昭和二十一年八月二十日付をもって書簡を發し、広く女子教育に関心を有する同志に参加を求めた。

女子教育研究会設立趣意書

女子教育は新日本建設をめざす教育方策中、特に重要な分野である。又新しい社会情勢の展開はその劃期的刷新に絶好の機会を与えている。然るに女子教育問題に関する輿論には必ずしも統一せるものがなく、研究もまた十分なりと言ふことを得ない。為に女子教育の革新を有力且つ具體的に推進し得ない憾がある。我等は茲に鑑み、広く女子教育家及び女子教育に特別の関心を有する人々と相携へ、新情勢に即応する女子教育改革につき意見を交換し懇談を遂げ、必要な調査研究を行い時宜によつて、その成果を発表し以て女子教育刷新に関する有力な輿論を作興し更にその実現を促進する急務を痛感する。これ女子教育研究会を企てるに至つた趣意である。

女子教育研究会規約

- 一、名 称 本会は女子教育研究会と称へる
- 二、事務所 東京都小石川区大塚町東京女子高等師範学校内
- 三、目的 新情勢に即応し女子教育改革についての有力な輿論をつくる。

四、事業

- (1) 毎月一回研究会を開き意見の交換懇談をする。
- (2) 女子教育改善に必要な調査研究をする。
- (3) 調査研究の成果は時宜により一般に発表し又は当局その他関係方面に進言する。

五、組織

- (1) 女子教育家又は女子教育に関し特別の関心を有する人で評議員会に於いて承認した者を以て会員とする。
- (2) 本会に左の役員を置く。

評議員 若干名 内一名を評議員の互選により評議員代表とす。

幹事 若干名 内二名を常任幹事とし庶務及會計の事務を取扱ふ。

評議員、評議員代表及幹事の任期は二箇年とす但し重任を妨げない。

六、會計

- (1) 会費は一箇年十二円とし会員各自の負担とする。
- (2) 学校又は団体を代表する会員は一箇年百円宛別に釀出する。
- (3) 其の他の有志の寄附。

- (4) 毎年一回会員總會に於て会務並に會計の報告をする。

女子教育研究会は、有名な女子学校の校長教員その他有力な学識経験者等多数の賛同を得、同年九月十日第一回總會を東京女子高等師範学校において開会した。当日は「今後に於ける女子の使命と其の教育」という題目で会員各自、自由に意見を述べたが、中心の問題となつたのは、男女共学制および女子の高等教育に関するものであった。この研究会には、連合国

軍最高司令部民間情報教育部（CIE）から女子教育担当のミス・ホームズ博士（Dr. Miss Holmes）その他がオブザーバーとして出席して、アメリカの教育事情や女子教育に関する意見を述べて助言奨励をした。研究会第二回総会は十月十日に開会された。その会においては、さきの第一回総会において小委員に付託された「女子大学特設に関する問題」案が付議され、熱心な討議の結果、次のような決議を見るに至った。

女子大学特設に関する趣意

新日本の建設と運営とに關して女子が受持つべき分野が拡張せられ、その任務が重大になった今日、女子に対する高等教育がますます緊要なものになったのは言ふまでもない。従つて女子のための高等教育機関の整備拡張については何人も異論なきところである。文部省はさきにこの情勢に鑑みて帝国大学その他各大学を開放して男女共学の制の下に、最高学府へ女子学徒の進出する途を開いた慶賀すべきことである。男女共学は基本方針としてまことに尤もであるが、殆ど男子学生のみを收容して来た我が国大学の現在の人的物的設備において、永い間男女学生を別々の学校（中学校以上の）で教育して来た社会的慣習の陋勢の牢固たる現状において、男女交際の社会的訓練の未だ整っていない社会生活の実状において、男女共学のみの一筋道を通ることは、事実の問題として設備の不完全から来る幾多の不便と、折角高等教育を志望する良家の女子の熱意を共学に対する父兄の危惧の故に、減殺してしまふ恐れがないでもない。今は何を措いても一人でも多くの女子に高等教育を受けさせるように仕向けて、教育の力によって、進歩をばば社会の因習を打破しなければならぬ時であるから、共学という根幹街道を助ける補助通路とし

て女子大学を多数に創設することが必要であり且有効である。

世には、女子大学を創設する費用は多額で現にある大学を開放するのが経費を助ける途であると説く主張もあるやに聞く。これは皮相の見解である。現に男子学生のみを收容する意図で設計せられた校舎を改築し増設して女子学生をも收容するにふさわしいものに切替えるための費用は、現在的女子専門学校の校舎設備を充実転用するの費用よりも遙かに大なるべきである。巷間また説をなして、女子大学を設立しようとしても教授陣容を完備することが困難であろうというものがあるが、これもその一を知つて二を知らぬものである。既設の大学に優良なる女子の教職員を多数に招聘しなければならぬ困難や女子専用の寄宿舎、体育、社交等の施設を新設する困難に比較して、現今の女子専門学校を改組して新たに若干の教職員を招聘することの困難が一層大きいと誰が言い得るであらうか。かう見て来ると、共学制度を完備するに必要な経費や困難よりも遙かに少いそれらによつて女子大学は整備し得るのである。かくて女子大学は我が国の現状に於て、可なり大きな重要性と使命とを以て、比較的に容易に実現し得るのである。（以上）

女子教育研究会は第二回総会においてこのような趣意を議決するに先ち、委員会の手で、女子大学設置に関する意見調査を全国代表的女子専門学校十二校を選び、生徒数八、一一名の意見を集め、また高等女学校二校を選び、それに子女を学ばせている父兄九七三名から回答を得た。その問題、回答は次の通りである。

女子大学についての意見調査

問 題	答	(%)	父兄	学生
(1) 女子の高等教育の為には女子大学が出来ることが最も 適当です	{ 然 否	93.2 2.0	89.1 9.0	
(2) 日本の現状から女子大学設立は	{ 極めて適切です あることが望ま しい 不用です	44.4 53.2 2.2	35.4 60.0 4.2	
(3) 女子大学は男子大学と同程度であることが必要です	{ 然 否	87.6 11.9	93.0 5.8	
(4) 完全に同程度同資格であるとして男女共学と女子大 学と何れを選びますか	{ 共学大学 女子大学	31.8 67.0	64.0 36.0	
(5) 女子大学に於て如何なる学部を置くことが必要ですか 五つを選んで○印をつけて下さい	{ 文 学 部 法 学 部 経 済 学 部 理 学 部 家 政 学 部 医 学 部 薬 学 部 農 学 部 工 学 部	91.2 44.5 71.5 48.5 87.5 82.0 52.2 12.9 4.6	97.0 62.0 73.5 73.5 74.0 72.0 30.0 12.5 5.1	
(6) 日本に男子の大学は官公立合せて50校位あるが女子大 学は何校位が適当ですか	{ 1 校 2.3校 5.6校	1.0 33.4 33.4	2.3 27.0 46.6	
(7) あなたの学校が大学になることを	{ 熱望する 望ましい どうでもよい		42.2 42.8 12.8	
7 男女共学の大学に子女を送るのは(父兄)	{ 好ましくない 差支ない この方がよい	36.7 54.2 10.8		
(8) 東京帝大の本年の女子入学者は19名であったがこの状 態で満足ですか	{ 然 否	14.4 84.2	11.2 87.3	
(9) 男女共学の大学に於ては女子は何割位を占めるのが望 ましいですか	{ 1 割 2.3割 4.5割	6.7 57.4 35.6	4.5 48.1 45.2	
(10) 男女共学の大学に於ては女子の教職員を加えることが 必要です	{ 然 否	90.0 8.1	84.3 12.8	
(11) あなたは事情が許すならば大学教育を受けたいと思 いますか	{ 然 否		88.0 9.5	
11 あらゆる事情が許すならばあなたのお嬢さんを大学へ 進ませたいと思いますか(父兄)	{ 然 否	87.0 12.0		

備 考

- (1) 学生とあるは広島女専、同志社女専、大阪女専、金城女専、宮城女専、暁女専、東京女医専、共立女専、津田塾専、日本女子大、東京女子大、東京女高師の12校の生徒8,111名
- (2) 問題の回答は以上の諸学校の文科、理科、家政科の科別に求めた計数があるがここには科別を略し、通計を掲げた。
- (3) 父兄は洗足高女、桜町高女その他9校の父兄計973名の回答を掲げたがその多くは回答者自身の子女をどうするかというのでなく一般に父兄として見た女子教育の問題として回答してもらったものである。

文部省が女子に既設の大学を開放する共学制をとって入学の機会を与え
るとするのは、基本的方針であつたのであるが、女子教育研究会はたゞそ
の方針だけによるのではなく、特に女子大学を設立することが、基本的方針
を補う意味において必要であくまで女子の大学進学のを広くかつすみや
かに開きたいという実情に即する主張であつたのである。しかし、この主
張の奥には、女子教育の特性を大学教育の上にも生かしたいという本質的
の要求と伝統尊重の念をもつて、自校を大学に昇格させて発展させたいと
いう意図の含まれていたことは見のがせない事実であつた。このアンケー
トは大体女子教育研究会の主張と一致する結果を示しているが問題四の女
子大学と共学大学の何れを選ぶかという問いに對し父兄は女子大学を欲す
る者多く、学生は反對に共学大学進学を望む者の多いのは共学制が新しく
て珍らしく、かつ異性の友だちを欲した當時の若い人たちの解放された心
持ちをよく現わしたものと思われる。しかしながら、一国の教育はその国
の歴史および社会の変遷のうちに生成發展するもので一校の校風もまた創
設の理想に基づき、長い年月にわたつて教師、生徒の協力によつて成立す
るものである。一朝の制度改正や他国の教育制度そのままの移入によつて
生命ある有力な教育の場が急に發生するものではない。戦争に勝つた英米
仏には特有な教育が存し戦争に敗けた独、伊にも特色ある学風が残つてい
る。女子教育研究会は女子高等教育の場としての従来の女子専門学校を思
ひ切つてその程度を大学にまで高め、アメリカの有名な女子大学プリンモ
ア等に倣ひ、日本に根をおろす独自の女子大学たらしめようとする希望に
各自が燃えていた。

女子教育研究会は、毎月總會を開いて種々の問題につき討議を重ねて決

議を行つた。そのうち重要なものに、「家政学を大学における専門研究学科
とすること」であつた。この決議は女子大学の内容と不可分の關係を有
し、その決議が實現されて大学における家政学科の設置を見るに至つた経
過は別に述べることにする。女子教育研究会においては、会員は戦争のた
め久しく正常の教育に遠ざかり、専心女子教育の研究のできなかったのと
新教育方針による女子教育のあり方について探究しかつ久しく知れなかつ
たアメリカの教育状況をCIEの助言者たちより聞くことのできたので会
員の研究討議は極めて熱心なものであつた。ところがホームズ女史はたゞ
研究するばかりでは効果が少い。討論で決議に達したものは、制度として
直ちに実施を望むべきものであるから、決議事項は關係当局に民意として
訴え、すみやかにその實現を期するがよい。と勧告したので、その助言に
従つて女子教育研究会は決議書をそれぞれの当局に提出したのである。

六 女子大学連盟

女子教育研究会の研究課題のうち中心となつたものは、日本にこれまで
一校もなかつた女子大学を創設することであつた。さきに述べたようにそ
の趣意は同会の決議となり、当局へ要請したのであるが、ホームズ博士は
研究会の世話人をCIEに呼び、ほんとうに日本に女子大学を作りたい決
心なら、たゞ研究の結果を当局に訴えるだけでは、實現はむずかしい。女
子教育者は、自校を女子大学とする自信のある者だけで連盟を結成し輿論
を喚起して自分達の力で大学設立を推進するのが民主的方法であると強調
した。これまで何事も文部省の発意によつて教育諸般の制度が改革されて

いたことに慣れていた会員たちは、ホームズ博士の民意尊重の勧告に驚いた。当時の情勢からすれば日本の教育制度の改革は最高司令部の指令、助言によるか、文部省の自発により最高司令部との合議によるかの方途をとったものであるが、教育者の要望を政府、社会に訴えることは民主的方法として選ばれて適当なことであると思われた。

そこで、女子教育研究会の会員校のうち女子大学設立を希望する学校はホームズ博士の勧告を容れ、有志の学校だけでその目的で連盟を結成する準備委員会を昭和二十一年十月九日に開会し、数回の委員会で協議の結果、昭和二十一年十二月二十日有志の女子校十一校は創立年代順東京女子高等師範学校、日本女子大学校、津田塾専門学校、帝国女子専門学校、同志社女子専門学校、聖心女子学院専門学校、東京女子大学校、大阪府女子専門学校、実践女子専門学校、明治女子専門学校、青山学院女子専門学校）に名を列ね、次のような趣意書並びに連盟加入の条件を添えて、女子大学の設置を希望しかつその資格があると認められる全国的女子専門学校に連盟加入の招請状を発送した。

女子大学連盟（仮称）結成趣意書

日本再建の途上には、根本的に刷新を要する重要にして困難な幾多の教育問題が山積している。その為、教育刷新委員会を始め、公私さまざまな機関は是等の諸問題につき熱心に研究討議して居られるが、多年の積弊を一掃し、真に民主的教育の実を挙げる為には、教育当事者が自らその責任を分担し、積極的に教育再建の第一歩を踏み出さねばならぬと考える。しかもわが女子高等教育は、今や多年の懸案を一挙に解決すべき好機運にさへ当面している。そこでわれわれ同志の十一校は、本年十

月以来再三協議を重ねた結果、女子大学連盟の結成を議決し、左の目的を以てその実行に着手することになった。

まず第一にわが連盟は、加盟諸校が将来に於てそれぞれ女子大学を建設することを期待し、これに必要な諸般の事項を整備して、その実現に努力せんことを期している。

第二にこの連盟は（女子大学が建設せられた場合）加盟大学の堅実な発達を遂げしめるために、女子大学教育の基準を確立して、その維持、運用の有機的中枢たらんことを期している。

第三にこの連盟は、将来大学を設置せんとする諸校に明確な指針を与え、その発展を補助すると共に、一般に女子高等教育の水準を高め、その普及を促す推進力たらんことを期している。

第四にこの連盟は、国内又は国際大学連盟の一貫として加盟大学を代表し、大学教育一般の振作に参与すると共に、世界文化の交流、並にその向上を助長する一機関たらんことを期している。

自肅自律はわが連盟の基調である。比較的厳格な加盟条件を設けたのも、偏にこの連盟の本質と使命に忠実ならんが為であり、またこの連盟をして、真に存在の意義あらしめんとする念願に他ならぬ。

茲に連盟結成の趣意を載して同志諸校の御参加を招請する。

連盟加入の条件

第一、連盟に加入せんとする学校は予め左記の女子大学建設に関する一般方針を承認すること

- 一 教育刷新委員会の立案せる、六・三・三・四制案を支持し、特に上級中学（三年制）と大学とを直結する単一体系の長所を強調し、

この連盟を通して極力この案の実現に努力すること

- 二 右改正案が可決実施せられた場合、成る可く速に大学を設置せんとする用意あること

- 三 右大学設置の場合は相当のリベラル・アーツ（一般の教養学科例へば哲学、科学、歴史、語学等）を課すること

- 四 右大学では大学入学の実力を養成する資格学校（上級中学）の卒業者若くはこれと同等以上の実力ある者を入学資格とすること

- 第二 連盟に加入せんとする学校は原則として左記条件を具備するものであること

- 一 創立 創立後満十年以上経過した学校であること

- 二 設立者 官立、公立、又は財団法人であること

- 三 目的 専攻科の外、一般教養学科に重きを置き相当多くこれを課するものであること

- 四 校地 五、〇〇〇坪以上 但し学校敷地として使用しない所有地実習地等は除くこと

- 五 建物 総建坪六〇〇坪以上 但し女子専門学校のみに使用し且つ校舎、体育館、実験室、図書館等教育に直接使用する建物であること

- 六 種別 文科、理科或はこれ等と、若くはこれ等の一つと家政科とを有する学校であること

- 七 学科 文科は国語科、外国語科、法律科、経済科、歴史科等、理科は数学科、物理化学科、家政科は保健科、育児科、被服科
右学科中二学科（例えば国語科と外国語科等）以上を有すること

但し医学、齒科、薬学、厚生、家政、音楽、美術、体操等の学科のみを有する諸学校については後日考慮すること

- 八（学級数と生徒数との割合を参考にすること）

- 九 生徒数 当該学科の生徒総数二〇〇名以上を有すること

- 一〇 教授 専任教員（教授、助教授等）一学級につき一名以上を有すること

- 一一 資産 学校を維持経営するに必要な相当の資産を有すること

- 一二 経費（経常費現況を参考にすること）

- 一三 図書館（設備現況を参考にすること）

- 一四 図書数 和書洋書一〇、〇〇〇冊以上を有すること 以上

この招請に対する申込期限を昭和二十二年一月十日とし、申込者につき発起校の合同協議の結果五校が認められ、合計連盟校は十六校となった。条件が厳しかったので加入校は少なかった。

女子大学連盟第一回総会は昭和二十二年四月十二日に開会された。ここに女子大学設立を期する連盟が結成を見、いよいよ有力な運動を開始するに至った。なお連盟委員会を四回開き、同年十一月二十八日には委員会を改めて連盟懇談会と称し、懇談会を三回開き、昭和二十三年三月三十一日第二回総会を開会した。これらの諸会議は開催校を交代で受持ち官、公、私立の学校の校長、教授等が出席し、協力して女子大学設置、経営に関し、あらゆる問題を熱心に調査、討議し、あるいはCIEよりオブザーバーとして職員の出席を求め、または学識経験者、国会議員などを招いて広く女子大学設立の趣旨と教育施設の実際を認知してもらった。諸会議の結果は、とりまとめて会員校に報告し、関係当局にも提出し、ひたすら女子大学出

現に努力した。この連盟は女子大学設立の目的を達した後においても、懇談会として各大学の情報交換と問題研究のために暫らく継続された。

七 大学設立基準設定協議会

これより先、昭和二十一年十月には、文部省内に「大学設立基準設定に関する協議会」が設けられ、東京都内の国公私立の代表的な大学より十名の協議員が依頼され、大学の設立基準を協議することになった。その第一回の会合は、同年十月二十九日に開かれた。この協議会は、翌二十二年一月十四日に協議員を増し、改めて二十六名（学校側二十三名）が依頼された。その中には東京女子高等師範学校、津田塾専門学校、日本女子大学校、東京女子大学校、聖心女子学院専門学校の五校がいずれもまだ大学ではないが、これに加わることになった。というのは、女子大学における学科課程、厚生補導および施設経営等の基準については女子として特別の注意を要するという考慮に出でたものであった。この五校はみなさきに述べた女子大学連盟結成の発起校で、いわば連盟校を代表するものであって、後に連盟の研究討議の結果は、この協議会に反映する結果となった。この協議会は、同年三月二十五日の会議からC I Eの示唆により、従来のように文部省の相談にあずかるという会議の性格を改めて、この日から大学自体の協議によって大学基準を定め、各大学がその水準を高めるように努むべきであるという主張から協議会自ら東京工業大学長和田小六を会長に選び、自主的に運営することとなった。協議会の組織は専門の分野に従って、文科系学部分科会、理科系学部分科会および女子大学分科会の三分科会に分

れて、それぞれの協議員の配属を定めた。前記の五つの女子校は女子大学分科会に属し、女子大学設立基準案の設定を分担し、各問題をまずそれぞれ自校において調査研究し、女子大学連盟委員会とも連絡をとり、しばしば女子大学分科会を開いて審議を重ねて遂に成案を得てこれを和田会長に提出した。昭和二十二年六月十七日三分科合同して大学設立基準設定協議会総会が文部省において開会され、女子大学分科会の提出した女子大学基準案は文科系学部分科会および理科系学部分科会の提出の二案とともに付議され、審議の後三案いずれも可決決定を見るに至った。

その後、この成果につき広く全国の大学（大学移行を望む高専を含む）の意見を聞くため大学設立基準に関する全国大学連合協議会を開催する運びとなり、同年七月七日には、連合協議会が開会され、さきの大学設立基準設定協議会の得たる成果を議案として慎重に審議してこれを再確認した。ここにおいて女子大学設立基準が大学の総意によって具現し、女子大学の設立が約束されたことは特記すべきことである。

八 大学基準協会・大学設置委員会

同日の全国大学連合協議会においてなお一つの重要な議案は大学基準協会の設立の件であった。これも全会一致で設立を決議され、翌七月八日大学協準協会の総会が行われてその発足を見るに至った。さきの大学設立基準設定協議会、同連合協議会の議決した成果は一応大学基準協会に引き継がれることとなり、同協会においてその後多少の修正を見たが後の新制大学設立の基準として採用されることになった。大学基準の改訂その他諸

基準の設定、改訂および大学基準協会の活動については昭和三十二年六月二十日発行された大学基準協会十年史に明らかである。文部省は昭和三十一年十月二十二日、「大学設置基準」を省令として制定公布した。

これより先、昭和二十三年一月十五日には「大学設置委員会」官制が公布され、同委員会は大学基準協会の制定した「大学基準」を採択し、また同年二月二十三日には、大学設置認可に関する基準要項を文部大臣に答申して新制大学設立認可申請の受入体制が全く整ったのである。

九 女子大学の創設

以上記述したように、文部省の「女子教育刷新要綱」の発表とともにこれに即応して女子教育者による「女子教育研究会」の発足を見、女子大学創設の要望となり、更に女子大学設立を要請する女子校の「女子大学連盟」の結成に発展し、熱心なる運動が起り、大学基準協会の前身となった「大学設置基準設定協議会」に連盟校中の五校が加わり、文科系、理科系の分科会と並んで「女子大学分科会」として協議会を構成し、新制大学特に女子大学の設置基準を制定することに協力し、戦後日本における女子高等教育（女子大学、女子短期大学）の展開に対して尽くした女子教育者の役割と自発的活動は注目すべきものがあつた。

さきに大正時代一つ橋高商、蔵前高工、東京高師の起した所謂大学昇格運動により、一つ橋商大、東京工大（大岡山）東京文理大の大学昇格を見たが、東京女子高等師範学校の如きは最も古い女子の最高教育機関でありながら、この昇格に加わらず、二十七年間顧みられなかったのであるが、

女子教育の劃期的一新に際し、従来の如く政府直轄の学校としてその意図のまま改廃される慣習を脱して自ら国の女子教育全体の動向を見つめ、公私立の女子校と手を携えて他の新制国立大学は男女共学制をとるにかかわらず、創立以来の伝統を守り数少い女子の国立大学設立に踏み切つたのである。ここに至るのは、女子大学の教育の進んだ米国の事情に通じたCIEのホームズ女史をはじめ関係の人たちの援助があつたためであつた。

昭和二十三年三月、新制大学設置準備のできた学校で認可申請書を文部大臣に提出していた公私立学校（公一、私一一）は大学設置委員会の審査の結果十二校が始めて新制大学として認可された。そのうちに日本女子大学、東京女子大学、聖心女子大学、津田塾女子大学、神戸女学院大学の五つの女子大学があり、いずれも女子大学連盟校であつた。

昭和二十三年三月文部省は「日本における高等教育の再編成」という冊子を頒布し、また同月CIEと協議して「国立新制大学実施要領」を発表した。いわゆる大学設置十原則といったもので、その内容は次の通りである。

国立新制大学実施要領

国立新制大学の実施に当っては、その大学が同一府県の同一都市又は同一の場所にあることが望ましいが、現状はこれに副わないものがあるので、現在の学校の位置、組織、施設等の実情に即して、次の諸原則によって代替え、なるべく経費の膨張を防ぐと共に、大学の基礎確立に努める。

一、国立新制大学は特別の地域（北海道、東京、愛知、京都、大阪、福岡）を除き、同一地域にある官立学校はこれを合併して一大学とし、一府県一大学の実現を図る。

二、国立新制大学における学部又は分校は他の府県にわたらぬものとする。
三、各都道府県には、必ず教養及び教職に関する学部若しくは部をおく。

(註)

1 教養(リベラルアーツ)に関する学部、部は、大学の組織、規模に応じ、教養学部若しくは文理学部、文学部及び理学部とするもの、学芸学部の教養部(学芸部)とするものとする。

2 教職に関する学部、部は、その組織、規模に応じ教育学部とするもの、又は学芸学部の教育部とするものとする。

3 教育学部又は教育部は他の大学の学生にもこれを利用できるようにする

四、国立新制大学の組織、施設等は、差当り、現在の学校の組織、施設を基本として編成し、逐年これが充実を図る。

但し青年師範学校はこれを廃止し、教員及び生徒に關しては、学校教育法第九十八条第二項により措置する。その施設は新制大学にこれを転用することができる。

五、女子教育振興の爲に、特に国立新制女子大学を東西二箇所を設置する。

六、国立新制大学は、別科の外に、当分教員養成に關して、二年又は三年を修了して義務教育の教員が養成される課程をおくことができる。

七、各都道府県及び市において、公立の学校を国立新制大学の一部として合併したい希望がある場合には所要の経費等につき地方当局と協議して定める。

八、大学の名称は、原則として都道府県名を用いるがその大学及び地方の希望によっては他の名称を用いることができる。

九、国立新制大学の教員は、これを編成する学校が推選した者の中から、大学設置委員会の審査を経て選定される。

十、国立新制大学は原則として、第一学年より発足する。

十一、国立新制大学への転換の具体的計画については、文部省はできるだけ地方及び学校の意見を尊重してこれを定める。

意見が一致しないか又は転換の条件が整わない場合には、学校教育法第九十八条により、当分の間、存続することができる。

(註) 国立新制大学の具体的編成計画に當って懸案になっている事項は、文部省と大学設置委員会の責任においてこれを解決するようにする。

(以上)

この十一原則によって国立新制大学の設置方針は決定した。さきにCIEの意向として国立総合大学を東京、京都、大阪、北海道、九州、東北、名古屋の七帝国大学の外、中国、北陸に各一校増設し、その他の国立大学はすべて地方に委譲するという示唆は中止となり、ここに国立新制大学実施の方針が確立したのである。そうして十一原則のうち、女子の高等教育の發展に關係ある第五原則につき文部省は次のように説明している。すなわち、

「旧制の大学がおおむね女子にその門戸を閉ざしていたのに対し、新制の国立大学は、教育基本法の原則に従い、男女共学の方針を貫くこととされたのであるが、女子教育の特殊性を配慮して、お茶の水女子大学と奈良女子大学だけは、女子だけが入学する学校として、女子の高等教育の振興に資するとともに、それらの学校の過去の伝統を尊重し継承することとなったのである。」と。

新制国立大学は男女共学を原則とするが、女子教育の特殊性を配慮して全国にただ二つだけ国立女子大学が設立され、それも学校の過去の伝統を尊重して継承し、女子の高等教育の振興に資するという理由であって、十一原則中第五原則は特に二校に限られた原則であった。広島女子高等師範学校は第一原則が適用されて広島大学に合併され、奈良女子高等師範学校は辛うじて第一原則の適用を免かれたのである。その他東京、広島、金沢、岡崎の四つの男子高等師範学校はいずれもその地方の大学に合併されたのである。しかして東京、奈良の両女子大学もその性格が大きな問題となり、従来の女子教員養成の任務はいわゆる解放制によって一般大学と同様、教職課程として残し、文教育、理家政（翌年理学部、家政学部と各独立）の二学部から成る専門の大学に決定したが、専門か教養（リベラルアーツ）かという問題でも東京女高師と大学設置委員会の間に討論があったが、学校側の希望が遂に認められて二学部（一般教育、教職課程を含む）をもつ専門教育の一般大学として確定するに至った。

十一原則の適用については、殆どどの大学で問題のないところはなく、合併各校の伝統、地方的利害、戦災による被害、財政困難等により、大学設立後においても幾多の難問題を残している状況であった。しかし原則発表後は文部省、地方当局、学校側の立ち上り協力はめざましいもので、同年十二月九日には文部省に「新制大学推進本部」が設置されて全国に大学切替措置が活潑に講ぜられ、翌二十四年二月には国立新制大学設置について大学設置委員会の答申があり、五月三十一日「国立大学設置法」公布されて、六十八校の新制国立大学の設立が決定された。またこれに先だち二月二十一日、三月二十五日に公私立大学九十八校が設置認可となり、昭和二十

十四年度において設置された新制大学は国公私立計百六十六校となり、これに前年度発足した公私立十二校を加えると合計百七十八校に達した。

昭和二十一年四月七日発表の第一次米國教育使節團報告書の中に、高等教育に関しては、「少数者の特権ではなく、多数者のための機会となるべきこと」と説き、大学の増設を勧告したのであるが、その後、戦後の荒廃の中から立ち上り、僅かに十数年にしてそれが実現し、かように女子のために大学は開放され、特に女子大学の多数の設立を見、大学院まで設置されたことは、実に驚異的進歩といわなければならない。更に学校教育法に基づき昭和二十五年以来、文部大臣の認可を受けて二年または三年の短期大学を当分の間設置することを認められていたのが年を追うて増加する傾向にあったので文部省は昭和三十九年学校側の要望に応え、学校教育法の一部を改正して当分の間という制限を改めて恒久化し、これを大学の中に安定させ、国民生活の実情に適する制度とした。短期大学は特に女子に対して高等教育を受ける意欲を高める制度となり、女子短大数も女子学生数も年々増加の傾向を示している。

(註) 昭和41年度大学数
昭和40年度学生数

	大学数	学生数		大学数	学生数
区分					
国立	74 (2)		国立	24 (一)	
公立	37 (6)		公立	39 (13)	
私立	235 (67)		私立	350 (242)	
合計	346 (75)		合計	413 (255)	
		総数 937,556			総数 147,563
		男子 785,437			男子 37,175
		女子 152,119			女子 110,388

備考 () は女子校内数,

一〇 結 び

最近女子の大学教育、特に女子大学については、ジャーナリズムの問題となっていて、あるいは女子の大学教育を受けることの可否の点までも論議されているが、それは単に女子に大学教育が開放されたという問題にあるのではなく、男女を問わず、新制大学創設以来の大学教育の成果に対する反省であって、新制大学における教育において人間形成や学問、技術の指導および教員、施設、財政の全般に亘る新制大学の価値批判の問題で、初等中等教育改善の問題に連なる新学制六三三四の全般につき改善進歩の時期に到達したものと見るべきである。終戦によって改められた教育刷新は民主主義を枢軸とする大きな転回であって日本国憲法をはじめ教育基本法その他国民生活全般に亘る改新であった。それが僅かに二十年の歳月を経て今日の教育の量的普及、質的拡張を見るに至ったことは、政治形態の発展、国民経済の成長とともにあの荒廃、欠乏、意気銷沈の中よりの立ち直りと同様、外国人の驚異とするところであるが、それは明治維新に始まる八十年の近代国家の成長、いなそれよりもずっと溯って日本文化の古き伝統に基礎を置くものであることを自覚しなければならぬ。回転の機が内から起るにしても終戦後のように外から与えられるにしても、日本人の英智は他国の批判を超えて躍進する。持てるものの上に与えられるものを摂取醇化して進むところにわが国文化の特徴を見る。顧みると戦後の教育はまことに激変であった。政府、議会地方当局、CIE当局、教育者の間で話し合いと協力によって幾多の苦難を克服して従来の教育制度に刷新を

加え今日の情態に達したのである。今やこれらの経過と現状を反省して自主的に改善進歩の道を講ずべき時である。新日本教育建設二十年を回顧するとき、一般公式の文書を信憑とすることの大切であるのはもちろんであるがその事に当った人々のその位置を退き、具体的事実は歳月を経るとともに忘却の彼方に流れ去って消えてなくなろうとする。この記録は、女子の高等教育の発展に関し筆者が一般文書をたどるとともに歳月の流れの中に立った者の一人として確実な記録を資料とし抛り所として記述したものである。

(昭和四一・八・三〇)

教育課程からみた 明治二十年前後の私立女学校

——プロテスタント系女学校の場合——

神 辺 靖 光

明治二十年前後の私立女学校について教育課程の面から考察したい。當時はプロテスタント系キリスト教主義の女学校がその主力であるから左記十二校十三種のプロテスタント系女学校教育課程を中心に考察を進める。

明治十七年五月 フェリス女学校学科課程（フェリス和英女学校六十年史所収）

明治十七年九月 東洋英和女学校学科課程（東京都政史料館所蔵）

明治十八年八月 頌栄女学校学科課程（同右）

明治十八年九月 明治女学校学科課程（同右）

明治十八年三月 金沢女学校学科課程（北陸女学校編、北陸五十年史所収）

明治十九年七月 普通士女学校学科課程（東京都政史料館所蔵）

明治二十年九月 香蘭女学校学科課程（同右）

明治二十年五月 桜井女学校学科課程（同右）

明治二十一年六月 駿台英和女学校学科課程（同右）

明治二十二年三月 東京英和女学校学科課程（青山学院九十年史所収）

明治三十三年 海岸女学校規則（同右）

明治三十四年 照暗女学校課程（平安女学院八十五年史所収）

まず、明治初年以來の女学校の教育課程表を見くらべながらその形成過程をみよう。

明治六年、官立東京女学校は次を規定した。⁽¹⁾

「 学科

上等本科六級 第六級ニ始リ第一級ニ終ル

国書 手芸 英学

下等本科六級 同前

国書 英学 手芸但第三級以上 雜工

予科四級 第四級ニ始リ第一級ニ終ル

国書

教育課程として充分な形式を持ってないが一応、教科として国書、英学、手芸、雜工をあげ、下等、上等に級があつて配列を暗示している。級といふのは下級より上級への進級段階である。これが本来の意味で今日の学校で用いられている「学級」でない。

私立女学校にも統一的教育課程の形式はなかったが、それぞれ工夫したあとがあり、各様であるが東京女学校のものよりくわしいものもある。いくつかの例をあげよう。（ここにあげるものはみな東京都政史料館所蔵の開学願書に記載されたものである。）

○明治四年芳英社（斎藤三助の英語塾）

学科 英学数学

正則科

変則科

一等 万国史・地理

一等 小領心論・英文四書

二等 書取・文典

二等 小経済書・仏国史

三等 会話・第三リードル

三等 英国史・究理書

四等 字綴書・第二リードル

四等 米国史・万国史

五等 字綴書・第一リードル

五等 中地理書・文典

等外 字綴書・プリメル

等外 小地理書・リートル

○明治五年芸芳学社（海野信幸の英語塾）

第十ノ組 英語階梯

第九ノ組 ウィルソン第一リードル・会話

第八ノ組 ウィルソン第二リードル・会話

第七ノ組 クエツケンボス文典・カヨット地理書

第六ノ組 ウィルソン第三リードル・ゲウドリツチ万国史

第五ノ組 ゲウドリツチ万国史・クエツケンボス窮理書

第五ノ組で終っている。将来、学業が進んだならば第四、第三と増級するだろう。

右でみると教科書の配列がそのまま教育課程の配列を意味している。初期にはこうしたものが多い。学科の意味が明確に掴めなかったのである。が次のようなものもある。

○明治五年水交女塾（星野康斎の英語塾）

塾規

一、綴字 一、素読 一、習字 一、単語 一、会話 一、算術 一、作文 一、

書取 一、地理学 一、万国史 一、点算 一、測量 一、理学

○明治六年賛育社（校主・阿部真造）

女童教則

午前八字ヨリ十字迄

習字

十字ヨリ十二字迄

読書

十二字

午飯 一字迄運動

一字ヨリ二字迄

修身口授

五十ノ日

清書

三十八ノ日

講義

日曜ヲ以テ休暇トス

前者には配列の觀念がなく、後者のそれは今日の授業時刻表である。賛育社は女童教則と銘打ってあるから寺子屋流であろう。

明治八年から十年頃になると私立女学校の教育課程も若干整ってくる。

○明治八年跡見女学校

学科 読書・習字・算術

教則

下等生徒教科

一、綴字・読並盤上習字 二、習字・字形ヲ主トス 三、単語読 四、会話、読

五、読本解意 六、修身解意 七、書読 解意並盤上習字 八、文法解意 九、

算術 十、養生法解意 十一、地学大意 十二、窮理学大意

上等生徒教科

一、史学大意 二、幾何学大意 三、野画大意 四、博物学大意 五、化学大意

六、生理学大意

授業時間ハ總テ小学規則ニ從ヒ相定候事

○明治九年桜井女学校

学科 地理学・裁縫・数学・化学・窮理学・生理学・修身学・経済学
教則

等外三級 ウィルソンプリマー第一読本・綴字及ビ習字・裁縫

等外二級 ウィルソンプリマー第二読本・コーネル地理書・数学・裁縫

等外一級 カッケンボス文法書・パーレー万国史・数学・裁縫

等内四級 ウィルソン第三読本・ガノット窮理書・作文及び数学・裁縫

等内三級 ウィルソン第四読本・チャンパーモラルクラスブック・カッター生理

書・数学

等内二級 ハウスホールディンファンシー・ハウスホールドエコノミー・ホッス

ル化学書・数学

等内一級 ハウスホールドマネジメント・テラー万国史・ウェーランド修身書・

数学

○明治十年恒徳女学校（校長・宮原金矢）

学科 漢学・皇学

教則

八級 三字経・大統歌・小学入門・習字・数学命位洋算

七級 四書・日本略史・小学読本・習字・加減法洋算

六級 小学・国史略・日本地志要略・習字・乗除法洋算

五級 五経・日本外史・物理楷梯・習字・小数諸等法洋算

四級 十八史略・政記・輿地誌略・習字・分数洋算

三級 元明史略・列女伝・万国史略・習字・比例洋算

二級 文章軌範・皇朝史略・小児養育談・習字・利息損易平均法洋算

一級 八大家讀本・銅鑑易知錄・古今和歌集・習字・開平開立法洋算

○明治十年立教女学校

学科 英学

教則

初級 正則 会話・書取・文典・音楽

変則 綴字・地理書

二級 正則 歴史・作文・裁縫・音楽

変則 文典・歴史

書式も名称も統一されず、学科（教科）と書物も混同しているが、それでも教科とそれを易から難へ配列する教育課程の原則が窺える。

官立東京女学校は明治九年から十年にかけて教則を整え、教育課程を完成した。

○明治九年四月東京女学校年報⁽²⁾

是歳教場ノ増築落成セルヲ以テ生徒徒百五十名ヲ容ルルヲ目的トシ、更ニコレヲ募集ス而メ諸規則ヲ改定シ教則中予科及ヒ上下ノ区別ヲ廢シテ之ヲ十二ノ学級ニ分ツ其教科ノ如キ較コレヲ高等ニ進メ以テ中学ノ教科ト相齊カラシム茲ニ其条例並ニ教則ヲ掲クル左ノ如シ

教則

第一条 此学ハ小学教科卒業ノ女子ヲ教養ス、其教科十二級ニ分チ六ケ年ノ在

学トス、但シ即今女子ニシテ小学教科卒業ノモノ多カラサレハ教科書

中姑ク近易ノ書ヲ加ヘ女子ノ粗書ヲ讀ミ算術ニ通スルモノヲ取テ之ヲ

教授ス

第二条 各級六ケ月ノ課程ニシテ一日四時半ノ課業トス

第三条 毎級六ケ月ノ終リニ試業ヲ行ヒ学力ノ進否ニ判シ等級ヲ定ム、而シテ

学力進級スヘカラサルモノハ猶元級ニ留ルヲ法トス

第四条 教科中英学ヲ加フルモノ年令十四歳以上十七歳以下タルヘシ但明識ノ

モノト相交リ見聞ヲ広大ナラシムルヲ要スルナリ

第五条 此学ニ入ルモノ年令十四歳以上十七歳以下タルヘシ

但現今入学ヲ許スモノ小学教科卒業ノモノヲ必トセサレハ十四歳以下

〔表一〕

明治九年東京女学校課程表

体操	唱歌	手芸	英学	書取	作文	習字	数学	読物	
			習級読会 字字物語	文字之教		楷書	乗加 除減	雑地理 書書	第十二級
			習級読会 字字物語	書牘		楷書	諸四 等則 雜題	歴史地理 雑書書	第十一級
			作文習読会 文典字物語		書日用 簡文	楷書	分 数	雑物理 書学史	第十級
			作文習読会 文典字物語		書日用 簡文	行書	小 数	雑物理 書学史	第九級
			作文習読会 文典字物語		公用文	行書	転正 比比例	雑修身 書学史	第八級
			作文習史外読会 文典字歴物語		諸証文	行書	相折按 連比分 率通比例	雑修身 書学史	第七級
			作文習史外読会 文典字歴物語		ムニシ 綴答 ラ文 シ出	草書	開平 開立	養生歴 書地理 書史	第六級
					如シ 前級ノ	草書	度数学 学連数	物理歴 学地理 書史	第五級
					如シ 前級ノ	小楷	対数 用法	雑物理 書経済 書学	第四級
					如シ 前級ノ	小楷	幾何	雑化学 書経済 書学	第三級
					如シ 前級ノ	記簿法	幾何	雑法律 書歴史 書	第二級
					如シ 前級ノ	記簿法	幾何	雑法律 書歴史 書	第一級

タリトモ入学ヲ許ス事アルヘシ

第六條 教科卒業ノ後ハ大試業ヲ行ヒ卒業ノ証書ヲ与フ

学科

第十二級 ○読物・地理書・雑書○数学加減乗除○習字楷書○作文○書取文字之

教○英学会話・読物・綴字・習字○手芸○唱歌○体操

(第十一級以下第一級まで略)

右教則は学級と学科というものを明確に規定している。この学科表は同年十二月の東京女学校年報において「表一」のように整理された。明治十年の課程表も九年のものとあまり変らない。ただ読物を国語と改称した事、英学を第四級まで延長したことが注目される。

東京女学校は明治十年に廃止された。

私立女学校の教育課程は明治十二年頃になるとかなり整備されてきた。

同人社女学校と桜井女学校のものをみよう。

同人社女学校は明治十二年、中村正直がはじめた女学校である。英漢学を王としているが裁縫、習字、数学等もあわせ教えた。生徒は級外をおえてから級内に編入される。修学年限は級内外ともそれぞれ三年間、級内は学科により或は五等(英学)或は三等(漢学)に分けられ、各学科において易から難へ、教科書、または教授法が配列されている。

変則課業表

級外訳読 ウェルソン第一読本 ウェルソン第二読本、ミッチェル地理書、カッ

ケンボス小文典

級内五等 講義 バレー万国史、マルカム英国史

四等 講義 カッケンボス窮理書、カッケンボス米国史

三等 講義 ウェランド修身書、ミル経済書

二等 輪講 スペンセル教育論、ギゾー文明史

一等 輪講 ミル男女同權論、ミル代議政体

漢学課程表

第三等 素読 和漢近易ノ書類、讀訳書類

第二等 講義 經史類、文章類、作文

第一等 輪講 經史類、文章類、作文(以下略)

明治十二年に改正された桜井女学校の教則(教育課程)は更に整備されている。書式が繁雜にできているからこれを整理すると「第四表」のようになる。即ち、

(一) 就学年限を八カ年とし、一学年を前後二期(六カ月)に分け、全体を十六級(階梯)とした。

(二) 教科を読法以下十三科とした。

多少曖昧な点もあるが教科と学年配当(シークエンス)が整えられているのである。

教育課程の書式は明治十四、五年に決められたらしく、東京都政史料館所蔵の開学願書を見ると、この頃から同一書式の教育課程表(学科学期課程表と書かれている)が必ず添附されている。本論に添附した表が即ちそれである。

教育課程が形成されにくかったのは当時、学年、学期の概念が不明瞭であり、かつ教科が決まらなかったからである。私立女学校の場合、学年、学期という考えは明治初期にはなかった。江戸時代から継続した私塾的学習方法で漢学なり、英学なりを学び、一通り理解できればよかった。

○明治十九年金沢女学校

予備科二年、本科四年、一学年三期制、一週三〇時

第一期四月上旬—七月中旬

第二期九月上旬—十二月下旬

第三期一月上旬—三月下旬（但、入学試験は毎年九月）

○明治二十年普通女学校

三年、一学年二期制、一週三〇時

○明治二十年香蘭女学校

四年、一学年二期制、一週二二—二五時

前期五ヶ月 教授日数一〇五日

後期五ヶ月 教授日数九二日

○明治二十一年桜井女学校

本科四年、高等科二年一学年二期制、本科一週三〇時、高等科二時

○明治二十二年駿台英和女学校

予科一年、本科五年、一学年二期制、授業日数一年間十ヶ月二〇五日

第一期九月一日—一月三十一日

第二期二月一日—七月十五日

○明治二十二年東京英和女学校

五年、一学年三期制（秋期・冬期・春期）

○明治二十二年金沢女学校

五年、一学年三期制（前に同じ）

○明治二十四年海岸女学校

六年、一学年三期制（秋期・冬期・春期）

○明治二十五年照暗女学校

本科四年、高等科二年、一学年一期制、一週三〇時

就学年限はかようにまちまちである。学期は一期制という例外もあるが概ね二期、三期制で今日と同じである。新学年が九月に始るのは西洋式である。

明治前期から中期にかけて女学校の教科に対する考えは次のように動いた。政府の考えをみるために、明治九年の東京女学校、明治十五年の女子師範学校附属高等女学校、明治二十八年の高等女学校規程の教育課程からこれを見ると（表三）のようになる。

即ち、明治九年から十五年にかけての教科の動きと、十五年から二十八年のそれを比較すると前者においては読物（国語）に包含されていた修身、読書、地理、歴史、博物、物理、化学がそれぞれ独立した教科に分化し、図画、礼節、家政、育児という新たな教科も加わって教科が多岐になった。英学が退けられ、家政的な教科が加えられたことからみて女子教育が強調されたのがわかる。家政科を強調することがあるべき女子教育の姿であるかどうかについては議論があるが、ここではそういう問題には立ち入らない。どういう女性観であろうと従来よりも女子教育を考慮して打ち出したものであることは確かである。

後者、即ち、十五年から二十八年への動きにおいては読書、作文が国語に、博物、物理、化学が理科に、礼節、家政、育児が家事に統合され、外国語が再登場した。後年の高等女学校の教科が整えられたのである。

三

次に明治二十年前後のプロテスタント系女学校の入学資格と就学年限を

〔表三〕 女学校教科の動き

明治 9 年 東京女学校	明治 15 年 附属高等女学校	明治 28 年 高等女学校規程	明治 9 年から 15 年の動き 分化の方向	明治 15 年から 28 年の動き 統合の方向
読物 (10年には国語)	修身 読作	修身 外国語	読物一 (国語)	修身 → 修身 読作 → 国語
数習	算文	歴史		本邦歴史 (英学) → 外国語
作書	地本	地理		本邦歴史 → 歴史
英取	邦歴	理科		博物 → 地理
手文	博物	縫字		理化 → 算術
唱体	図裁	音楽		博物 → 物理
	礼音			文化 → 化学
	体化			家育 → 家政
	育			縫裁 → 縫字
				図習 → 習字
			家音 → 音楽	
			育兒 → 体操	

(注) 明治9年東京女学校は同年東京女学校年報(文部省第4年報1—p.377—378)

明治15年附属高等女学校は同年同校教則大旨（東京女子高等師範学校60年史p.233）

〔表四〕 女学校の入学資格、就学年限一覧

— 明治20年前後のプロテスタント系女学校を中心として —

[illegible]

みよう。便宜上、当時の小学校の学令と就学年限をのせ、参考のために明治八年の栃木女学校（県立）十二年の桜井女学校、十三年の喜多英和女学校、十五年の桃夭女学校（下田歌子の国学塾）をのせた。「表四」がそれである。

入学資格は年令と学力の両面から規定されている。入学年令は何歳以上、何歳以下とあるから下限をとった。学力は小学校初等科卒、中等科卒、高等科卒、または尋常小学校卒、小学校六カ年卒、高等小学校卒、もしくはそれと同等以上の学力を有すると認めた者というようになっている。これは当時の小学校制度に合わせてその上に女学校をきづこうとしたからである。明治十九年までのものは明治十四年の小学校教則綱領に合わせたものであり、二十年から二十二年のものは十九年の小学校令とそれに属する「小学校ノ学科及其程度」に合わせようとしている。二十三年に小学校令が改正になり、尋常小学校が三カ年、または四カ年となったが（小学校令改正八条）本表にはあまり関係がない。

ところで本表の入学資格としての年令と学力に相当する年令は必ずしも一致しない。一致しているものは次の四校である。

明治十八年の頤栄女学校 十四年の小学校教則綱領に一致

入学資格……小学中等科卒業以上のもので年令満十二歳以上

明治十八年の明治女学校 十四年の小学校教則綱領に一致

入学資格……小学全科卒業・満十四歳以上三十歳以下

明治二十年の普連土女学校 十九年の小学校令に一致

入学資格……小学尋常科卒業十歳以上

明治二十一年の桜井女学校 十九年の小学校令に一致

入学資格……高等小学校卒業、満十四歳以上

次のものは入学年令と学力が当時の制度と合わないものである。

○明治十七年の東洋英和女学校の場合

「一、入学生徒学力……小学中等科卒業以上ノ学力アルモノハ入学セシム、小学初

等科卒業ノモノハ予科へ、小学中等科卒業ノモノハ本科へ入学セシム

一、入学生徒年令満十二年（十年）以上ノモノニ限ル」

本科の入学資格は十四年の小学校教則大綱に一致するが予科も右に合わせるならば就学年限は三年でなくてはならぬ。つまり東洋英和の予科は三年間でやる小学校中等科の課程を二年間で終了し、同じ資格を与えているのである。

○明治十八年の金沢女学校の場合

「入学規則

入学生徒の年令は十四歳以上たるべしと雖ども小学中等科卒業証書を所持するものは此限にあらず

入学生徒の学力は本科の最初等に於ては小学中等科卒業若しくは之に相当せる学力を有するもの予備科の初等に於ては小学初等科卒業若しくは之に相当せる学力を有するものたるべし」

ここでは小学中等科卒の学力をもって本科入学の資格としておきながら入学年令は十四歳以上を規準にしている。小学校教則大綱に従えば小学校中等科卒業は年令満十二歳である。このことは制度と地方の実状が合わなかったことを現わしている。制度では満十二歳で小学校中等科を卒業する筈であったが実状は十四歳以上になってようやく小学校中等科を卒業できるものが多かったということであろう。私立学校が制度に忠実であるより

も国民生活の実状に即してなり立つ一例をみる。予備科の就学年限二カ年は東洋英和の場合と同じである。

○明治二十年の香蘭女学校の場合

「入学資格 満十三歳以上、小学校六ヶ年の課程を卒えた者、若しくはこれに相当する学力を有する者」

十九年の小学校令によれば小学校六カ年修了は高等小学校二年修了ということで満十二歳になる。これを満十三歳以上としたところも現状に合わせたものと考えられる。

○明治二十二年の駿台英和女学校の場合

「生徒は凡齡十三年以上ニシテ尋常小学校卒業ノモノ若クハ十四年以上ニシテ之レト均等セル学力ヲ有シ（下略）」

○明治二十五年の照暗女学校の場合

「入学資格 満十二歳以上、尋常小学校卒業」

年令からすれば高等小学校二年修了にあたる。が入学資格を尋常小学校卒業程度にまで下げなければ生徒が集らなかつたのであろう。照暗女学校は右を原則としながらも但し「尋常小学校卒業ノ者ハ（年令）此限ニアラズ」としている。尋常小学校卒業生すら少なかったことが察せられる。入学生も多くは尋常小学校卒業の学力と同程度と認定されたものであろう。

東京英和女学校の場合は特殊で年令満十二歳以上と規定しているが小学校課程卒業云々をうたわず「和漢文ハ十八史略、土佐日記、数学ハ算術、代數、英学ハ第四読本等ノ試験ヲ経、及第セシ者ニ非ラザレバ入学ヲ許サズ」（明治十九年、東京英和女学校開学願書）としている。二十二年の教育課程表に「築地海岸女学校ノ卒業生及ビ他ノ日本淑女ニ高等普通学科ヲ授ケ

云々」とあり、また二十四年の海岸女学校教育課程には「左ノ課程ハ東京英和女学校へ入ルノ予備科トス」とある。海岸女学校は六カ年で教育程度は尋常小学校と高等小学校一、二年である。（後述）つまり、海岸女学校——東京英和女学校の一貫教育課程をつくっている。後に訓令十二号が出版されて私立学校が困惑した時（明治三十二年）青山学院は全国のメソジスト系女学校の系列化をはかり、独自の学校体系を整えようとした。⁽⁵⁾ こうした力はこの頃から胚胎していたのである。

前表〔表四〕から同じ女学校と名乗っても程度がそれぞれ違っていることに気づく。尋常小学校卒業程度、年令十歳以上を入学資格とする普通士女学校や、小学校六カ年の教育に相当する海岸女学校と小学校高等科卒業、年令十四歳以上を入学資格とする明治女学校や桜井女学校を同列視できない。高等女学校は明治二十四年の中学校令改正で「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス」（十四条）と定められ、二十八年の高等女学校規程をへて、三十二年の高等女学校令で入学資格が中学校と同程度になるのであるが明治初年以來、女学校の位置づけには曲折があった。学校体系が安定しない時期であるから小学校、中学校との関連においてみねばなるまい。〔表五〕は年代をおってこれを図式化したものである。

明治四年十二月、女学校入門心得が出て、東京女学校がはじまったが入学年令は八歳以上十五歳までで就学年限の定めはなかった。⁽⁶⁾ 学制に属する小学教則では下等小学六歳から九歳、上等小学十歳から十三歳であるから小学校と女学校は並列するものでつながりがなかった。五年にたてられた官立開拓使女学校の入学年令は十二歳から十六歳でこれも就学年限の規定

〔表五〕 明治年間における女学校の位置づけ

—— 入学資格・就学年限よりみる ——

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
明治5年小学教則1章 6年改正も同じ	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治4年12月文部省布令・女学校入門心得	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治8年文部省布達1号	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
小学校令ヲ定ムルコト	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治8年東京女学校改正	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治14年小学校教則大綱6条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治14年中学校教則大綱10, 11条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治15年東京女子師範学校	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
附属高等女学校教則大旨5・6条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治19年小学校令	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
小学校ノ学科及其程度	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治19年中学校令	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
尋常中学と高等中学ノ学科及其程度	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治10年東京高等女学校規則2・4条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治23年改正小学校令8条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治27年高等学校令	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治26年女子高等師範学校	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
附属高等女学校規則3・4条	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治28年高等女学校規程	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治32年中学校令改正	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治32年高等女学校令	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学
明治40年小学校令改正	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学	下等小学

(注) 学制八十年史・資料篇, 東京女子高等師範学校六十年史によって作成した。

明治八年 木妹花野女塾

○入学年令十五歳以上とした私立女学校(女塾)

明治八年、文部省は「小学学令ノ儀自今満六年ヨリ満十四年マテト相定候」と布達した。⁽⁹⁾明治五年の小学教則が「小学ヲ分テ上下二等トス下等ハ六歳ヨリ十三歳ニ終リ上下合セテ在学八年トス」で年令にあまいな点があったから満六年、満十四年と明確にしたのである。同じ八年に東京女学校も規則を改正して入学年令を満十四歳以上としたのはこれを小学校の上に位置づけたからである。明治八年以後十年頃までの東京の私立女学校の入学年令をみると十五歳以上としたものが多いがこれは東京女学校にならって小学校の上に位置づけようとしたからであろう。

明治八年、文部省は「小学学令ノ儀自今満六年ヨリ満十四年マテト相定候」と布達した。⁽⁹⁾明治五年の小学教則が「小学ヲ分テ上下二等トス下等ハ六歳ヨリ十三歳ニ終リ上下合セテ在学八年トス」で年令にあまいな点があったから満六年、満十四年と明確にしたのである。同じ八年に東京女学校も規則を改正して入学年令を満十四歳以上としたのはこれを小学校の上に位置づけたからである。明治八年以後十年頃までの東京の私立女学校の入学年令をみると十五歳以上としたものが多いがこれは東京女学校にならって小学校の上に位置づけようとしたからであろう。

となつてゐる。

普我学舎(小島守気の英学塾) 二人

芳英塾(斎藤三助の英学塾) 七十一人 六人 七十七人 二人

真宗東派学塾(大谷光勝の綜合塾) 三人 二人 五人

習成舎(板倉勝任の綜合塾) 三十四人 五人 三十九人

報国学社(有馬頼威の英学塾) 九人 五人 十四人

六歳—十五歳・十六歳以上 計

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

がなくて、小学校とのつながりは認められない。この頃の私立女学校(女塾)には入学年令の規定すらない。明治七年にはじまった女子小学校(海岸女学校の前身)の最初の生徒は津田仙夫人とその子供(男児)二名、近所の主婦三名、小児二名であったという。⁽⁸⁾明治六年五月の東京府私立学校明細調(東京都政史料館所蔵)に記載された四十八校中、女生徒を年令別に調べたものを見ると

明治九年 河村女校・原女学校・共義女学校・中尾女学舎

明治十年 恒徳女学校・加藤女学校・立教女学校

明治十年の宮崎駿児の女学校は入学年令十歳、十年の村上女学校は六歳、十二年の桜井女学校は満五歳以上

（東京都政史料館所蔵の開学願書による）

明治八年に県立栃木女学校ができた。教育課程ははっきりしないが栃木県教育史によれば女児小学と同程度であつたらしい。⁽¹²⁾明治十年に栃木県模範女学校と改称するがこの時の学令は満六歳以上満十四歳以下で小学校の種類である。この時、別に変則生の制を設けて年令十四歳以上十八歳以下とした。⁽¹³⁾年令的には後の高等女学校に匹敵するがこれは小学校の上級に上なる女学校ではあるまい。規定よりも年令の範囲を拡げてこれまで教育を受けられなかったものを拾おうとする配慮からつくつたものであろう。変則生という名がこれを示している。後に高度な内容を持つ桜井女学校も明治十二年頃の入学資格は満五歳以上で女児小学の種類であつた。ガントレット恒の想い出によれば彼女は六歳で桜井女学校に入学し、家が恋しくなると校長に「肌つ子おんぶ」してもらつたといふ。⁽¹⁴⁾桜井女学校は女児小学程度からはじめて生徒が成長するに従つて次第に高級なものになつていったのである。要するに学制期を通じて女学校は小学校程度かそれ以上かあまいであつた。八年以後、観念としては女学校は小学校に続く上級学校と認めたが実際はすぐに切りかえられず、数年間、女児生徒が在学するという状態が尾を引いていたように思う。

十二年の教育令、十三年の改正教育令と揺れ動き、十四年の小学教則綱領、中学校教則大綱、十五年の東京女子師範学校附属高等女学校教則大旨

において中等学校としての女学校の位置づけが多少明瞭になった。附属高等女学校教則大旨は全国に共通する規定ではないが高等女学校と名乗つた最初であり、後の高等女学校の原型と認められるものであるからこの規定をもつて小学校、中学校と比較すればこの時期に女学校が中学校と一応同格に位置づけられたことは明らかである。⁽¹⁵⁾（表五参照）ただし、現実がこの通りでなかったことは今まで述べた通りである。

明治十九年の学校令中に高等女学校令がないので同年に制定された東京高等女学校（附属高等女学校が一時改称した）規則をもつてこれにかえ、比較すればこの時己に「高等女学校ハ尋常中学ノ種類トス」という定義（明治二十四年中学校令改正第十四条）はできていた。（表五参照）

二十年代の改正で高等女学校規程が現われ、女学校に対する法的措置が一步進んだがその位置づけは若干の修正をみた。即ち、二十四年の中学校令改正で高等女学校は尋常中学の種類と定められたのであつたが高等女学校規程では修学年限は六カ年とするも土地の情況によつては一カ年の伸縮を認め（二条）入学資格を修業年限四カ年の尋常小学校卒業程度とした。

（三条）尋常中学校は五年制であつたが入学資格は高等小学二年修了であつたから⁽¹⁶⁾高等女学校の程度は尋常中学校より二ケ年低くなつた。女子高等師範学校附属高等女学校は己に二年前（二十六年）に規則を改正し、入学資格を下げて四ケ年の尋常小学校卒業程度としていた。⁽¹⁷⁾

高等女学校の程度を下げたことをもつて女子教育政策が後退したとみてはなるまい。女子の進学率が低かつたから入学し易い条件にかえたのであつてそこにむしろ当局の熱意と苦心をみるものである。この時期になるとこれまでの失敗から明治初期のような理想主義的強行策は影をひそめて、

よほど、現実的になっている。二十三年の小学校令改正でも尋常小学校の就学年限を三カ年または四カ年、高等小学校を二カ年、三カ年、四カ年の随意とし、弾力性をもたせている。(八条) 高等女学校規程四条で「入学生徒ノ資格ヲ高ムルニ從ヒ第二条ノ修業年限ヲ三ケ年マテニ短縮スルコトヲ得」としたのは三十二年の高等女学校令、四十年の小学校令改正を見通すものとして注目される。即ち、小学校六カ年の義務教育を望ましいものとして将来の課題とし、当面は国民生活の許す範囲内で小学校義務教育を完全実施し、その上で高等女学校を振興しようとしたのである。小学校六ケ年の義務教育は日露戦後の余勢をかって明治四十年に達成し、事態もほぼそれに近づいたが高等女学校は四年制を原則としながらなお一ケ年の伸縮を認めざるを得なかった。(高等女学校令九条) 高等女学校令によって入学資格は中学校と同格になった。しかし、名は高等女学校でも、それは就学年限においても教育内容においても、教員の資格においても中学校より一段低いものとみなされた。

明治二十年前後の私立女学校の入学条件がまちまちで国の制度と一致しないのは当局と同じく、国民生活の現状に適合しようとした努力に外ならないのである。

私立女学校といえども国の教育制度の枠外ではない。しかし、明治二十年前後は今までみた通り女学校についての法的措置が不備であったから今日のように統一されてなかった。法が不備であったからむしろ私立女学校が国の女子教育を推進する役割を果たした。しかも私学の特性上、それは一筋の方向に進んだのではなくバラエティに富んだものであった。けれどもバラエティに富むというのは無軌道に進んだということではない。不備

な規定の中で国のなんらかの制度に適應しようと努力した跡がみられるのである。

プロテスタント系女学校を入学資格(入学年令と学力)・就学年限によって当時の教育制度と対比させ、類型化を試みた。

(一) 尋常小学校に近いもの……海岸女学校(ただし高等小学二年程度まで)

(二) 小学校中等科に近いもの……東洋英和女学校予科・金沢女学校予科
(三) 高等小学校に近いもの……普通土女学校・駿台英和女学校・照暗女

学校本科

(四) 初等科中学校に近いもの……東洋英和女学校本科・頌栄女学校・金沢

女学校本科

(五) 尋常中学校に近いもの……香蘭女学校・照暗女学校高等科

(六) 初等科中学校・高等科小学校以上のもの……明治女学校・桜井女学校
要するに明治二十年前後のプロテスタント系女学校は一般に中等・高等

小学校及び初等中学校(明治十八年まで)または高等小学校、尋常中学校(明治十九年以降)程度に位置づけられ、例外としてそれ以下のものとそれ以上のものがあつたと思われる。

それぞれブロック別に教科と総時数を比較した。〔表六〕

(一) 聖書科を除いてプロテスタント系女学校に独特の教科はない。もともと近代学校の教科は欧米から移入されたものであるからプロテスタント系女学校の教科と国で定めた教科は無理なく一致する。卒業生が教員になった例も多いから近代教科の実施においてプロテスタント女学校の影響も考えられてよい。(この点については更に検討を要するが……)

〔表六ノ一〕

尋常小学校に近いもの

明治24年		明治19年小学校ノ学科及其程度	
海岸女学校		尋常小学校	高等小学科
<p>○聖書・唱歌・図画・英和書法・体操・裁縫・女礼式等ハ各級ニ之ヲ授ク</p> <p>○日本</p> <p>○英語</p>	<p>本 本</p> <p>初 本</p> <p>漢文(日本外史)</p> <p>算 術</p> <p>地 理</p> <p>東 京</p> <p>地 誌</p> <p>地 史</p> <p>歴 史</p> <p>物 理</p> <p>植 物</p> <p>動 物</p> <p>地 理</p> <p>書 取</p> <p>作 文</p> <p>單 語</p> <p>発 音</p> <p>読 本</p> <p>綴 字</p> <p>書 取</p> <p>訳 語</p> <p>訳 語</p> <p>作 文</p> <p>地 理</p> <p>博 物</p> <p>暗 算</p> <p>翻 文</p>	<p>修 身</p> <p>読 書</p> <p>作 文</p> <p>習 字</p> <p>算 術</p> <p>體 操</p> <p>(図 画)</p> <p>(唱 歌)</p>	<p>修 身</p> <p>読 文</p> <p>作 字</p> <p>算 術</p> <p>地 理</p> <p>歴 史</p> <p>図 画</p> <p>唱 歌</p> <p>體 操</p> <p>裁 縫(女児)</p> <p>(英 語)</p> <p>(農 業)</p> <p>(手 工 商 業)</p>
		明治23年改正小学校令で加わったもの	
		<p>(日 本 地 理)</p> <p>(日 本 歴 史)</p> <p>(手 工)</p> <p>(裁 縫)</p>	<p>(幾何ノ初歩)</p> <p>()は随意科</p>

(二) キリスト教主義女学校の英語力についてかねて喧伝されてきたが教育課程からも確かめられる。プロテスタント系女学校ではどの学校も英語の時間数が多いが駿台女学校の如きは全体の三分の二にあたる時間を英語にあてている。東洋英和や香蘭女学校も英語の割合は全体の三分の一以上にあたる。海岸女学校、東京英和女学校は時間数が明らかでないが大半を英

語にあてていたようである。そのために他教科の時間数はけずられているが、歴史も地理も理科系の授業も英語科でなされているから英語のために他教科が圧迫されたとは言いい切れない。

(三) キリスト教主義の女学校と裁縫、家事科の教育は結びつかないように思われがちであるがそうではない。明治十九年、海岸女学校のアトキンソ

〔表六ノ二〕

小学校中等科に近いもの

明治19年 金沢女学校予科	明治17年 東京英和女学校予科	明治14年 小学校 則中等科
国語 9	修身 6 読書 8 習字 2 算術 5~6 地理 7 地学 4	修身 18 読書 15 習字 9 算術 11 地理 15 歴史 7.5 博物 7 物理 7 縫製 9.5 裁縫 9
数理学 7 地学 2	図画 3	裁縫 9
理科 4	裁縫 4 唱歌 4 英語 5 英語 5 英語 2.5 英語 0.5	裁縫 9
家事 8	裁縫 4 唱歌 4 英語 5 英語 5 英語 2.5 英語 0.5	裁縫 9
英語 10	裁縫 4 唱歌 4 英語 5 英語 5 英語 2.5 英語 0.5	裁縫 9
2ケ年	2ケ年	3ケ年

ン校長は「われわれの目的は生徒達をよい学生でよいキリスト教信者にするのみでなく、やがてよき主婦にしてよき妻、よき母となる女らしい女性 Womanly women を育成するにある」と述べている。教育課程からそれは確かめられるが裁縫や技芸は早くから熱心におこなっていた。日本の社会で婦人が人格的独立を得るには女性独自の技芸を身につけてなければ

〔表六ノ四〕 初等科中学校に近いもの

明治19年 金沢女学校	明治18年 頌栄女学校	明治18年 東洋英和女学校本科	明治14年 中学校 則中等科	明治28年 高等女学校規定
倫理 2 数学 12 国語 6 地学 8 歴史 8 理科 8 家事 19 英語 15	修身 15 算術 30 地理 5 地学 5 博物 1.5 物理 3 化学 3 植物 2.5 動物 2.5 生理 3 衛生 3 図画 20 裁縫 5 英語 2 英語 10 英語 5 英語 32	修身 6 読書 10 習字 3 算術 6 地理 3 地学 3 博物 7 物理 7 化学 4 植物 6 動物 11.5 生理 3.5 衛生 5.5 図画 8.5 裁縫 1.5 唱歌 1.5 英語 1.5 英語 0.5	修身 8 読書 25 習字 24 算術 8 地理 5 地学 6 博物 5 物理 5.5 歴史 4 物理 4.5 博物 2 物理 2 縫製 1 裁縫 4 裁縫 8	修身 8 国語 26 数学 20 国語 6 物理 14 物理 10 物理 2 物理 30 物理 12 物理 12 物理 12 物理 16
4ケ年	5ケ年	3ケ年	4ケ年	6ケ年

〔表六ノ三〕 高等小学校に近いもの

明 治 25 年 照 曙 女 学 校 本 科	明 治 22 年 駿 台 女 学 校	明 治 20 年 普 連 土 女 学 校	明 治 19 年 小 学 校 令 小 学 校 / 学 科 及 其 程 度 高 等 小 学 校
修 身 4	修 身	修 身 3	修 身 6
読 書 19	漢 文 読 書 (歴史)	和 漢 文 15	読 書
作 文 4	作 文		作 文 40
習 字 10	習 字	習 字 5	習 字
数 学 18	数 学	数 学 15	算 術 24
地 理 6	地 理 学	地 理 3	地 理 16
歴 史 8			歴 史
理 科 2	動 物 学 45	生 理 2.5	理 科 8
生 理 2	植 物 学		図 画 8
博 物 1	物 理 学		唱 歌 20
図 画 7	生 理 学		体 操 8 ~ 24
音 楽 4	唱 歌		裁 縫
裁 縫 12	裁 縫	裁 縫 16	
容 儀 2	衛 生	裁 家 政 1	
英 語 20	英 語	英 語 30	
	読 本 会 話 書 取 文 典 修 辞 語 歴 史 学 修 身 生 理 物 理 地 理 星 学		
4 ケ 年	6 ケ 年	3 ケ 年	4 ケ 年

ばならぬと考えたからである。⁽⁴³⁾ 男性側から主張される良妻賢母とニュアンスの違いはあるが、よき主婦、よき妻、よき母、女性らしい女性という理想はプロテスタント系女学校の目標でもあった。

〔表六ノ五〕 尋常中学に近いもの

明治25年 照南女学校高等科	明治20年 香蘭女学校	明治19年中学校ノ 学科及其程度 尋常中学校	明治28年 高等女学校規程
修身 2 読書 10 作文 2 英語 10 英地 2 歴史 4 数学 10 理科 4 家事 3 裁縫 6 図画 4 音楽 2	和漢学 20 英語 40 数理学 9 理科 10 家事 8 図画 2 唱歌 8 音楽 12	倫理 5 国語及漢文 20 外国語 29 第1外国語 7 第2外国語 6 モ地ハ農業 6 歴史 7 数学 19 物理学 6 博物学 6 物理化学 3 習字 3 図画 9 唱歌 4 体操 19	修身 8 国語 26 外国語 20 歴史 6 地理 6 数学 14 理科 10 家事 2 縫字 30 習字 12 図画 12 音楽 12 体操 16
2ケ年	4ケ年	5ケ年	6ケ年

〔表六ノ六〕 特殊なもの

明治21年 桜井女学校	明治21年 桜井女学校高等科	明治18年 明治女学校
聖書科 10 修身科 4.5 国語漢文 16 英語 17.5 英地 2.5 天文学 2.5 歴史 12 数学 20 博物学 2 習字・画学 9 教音学 2.5 唱歌音楽 6 裁縫・編物 10 体操 6	聖書科学 5 文理学 3 歴史学 6 論理学 3 哲学 1.5 心理学 3 経済学 3 音楽学 10 国語操 3	英地語学 20 歴史学 1 動物学 5 植物学 2 植物理学 2 生物物理学 2 化学物理学 2 数文物理学 20 漢修身学 5
4ケ年	2ケ年	5ケ年

⁽⁴⁴⁾ 英語を除けば一般に国の定めた教科と変らない。しかし、海岸女学校、明治女学校、桜井女学校は大いに特色を発揮した。海岸女学校は小学校に準拠しつつも英語に重点をおき、毎日、聖書の授業があった。桜井女学校にも聖書科があった。大びらにやったのである。この頃、己に当局の方針は特定の宗教教育を禁止する方針であったようである。というのは、頌栄女学校の開学願書が出された際(明治十八年八月二十八日)修身の教授法要旨に「専ら新旧両約聖書ニ基ツキ且ツ和漢聖賢ノ格言ヲ引キ」と書いた所「新旧両約聖書ニ基ツキ」がけざられて差戻されているからである。海岸⁽⁴⁵⁾

女学校や当時の桜井女学校と頌栄女学校とはミッシェンとの關係に濃淡があったからであらう。前者がメソジスト、長老教会の直接経営であつたのに対し、後者は岡見清致個人の資金でたてたものであつた。

明治女学校、桜井女学校（特に高等科）は当時の官公立のどの学校とも比較することができない。独自の学校で入学資格、就学年限、教育課程からみて当時最高の女学校であつた。

女子の教育機關を高等に押し上げる民間教育の動きはこの頃からはじまつていたのである。

四

わが国の女学校はちょうど、明治の年代に沿つて発達したといえる。幕末に胚胎し、維新に發生し、三十二年の高等女学校令で確立した。まさに三十にして立つたのである。明治二十年前後の女学校は青年期にふさわしいものであつた。いかにも自由で創造的であつた。

政府の女子教育対策が充分でなかったから、民間の教育者が働いた。国の女学校ができ上るまで私立女学校が国民の女子教育を担い、先導の役割を果たしたのである。プロテスタント系女学校はその主力であつた。高等女学校令の制定や府県立女学校の設立にあたり、私立女学校の教育が多く参考にされたであらう。とりわけプロテスタント系女学校の實力は群を抜いていたから後の女学校に様々な影響を与えた。

先進国に追いつくために西洋の教育を取り入れることは明治の国是であつた。明治初期においていきなり女子留学生を米國に派遣したり、開拓使女学校としたり、東京女学校を英學専門校にしたりしたのはみなその現

れである。それはいかにも情熱的ではあるが常識的ではない。これに反し、明治二十年前後のプロテスタント系女学校は多く米人宣教師の指導下にありながらさほど、急進的ではなかつた。当時、女学校の規定がなかつたにもかかわらず、他の教育法規に近づけようとした。教育課程でみれば國が女学校の教育課程の規程を決めてないにもかかわらず、他の学校（小中学校）の教育課程に準拠しようとした。つまり、國の女学校（府県立女学校）はプロテスタント系女学校の影響を受けたであらうが、逆にプロテスタント系女学校は國の教育政策に適合しつつ成長した。こうした相互作用はなににでもみられるがこの場合もそうであつた。政府の認可を得なければ私立女学校としてなり立たないし、生徒も集まらないからである。

課程表でみる限り、宗教教育と英語教育を除けば他はそれ程特殊なものはない、英語教育も時間数が多いとはいへ、明治初期のように極端なものではなかつた。教科書や教授法にまで論究していないからこれだけでは他との比較にならないが、明治初期の女学校に比べて、よほど、教科のバランスがとれてきた。

更に言えばこれらの女学校は一面において國の政策や法規に適合しつつ、一面においてこれから離れた。それは法規や制度よりも國民の生活に密着しようとしたからである。國民の生活や感情に密着しなければ生徒が集らない。私立学校の根本的な性格はここにある。プロテスタント系女学校が多くアメリカの思想、方式によつて移植されながら極端に西洋化したのはそれはこれである。明治初期の官立女学校が極端に西洋化したのはそれが官の力にたよつたからである。

戦後、女子教育は全面的に解放されて、男女共學が実現したので女学校

という概念が薄らいだ。今日、女学校といえは中等教育機関としての戦前の高等女学校を思い浮べるのが普通である。しかし、明治二十年前後までの女学校はそういうものではなかった。明治初期の女学校は多く女児小学に類する初等教育機関であった。明治十年代になって女学校は漸く中等教育にまで押し上り、後に専門学校にまで上った。このように初等から中等、高等へ年代とともに成長したのがわが国女子教育機関の発達上の特色であって、初等と高等の両端から発達して中等でつないだ男子系学校のそれと違う点である。

女子の専門学校が多くなつてられたのは明治三十三年以後であるが明治二十年前後のプロテスタント系女学校にその萌芽がみられる。明治女学校、桜井女学校がそれである。されば名は女学校でも明治二十年前後のそれは未来にいろいろな可能性を持つもので大半は中等教育機関に位置づけつつも海岸女学校のように特色ある女児学校を作ろうとするものから高等教育機関を形成しようとするものまでの広い幅を持っていた。女学校発達史上、明治二十年前後は、青年期というにふさわしいものであった。

- 注 (1) 文部省第一年報一七四丁
- (2) 文部省第三年報一・五八三ペ
- (3) 文部省第四年報一・三七七・三七八ペ
- (4) 文部省第五年報一・四五一ペ
- (5) 青山学院九十年史三〇・三一―一ペ
- (6) 明治以降教育制度発達史一・二五三ペ
- (7) 北海道帝国大学沿革史一四ペ
- (8) 青山学院八十五年史二九ペ

- (9) 明治八年一月八日文部省布達第一号(学制八十年史資料篇所収)
- (10) 明治五年九月八日文部省布達番外(小学教則第一章・同右所収)
- (11) 明治以降教育制度発達史一・五五五ペ
- (12) 栃木県教育史四・三〇〇・三〇一ペ
- (13) 同右三〇二ペ
- (14) ガントレット恒・七十七年の想い出一三ペ
- (15) 東京女子高等師範学校六十年史五一ペ
- (16) 明治十九年六月二十二日、文部省令一四号、尋常中学校ノ学科及其程度(学制八十年史資料篇所収)
- (17) 明治二十六年三月制定女子高等師範学校附属高等女学校規則(東京女子高等師範学校六十年史二四二ペ)
- (18) 青山学院九十年史二一八ペ
- (19) 同右二三三ペ
- (20) 同右二一八ペ
- (21) 東京都史紀要・東京の女子教育一五七ペ

附 表

プロ
テ
ス
タ
ン
ト
系
女
学
校
の
教
育
課
程
表

明治 17 年 東洋英和女学校 学科学期課程

(私立学校設置願)

	1 年	(予 科)	2 年	(予 科)	3 年
修 身	小学修身課書 3	" 卷 13 3	卷 14 3	卷 15 3	修身叢書ノ上 2
読 書	卷ノ2講義 近古史談卷1・2 4 説法・講義	" 卷3・4 4	十八史略 卷1, 2 4	卷 3, 4 4	卷 5, 6, 7 2
作 文	日用書類 1	" 1	" 1	" 1	記 事 文 1
算 術	整 数 4	分数・小数 4	諸等利息 3	諸 比 例 3	乗法・開法 2
地 理 学	日本地理要略 2	" 2	輿地誌略 2	" 2	
家 政 経 済 学					
動 植 物 学					植物学通論 2
理 化 学					物理全誌前半 4
生 理 学					
習 字	楷 書 3~4	" 3~4	行 草 2	" 2	
画 学	器具・花葉 2	動 植 物 2	" 1	人物及景色 1	
裁 縫	編 物 2	" 2	" 2	" 2	
体 操	休息ノ時間ヲ以テ婦女 ノ体操ヲナサシム	" 2	" 2	" 2	"
唱 歌	口授唱歌 2	" 2	" 2	" 2	唱歌彈琴 2
読 方	読本ヲ以テ読方ヲ 2半 教ユ	" 2半	" 2半	" 2半	" 2半
書 取	読本ノ中ノ語ヲ書 2半 取ラシム	" 2半	" 2半	" 2半	" 2半
会 話			口 授 2半	" 2半	ウラルトソノ氏 会話篇 2半
文 法 修 辭					スウイソノ氏 語学教科書 2半
習 字	自宅ニテ習字シ清書シ テ教師ニ閲覧セムシ	"	"	"	"
作 文			簡單ナル文ヲ作ラ シム 30分	" 30分	宿題ヲ与ヘテ作文 セシム 28
通 計	28	28	28	28	28

英 文 学 科

(注) 明治十七年各種学校書類

(東京府立書)

(本 科)	4 年	(本 科)	5 年	(本 科)
巻ノ上・巻ノ下 2	" 2	" 2	" 2	" 2
日本外史 2	" 4	" 4	史記列伝ノ部 4	" 4
" 1	論 説 体 1	" 1	" 1	" 1
級数級及面測法 2	代数学整数 2	方 程 式 2	幾何学初歩 2	" 2
			家事要法 3	" 3
植物学各論 3	動 物 学 4	" 4		
物理学全誌後半 4	化学無機ノ部 3	" 3	弗氏生理学 前3冊 4	弗氏生理学 後4冊 4
"	"	"	"	"
" 2	" 2	" 2	" 2	" 2
" 2半	グードリッチ氏 英国史 3	スウイントソ氏 万国史 5	ギゾー氏 文明史 5	テルーラ氏文学
" 2半	" 2	"	"	"
" 2半	読書中ノ問答ヲ以 テ会話ニ代ユ スウイントソ氏 文法修辭 3	" 3	" 3	" 3
"	"	"	"	"
"	"	"	"	"
28	28	28	28	28

明治18年 頌榮女学校 科学 期課程

(私立学校設置願)

	1 年		2 年		3 年		4 年		5 年	
修身	嘉言善行 3	"	3	"	3	"	3	"	3	"
和漢文	読書和漢文 5	"	5	"	5	"	5	"	5	"
習字	作文消息文 1	"	1	消息文 1 公用文	1	片仮名文 1 記事文	1	漢文詠歌 1	1	和歌詠歌 1
算術	平仮名 1	啓書 1	行書 1	"	1	平カナ 1	1	啓書 1	行書啓書 1	平カナ 1
地理	筆算加減乗除珠算 2	筆算分数小数珠算 2	筆算諸等比例珠算 2	筆算比例百分比例珠算 2	筆算開方仮数求積 2					
本邦歴史	総論日本地理 1	万国地理 1	地文 1							
博物	上世・中世 2	中世・近世 2	近世 2	総論金石植物 3	動物 1	人身 2				
物理				通常現象 2	3					
化学							元素化合物 2	"	2	"
図画	鉛筆画 1	"	1	"	1	1	用器画 1 水墨画	用器画 1 設色画	設色画 1	"
裁縫	小裁衣服 4	"	4	中裁衣服 4	本裁衣服 4	4	4	"	4	"
女礼	坐礼 1	"	1	"	1	立礼 1	1	"	1	"
家政							飲食割烹 1	衣服洗濯理髪 1	養生・育児・看護 1	"
音楽	唱歌集初篇 2	"	2	同2篇 雅琴 2	"	"	西洋唱歌 2	"	2	"
体操	體運動 1	"	1	"	"	1	"	"	1	"
	読本 1	読本 2	5	読本 3	5	読本 3, 4	5	読本 5	5	読本 6
	綴方口授 20分	"	20分	"	20分	"	20分	合衆国史 1	"	英国史 1
	作文 20分	"	20分	"	20分	"	20分	"	20分	"
	会話 20分	"	20分	"	20分	"	20分	"	20分	"

(注) 明治十八年各種学校書類

(東京府文書)

明治18年明治女学校科学期課程

(明治女学校設置願)

	1年	2年	3年	4年	5年
英語学	綴字・習字・読法・訳解 4	〃 4	文法・書取・作文・会話 4	〃 4	英文和訳・作文・修辭 4
地理学			地理 1		
歴史学	亜細亜 1	〃 1	万国 1	〃 1	〃 1
動物学					動物 2
植物学					植物 2
鉱物学					鉱物 2
生理学				生理 2	
物理学				物理 2	
化学				化学 2	
数学	加減乗除 4	分数・少数 4	比例諸式 4	開平開立 4	代數幾何 4
漢文学	読書作文記事 4	〃 4	講義・記事論説 4	読書 4	〃 4
修身学	嘉言善行 1	〃 1	〃 1	〃 1	〃 1
通計	14	14	15	20	19

(注) 明治18年各種学校書類

(東京府文書)

明治 18 年 金沢女学校学科課程

	子 備 科 1 年	子 備 科 2 年	本 科 1 年	本 科 2 年	本 科 3 年	本 科 4 年
修 身	西洋品行論等ノ書ニ ヨリテ口授ス 1	” 1	” 1	” 1	” 1	” 1
読 書	女子読本 純正業求 ヴァルソン第1読本 7	国 史 略 ヴァルソン第2読本 7	日本外史 ヴァルソン第3読本 14	十八史略 会 話 10	元明史略 清史摘要 会 話 10	正文章軌範 和文読本 英和文法 10
作 文	簡易ノ記事文及ビ日 用文 1	” 1	” 1	” 1	會 話 用 文 1	論説文・雅言消息 1
習 字	楷 書 3	行書草書 3	日用文体 2	” 2	” 2	”
算 術	四則ヨリ分數ニ至ル 3	小數ヨリ利足算ニ至 ル 3	諸 比 例 3	開方・線數 3	ミチヨール万国地理 2	”
地 理	新撰地理小誌 2	”	”	スウキートン万国史 5	グーンドリッツ英國史 7	グーンドリッツ英國史 2
歴 史	”	国史略ニヨリ問答 1	” 5	”	”	”
博 物	”	小学中等読本動物学 2 同 植物学 2	”	”	”	”
物 理	”	”	”	”	学校用物理書 3	”
生 理	”	”	”	”	”	スチール生理学 4
化 学	”	”	”	”	”	新式化学 3
經 済	”	”	”	”	”	家政要旨 3
裁 縫	縫針法・単衣 9	単衣・袴類 8	袴・綿入 5	羽織・帯 4	袴及ビ以上演習 4	以上演習 4
女 子	坐 礼 2	” 2	”	”	”	”
音 楽	唱歌・オルガン 1	” 1	” 1	” 1	” 1	” 1
体 操	徒手演習 1	” 1	” 1	” 1	” 1	” 1
合 計	30	30	30	30	30	30

(注) 北 陸 50 年 史 p. 15~17

明治19年金沢女学校学科課程

	予備科 1年	予備科 2年	本科 1年	本科 2年	本科 3年	本科 4年
国語	講読・作文 5	〃 4	〃 3	講読 2	〃 3	〃 3
漢文				修辭学・訳解・作文・文法 4	〃 2	〃 2
外国語 (英語)	読方・訳解・習字 5	〃 5	読方・訳解・作文・文法 5	訳解・作文・文法 4	修辭学・訳解・作文・文法 3	訳解・作文・英文学 3
倫理学						倫理学 2
歴史			本邦歴史 2	万国歴史・本邦歴史 3	〃 3	
地理		本邦地理 2	〃 2	外国地理 2		
数学	算術 4	〃 3	〃 2	算術・代数 2	代算・珠算 2	幾何・珠算 2
理科	天然物及現象 2	〃 2	植物・動物 2	礦物・化学 2	物理 2	生理・衛生 2
家事	和服裁縫・編物 4	〃 4	挿花・和服裁縫・編物 4	和服裁縫・編物・衣類記 5	裁縫・珠算 2	和服裁縫・編物・育児 5

明治20年普連土女学校学科課程 (私立学校設置願)

	1年	2年	3年	4年
修身	倫理 1	〃 1	〃 1	〃 1
和漢文	講読 (漢字交り文) 5 作文 (漢字交り文)	講読 (漢文) 5 作文 (漢字交り文)	〃 5	〃 4
英語	綴字・音読・訳解 10	音読・訳解 10	音読・訳解・会話・作文 10	音読・訳解・会話・作文・文法・翻訳 10
数学	算術 5	〃 5	算術・代数 5	代数 5
地理	日本地理 2	万国地理 2		
習字	行書 2	〃 2	草書 2	
裁縫	簡易日本裁縫 5	日本裁縫 5	日本裁縫 6 西洋裁縫 6	西洋裁縫 6 身体ノ發育・飲食運動ノ要理ノ理由 2
家政			人体ノ構造組織 1	出納・算帳・青尼 2
合計	30	30	30	30

(注) 北陸五十年史 二七六
(注) 明治二十年普通第二種願向 (東京府立女子学校事務課)

明治 20 年 香 蘭 女 学 校 学 科 期 課 程

(私立学校設置願)

	1 年		2 年		3 年		4 年	
修 身								
和 漢 文	読書・作文・習字・5	"	5	"	5	"	5	"
英 語	読書・習字・対話・10	"	10	"	10	"	10	"
数 学	算 術・3	"	3	代 数・3	"	3	幾 何・3	"
理 科	地 理・2	地文(口授)・2	物 理(口授)・2	"	2	化 学(口授)・3	動植物(口授)・3	生 理(口授)・3
家 事	諸札・裁縫・編物・2	"	2	"	2	裁縫・編物・簿記・2	"	家内経済(口授)・西洋諸札・2
唱 歌	軍 音・2	復 音・2	和文唱歌・3	"	2	英語唱歌・2	"	"
図 画	器具花菜・1	植 物・1	動物並幾何図・2	"	1			
体 操								
音 楽	(エ・ア・ソ・ラ・ミ・ファ・ソ・ラ・ミ)・3	"	3	"	3	"	3	"
計	25	25	25	25	25	25	25	25

修身並ニ体操ハ教授時間外ニ適度ノ教授ヲナスモノトス ○音楽ハ望ミノ者ニ限リ授業時間外特ニ教授ス ○理科中口授ト朱書セルモノハ教員諸君ヨリ按テ講述シ生徒ヲシテ筆記セシム、故ニ別ニ書目ヲ定メズ

(注) 明治 20 年 普 通 第 二 種 願 向 届 録 ・ 学 務 課 (東京府文書)

明治 21 年 桜井女学校 科学 期 課程 表

(私立桜井女学校改正願)

聖書科 修身科 國漢文 英語 地理 天文 歴史 算術・代數 博物 図字面 教育學 唱歌・音樂 裁縫・編物 體操 計	1 年		2 年		3 年		4 年	
	創世紀 2.5	埃及記 2.5	" 2.5	約西華士師記 2.5	福音合致 2.5	" 2.5	猶太國誌 2.5	" 2.5
	讀書・作文 4	" 4	" 4	" 4	" 4	" 4	修身學 5	" 4
	語學・作文 6	語學・作文・ 文法 6	文法・讀書 5	讀書・文章 5	文章 5	" 5	" 4	文學 3
					地文 2.5	" 2.5		
							天文 2.5	" 2.5
	外國歴史 日本・支那 3	" 3	" 2	" 2	万国史 4	" 4	" 4	" 2
	算術・代數 5	" 5	" 5	代數幾何 2	" 5	" 5	幾何・三角術 5	三角術 5
			生理 2	動植物 2	" 1.5			
	習字圖學 4	" 4	" 4	" 4	" 1.5			
					教育法 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5
	唱歌・音樂 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5
	裁縫・編物 2.5	" 2.5	" 2.5	" 2.5	" 2.5	" 2.5	" 2.5	" 2.5
	體操 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 1.5	" 2.5
計	30	30	30	30	30	30	30	30

表中 ○ハ英語ヲ以教授ス

(注) 明治 21 年 願向屆録各種學校(東京府文書)

明治21年桜井女学校高等部学科课程 (私立桜井女学校改正願)

	1 年		2 年		備 考
聖書科	健行伝 2.5	" 2.5	予言書 2.5	" 2.5	
文学			英文学 3	" 3	
歴史	万国史 3	" 3	教会史 3	" 3	
化学	化学書 3	" 3			
論理	論理学 3				
哲学			基督教証据論 3	" 3	
心理			心理学 3	" 3	
経済	家事・経済 3	" 3			
音楽	洋琴・風琴 5	" 5	" 5	" 5	志願者ノミ課ス
画学	墨画・水彩画・油画	" "	" "	" "	志願者ノミ課ス 但當分設ケス
外国語	羅甸・仏蘭西・独逸	" "	" "	" "	上ニ同ジ
体操	1.5	1.5	1.5	1.5	
計	21	21	21	21	

明治21年願伺届録・各種学校(東京府文書)

明治22年駿台英和女学校科学期課程（駿台英和女学校設立変更之願）

	子 科	本 科 1 年	本 科 2 年	本 科 3 年	本 科 4 年	本 科 5 年
英 語 学	ライナー	万国史	〃	修身学	〃	星 学
	ワイルソン第2読本	作 文	〃	〃	〃	〃
	会 話		文 典	〃	物理学	〃
	書 取	〃	〃	〃	〃	〃
	訳 読	〃	〃	〃	〃	
			地 理 学	修 辞	〃	〃
漢 文 読 書			生 理 学	〃	独読質問	〃
	国史概要	日本外史	日本外史・十八史略	十八史略・元明史略	文章軌範	漢文抄読
	四 則	分数、小数、諸等	諸 比 例	級数開平開立	代 数 学	代数学・幾何学
	地 理 学	日本及万国地理概略				
	作 文	天 間 文	漢文交り文	〃	〃	〃
習 字	仮名・ペンペンシツプ1	楷書・ペンペンシツプ2	行書・ペンペンシツプ3, 4	草書・ペンペンシツプ5, 6	楷行草ペンペンシツプ7, 8	細字連字ペンペンシツプ9, 10
唱 歌	単 音	〃	〃	〃	〃	〃
裁 縫	簡易ノモノ	〃	漸密ナルモノ	〃	最密ナルモノ	〃
物 理 学			概 略			
生 理 学				概 略		
動 物 学					概 略	
植 物 学						概 略
修 身 学	講述或ハ講義	〃	〃	〃	〃	〃
衛 生 学						概 略
計	英語16, 他15	31	〃	〃	〃	〃

明治22年東京英和女学校学科課程

1 年		2 年		3 年		4 年		5 年	
日 本	代 物理 学	"	代 数	"	幾 何	"	經 济	"	政 治
	皇 朝 史 略	"	日 本 文 学	"	化 学	"	生 理 学	"	学 校 史
英 語	博 物 学 初 步	"	万 国 史	"	英 国 史	"	聖 經 史	"	心 理 学
	地 理 学	算 万 国 史 法	米 国 史	"	動 物 学	"	聖 經 史	"	天 文 学
			倫 理 学	植 物 学	修 辞 学		地 質 学	英 文 学	論 理 学
									教會 史

築地海浜女学校ノ卒業生及ビ他ノ日本派女ニ高等普通学科ヲ授ケ殊ニ基督教ノ真理ヲ知ラシムルニアリ
聖書・唱歌・図画・英和書法・裁縫・女紅・刺繍・作文法等ノ各級ニ之ヲ授ケ

(注) 青山学院 90 年 史 p. 222
明治 24 年 海 岸 女 学 校 規 則

1 年		2 年		3 年		4 年		5 年		6 年	
日 本	小学読本 算術 地理切法 東京地誌 書	"	小学読本 算術 地理 書	"	高等科読本 算術 歴史 文	"	日本略史 算術 物理 文	"	日本外史 算術 物理 文	"	日本外史 算術 物理 学
		"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
英 語		里 發 音 法	語 讀 本 第 1 冊	"	讀 本 第 2 冊	"	讀 本 第 3 冊	"	讀 本 第 4 冊	"	讀 本 第 5 冊
		語 訳 學	"	書 讀 學	"	訳 讀 學	"	作 文 學	"	暗 算 學	"
			"	"	"	"	"	"	"	"	"
			"	"	"	"	"	"	"	"	"

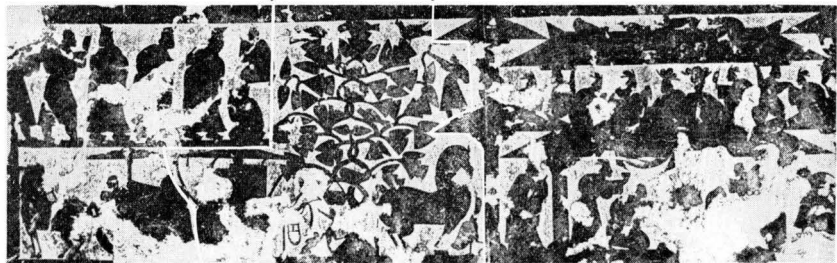
左ノ課程ハ東京英和女学校ヘ入ルノ予備科トス。聖書・唱歌・図画・英和書法・体操・裁縫・女礼式等ハ各級ニ之ヲ授ケ。右学科ノ外、ビアノ並ニラーガンハ別科トシテ志願ノ者ニ授ケルモノトス。

(注) 青山学院 90 年 史 p. 220

明治 25 年 照 暗 女 学 校 課 程

本 科 1 年	本 科 2 年	本 科 3 年	本 科 4 年	高 等 科 1 年	高 等 科 2 年
修身 始行実践之道 1	" 1	" 1	" 1	" 1	" 1
読書 仮名交り文 5	" 5	" 5	漢 文 開平、開立、求積 4	和文・漢文 代數分數、代數一次方程式 5	" 5
算術 珠算四則雜題 筆算加減乘除 5	諸等・分數・小數 5	諸比例・利息算 4	開平、開立、求積 代數四則 4	代數分數、代數一次方程式 平面幾何 5	二次方程式、立体幾何 三角術平面 5
作文 平 簡 文 1	消 息 文 1	消 息 文・叙 事 文 1	近 代 文・消 息 文 1	和 文・漢 文 1	" 1
英語 読方・綴字・習字 5	読方・簡易作文・会話 5	読方・文典口授 簡平文・会話 5	読方・小文典 叙事文・会話 5	修辭学・会話 5	教育論・和文英訳 会話 5
歴史 本邦歴史 2	" 2	支那歴史・万国歴史 2	米国歴史 2	本邦歴史・英國歴史 2	文 明 史 2
地理 本邦地理 1	" 1	万国地理 2	" 2	地 文 学 2	学 校 紀 要 2
理科 日常目撃スル事物ニツキ 口授シ之ヲテスルノ所ニテテ授ケル 1	" 1		生 理 2	物 理 学 2	化 学 2
生理 1					
博物 1		植物・動物 1			
習字 楷 書 3	行 書 3	草 書 3	各 体 細 字 2		
図画 自在画・各種ノ曲線 2	器 具 類 2	植物・景色 2	動 物 1	器械類、用器画 2	" 2
音楽 単音唱歌 1	" 1	風琴実習・復音唱歌 1	" 1	" 1	" 1
裁縫 運針・衣類名称 毛糸編物・単衣類 3	拾・綿入類 3	前年ノ繰ノ羽織類 及西洋裁縫 3	" 3	綿入、羽織、袴 及西洋裁縫 3	" 3
容儀 1		女 礼 式 1	" 1	" 1	
経済 1				家事経済 3	
計 30	30	30	30	30	30

(注) 平安女学院 85 年 史 p. 47~49



图一 武梁石室 第三石



图二 武氏祠前石室 第三石



图三 武氏祠左石室 第八石

武氏祠画像石における

「巨樹の図」について

土居 淑子

すでに様式化のすすんだ漢代画像の数々の図像も、意外にその本来の意味を忠実に伝えている場合が多い。

武氏祠石祠堂の各正面に当る、武梁石室第三石・前石室第三石・左右室第八石の三石には、いずれも大きな建造物とともに、同じような巨樹が重要な位置を占めていることは、すでに長広氏によって指摘されたところ^①、建物がある画面の中心線よりひどく右に片よっていることからうかがえる。また巨樹は本来建物とは無関係な独立したテーマであった事も、済寧画像（図四）や両城山画像（図六・七）などによって明らかである^②。

この巨樹について、『石索』以後、E・シャヴァンヌ、関野貞らの先学は「合歡樹」と呼ばれ、近年は湯谷にて太陽を思わす「扶桑樹」とみなされるようになっていく。それは樹木が、くさり状にからみ合う連木状という、きわめて象徴的な様相をなしており、そこに配された多くの鳥や弓を引く人物、馬車などの要素よりみて推察されたものである。ところが、ここで「扶桑樹」と解することに誰しも今一つのためらいを感じるものが

ある。それは「扶桑樹」であるならば、それに配された馬は、当然太陽説話に付きものの天空を駆けめぐる天馬であることになる。また鳥と、弓を引く人物よりただちに想起することは、十日説話であり、鳥はからすであることになる。太陽を表すからすは、古代中国では三足のからすが一般的で、現に画像には三足のからすが太陽の象徴として画かれている。が、今巨樹の馬や鳥には、こうした説話構成にふさわしい表徴に欠けており、それが「扶桑樹」と断定することにちゅうちょさせる原因であるように思われる。いったいに様式化のすすんだ画像というものは、その過程で様々な付随物が加わって、本来の題材の解釈を困難にしていることがしばしば見られるものである。したがって一つの図像について、その成立をたどることは、題材究明の上で重要な一手段であるといえよう。そこで私はこの巨樹の図の再検討にあたって、題材考察にはこの図像の系譜をたどり本来のテーマを見きわめる必要があると考える。

即ち、武氏祠画像石の巨樹の図に関して、先にのべた鳥・馬の属性ばかりでなく、扶桑樹は連木であるという証拠はないばかりか、漢代の一般的な考え方では、連木というものは後述するように、単なる瑞祥の一つでしかなかったのである^④。

二

そこで先ず巨樹の図について検討をするまえに、武氏祠画像石の三つの正面画像に関し、どこまでを巨樹の図のはんいとするかを明らかにしなければならぬ。がそこには色々むずかしい問題がある。かりに建造物と樹木を切りはなすとしても、建造物の上層と下層は、題材的にどの様な関連が

あるかいまだ未解決のところである。^⑤ それには、上層の表す意味が明らかにならねばならないが、逆に巨樹の図の内容が明確にされ得た時に、改めて考察すべきことであるともいえる。ここでは一応保留して、建造物は上下まとめて切りはなして考えることにしたい。

さて武梁石室・前石室・左右室の三つの巨樹の場面をくらべてみると、樹木の左側は、武梁石室のみ左向する馬車一台が余計に画かれている。これは前石・左右の図よりみて無関係なものと考えてよいだろう。また、武梁・左右の樹木の左上には、数名の人物が居並ぶ姿がみられるが、これは前石には見られない。この居並ぶ人物が構成要素として加えられるべきかどうかについては、これだけでは判断できないが、濟寧画像(図四)の四つに区切られた画像を参照すると、右下層に同じような樹木表現がみられても人物は見当らない。この例から考えて、やはり除外してよい部分だと思われる。

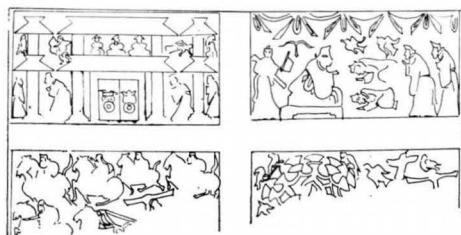
次いで樹木の右側に目を向けたい。三つの図はいずれも闕によって区切ることができるが、武梁祠、前石室は闕の屋根の上部に弓を引く人物がいる。この人物は一見屋根の上にのぼっているかの様だが、中国の古代画法である、遠いものを画面の上方に置くという習慣からすると、闕の向う側の地上にいることになる。その人物は二人共左向になって、鳥を射落そうとする姿勢であり、これは左右の例よりみても当然、樹木に附随する要素としてよいだろう。従って、武氏祠画像の三面における巨樹の図のはんいは、図一・二・三に示したように白線のわくの内側であるとされる。

三面とも中央には、大きな樹木が連木状をなし、先端にはパルメット風の葉とも実ともつかないものをつけている。枝間には鳥や猿のような動物

がところどころにおり、地上には大や、大きな鳥などのいるにぎやかな風景である。車はみな馬からはなされ、樹木の両側に対称的に配されている。ただ前石のみは、馬と車は全く反対の位置におかれ、なお建造物に向っていない。他の二面は建物に対し巨樹の図は、馬車が建物の中央に向っているため、いかにも下層の家屋内の人物を中心とする一画面であるかのような印象を与えるのである。これはこの場面を構成するに当たっての工人のすぐれた造型力によるものといえよう。ただ、建物と樹木が単に画面の意匠化というだけの点で、工人が同画面に並置しかものか、あるいは、本来題材の上で結合する要因をもっていたために、ここに合成される結果となったかは問題のあるところである。この点も巨樹の図が解釈された時にいえることである。

さて、このように正面画像から、巨樹の図のはんいを抽出してみると、図一・二・三の白線内のようにまことに単純な図象になってしまふ。そこでこれを単位とする同類の図を、同じ山東省における漢代画像よりえらび出してみると、およそ次のような例が得られる。

畧名不詳 永和二年 (374 A.D.)
山東画像(図五)



図四 濟寧画像

濟寧県両城山画像（其十四）⁽⁷⁾（図六）

濟寧県両城山画像（其九—37）⁽⁸⁾（図七）

滕県画像⁽⁹⁾（図八）

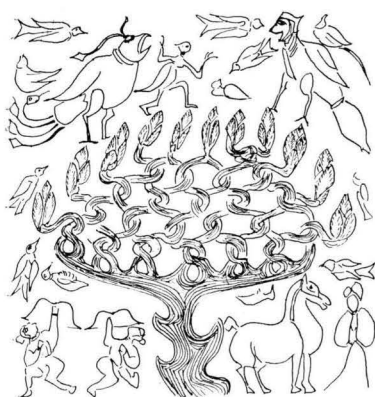
安丘県画像⁽¹⁰⁾（図九）

この他、樹木があつて鳥や弓を引く人物はいるが、馬あるいは馬車のないものがある。

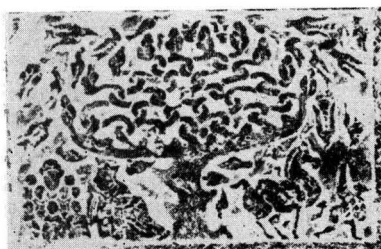
濟寧県郭泰碑陰画像（其一）⁽¹¹⁾（図十）

肥城県孝堂山画像東壁面（図十一）

また樹木中心に鳥・馬はあつても、弓を引く人物のみられないものがある。
嘉祥県劉村洪福院画像（図十二）



図五 永和二年銘山東画像



図六 両城山画像（其十四）

濟寧県両城山画像（其九—38）⁽¹²⁾（図十三）

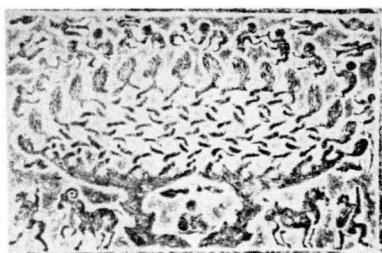
さらにこれらとは、いささか系列はこととなるが、樹木表現の点で、年代の基準として参考となる画像に、

戴氏亭堂画像、永初七年銘（13A.D.）（図十六）

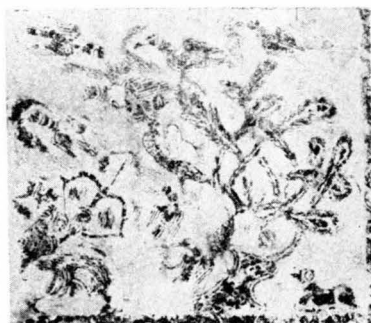
というのをあげておく。つまり、先記の永和二年銘（357A.D.）と共に、113~137A.D.の頃の樹木表現はおおよそこの様な様式を示していたことが知られる。両城山画像（其九）（其十四—37・38）の三面は、この永和二年銘の樹木に類似することからみて、ほぼ同じ頃か、やや下の二世紀半ば頃迄のものと推定される。また、永初七年銘、永和二年銘画像は、出所不明となっている画像だが、樹木の画き方からすると、両城山画像に属するものとみてさしつかえないだろう。

ここで注目されることは、同じ両城山画像の中に、二世紀半ば頃巨樹表現でも、弓を引く人物のいるものとそうでないものと二種があることである。これは単に両城山画像ばかりにとどまらず、それに類する図が、前記の通り劉村洪福院画像にもみうけられることは、ただ偶然でないことを示している。その図は、連木を中心に、左右相称に馬の配されたシンメトリックな図象である。そして両城山画像（其九—38）（図七）の方も、弓を引く人物はいるが配置はシンメトリックである。このように左右相称という性格は、この画像を考える上に無視することの出来ない特徴のようである。

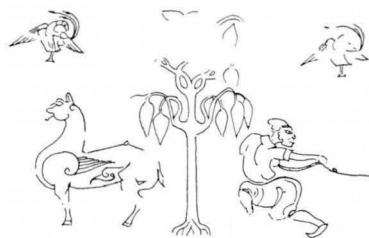
こうした点より、これらの例証にもとづいて今しばらく



図七 濟寧県両城山画像



図八 遼 県 画 象



図九 河南鄭州画像

く巨樹の図の系譜をたどってみることにする。

三

ここでもう一度前記の作品について年代をみてみたい。

まず郭泰碑陰画像(図九)と孝堂山画像(図十)であるが、孝堂山画像はおおよそ紀元後百年頃に成立した画像であることは、今更いうまでもない。が、郭泰碑陰画像は明らかでない。樹木は連木状をなさず、非常に自然で様式化されてない人物の画き方はきわめて単純であることから、かなり早い時期に成立したのではないだろうか。孝堂山の樹木は、すでに連木状をなしていることをみても、郭泰碑はそれ以前のものとみることが出来る。また、郭泰碑には十羽の鳥がとんでいて、弓を引く人物は樹木の

左右に二人画かれている。郭泰碑陰、孝堂山画像は一世紀後半の画像で、武氏祠、両城山系の先の画像よりはやく成立し、鳥を射落す場面である点で、武氏祠画像の巨樹の図の先行画像であるといえる。

それに対し、劉村洪福院画像(図十一)は、樹木の表現は武氏祠画像の巨樹に類する表現であるが、この画像の成立は、その上層にある風伯、雨師、あるいは人物の画き方が、孝堂山系の表現様式であることから、孝堂山画像に近い時期に成立したと考えられる。しかし樹木を比較しても孝堂山画像よりはややおそく、また武氏祠よりは早い、一世紀前半とすればよいだろう。したがって前記の両城山画像(其九—38)とほぼ同じ頃とゆうことになる。そして前の孝堂山及び郭泰碑陰画像には弓を引く人物はいるが馬はいない。それに対しこの方は馬はいるが弓を引く人物はいない。前

者が武氏祠巨樹の図の一系列にあるとすれば、この方は別の意味で一系列に当る画像ということになる。この事を更に明瞭に示すと思われるのが、両城山画像（其九—37）や永和二年銘画像であると考ええる。両者は、こうした二つの系列の図象が結合されていることがうかがえるもので、特に図七は、弓を引く人物と共に、馬と羊に左右対称の位置に配されている。これによっても、この巨樹の図というものは、前記の二つの画像の系列をひくものであることが明らかとなった。

ただ、ここで嘉祥画像の、左右相称に馬を配した図によって想起するのは、戦国時代の齊の半瓦当に付せられた、樹木中心文様の意匠である（図十四）。この意匠は、山東臨淄県の齊において盛行したのが、閔野雄氏の考察によると、およそ 379—221 B. C. の百五、六十年の間とされている。文様は、半円形の面の中央には樹木をえがき、左右に主として馬をシンメトリックに配していて、時に鳥や猿を付するものもみうけられる。ただ樹木はいずれも連木状をなしてはおらず、文様化されてはいてもさほど硬化せずに、自然の柔軟性をとどめている。そして画像としてはまことに軽快な明るさを感じさせるものである。つまり先にあげた、図十二や十三の樹木の両側に馬を配した画像の淵源は、半瓦当の樹木中心文にあるのではないだろうか。同じ山東省の地であれば、戦国時代に流行した意匠が、前後漢代を通じて伝統として伝えられる可能性は十分あると考えられる。ただそこには時間の経過のうちに、中央樹木は連木に仕立てあげられた。つまり前記の図十二や十三がそれである。では連木があらわれたのはいつ頃であったか。少くとも、図十の前記の例証中、最も古いと思われる画像では、枝は平行にのび、先端が実状にふくらんでいる点で、半瓦当文に近い樹木

である。が、孝堂山あたりで始めて連木状をなすところから、一世紀前半に成立したと推測される。

但し、これは山東省のことで、中央の洛陽出土のすでに前漢末と推定される埴文には、明瞭な連木が盛行していたのであった（図十五）。また、一方文献では、前漢武帝の時の記事にすでに連木があらわれる。

従って上雍に幸し五驛を祠り、白驛を獲たり、一角にして五蹄。時にまた奇木を得たり。其枝、旁より出で、輒ち復木上にて合す。上、此の二物を異とし……（『前漢書』卷六十四 嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈伝）

ここに奇木とあるのが、その説明より連木であることがわかる。そして武帝がこの奇木を瑞祥としていかに愛好したかは、後漢代の王充が、

凡そ諸衆の瑞、重至なる者は希なり。（中略）武帝は黄竜、麒麟、連木、宣帝は……（『論衡』卷十九 恢国篇）

と記していることから知る事ができる。つまり、連木が具体的な形をとってあらわれるのが、前漢武帝の頃で、洛陽出土の前漢の埴に盛んにえがかれたのも、そうした連木流行の反映だと考えられる。

これに対し、山東省では二世紀前半に隆盛するが、その成立にあたっては、おそらく洛陽埴などの影響が及んだのであろう。後漢代、山東画像石の製作が盛んになるや、戦国以来の樹木中心文は、新たな意匠をもって、再び画像の一主題として登場してきたのであった。

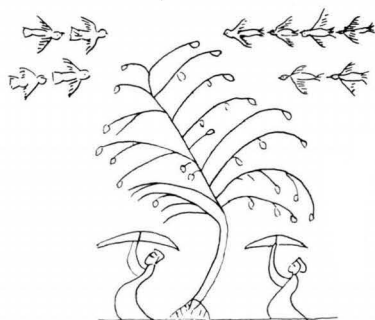
しかし一方では、山東の連木は別種の画像として展開していった。それが、弓を引く人物のいる、樹木表現のもう一つの系譜の画像であり、やがてこの方が様々な要素を加えながら、巨樹の図として成立するに至った。両城山画像、永和二年画像、それに武氏祠画像の巨樹の図がそれである。

その場合図象的には、半瓦当以来の、樹木中心文系の図像が与えた影響は少くないだろう。しかしながら、永和二年銘(図五)にせよ、両城山画像(其十四)(図六)にせよ、画面に馬のみでなく婦人の姿が加わっていること、また武氏祠画像(図一三)では、馬が馬車になっているという変化は、題材表現の上で、何らかの新たな解釈が加えられているであろうことを考慮しなければならぬであろう。

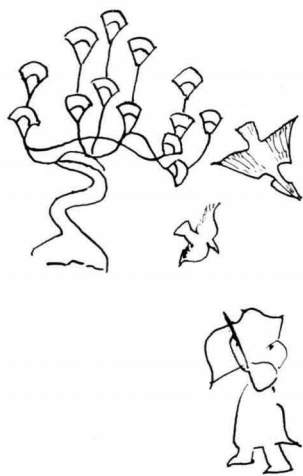
そこで次に題材を、図象の二つの系譜について考察してみたい。

四

はじめに半瓦当以来の樹木中心文の図をとりあげよう。まずこの装飾意匠が、半瓦当においてはどのような意味をもっていたかという問題であ



図十 郭泰碑陰画像



図十一 孝堂山東壁画像

る。これについては、関野雄氏が「半瓦当略説」¹⁹⁾及び「中国古代の樹木思想」——斉の半瓦当の樹木文様——にて、既に考察されている。氏によると、古代中国人の最も普遍的な崇拜は、森林や老樹、大樹に対する崇拜のうちの一つであるところの、「社」であったとされ、ことに「社」は斉の祭祀の代表的なものとして重要視されていたという。また、斉の庶民はこのほか、樹木に対し深い愛着をもっており、また戦国の山東地方は非常に樹木が多いところであって、こうした環境の中で、樹木文様がおのずからやしなわれたのであらうとのべられている。私はこの見解は妥当であると考ええる。というのは、この戦国時代は確かに植文文への関心は高まってきた。半瓦当の樹木中心文もそのあらわれであるが、その起源を、戦国時代大量に流入した西方系文物の一つとする見方をとるならば、中国に伝来した時には、ことに樹木に対する関

心の深い山東の地に根をおろし、はぐくまれたと考えることが出来るのである。ただ西方系樹木中心文と半瓦当のそれを結びつける考え方に対しては、様式的点でも更に詳細な検討が必要とされる。が、一つの見方として、外来要素を決して生のままみずからの表現様式のうちにとり入れようと

しない漢民族が、戦国頃に流入した樹木中心文の意匠様式を、たちどころに、彼らなりに咀嚼してつくりあげたのが、半瓦当の文様であるとみることである。従って、そこには彼らの樹木崇拜の思想がおのずから結びついていたとして、当然ではないだろうか。

さて半瓦当に付せられた樹木中心文と同じ系列に属する洪福院画像(図十二)や、両城山画像(其九—38)(図十三)の図は画像配置の点では変っていない。しかし、三百年ほど経過した場合、何ら意味するところも変らずに、再び画像に登場したのであるうか。これを考える前に、ここでもう一方の画像を先にとりあげてみることにする。

ではもう一方の、弓を引く人物のいる図はどうか。先にあげた郭泰碑陰の図、および孝堂山画像という、比較的初期のその図がらを見ると、これこそ古来から漢民族の説話として有名な「十日説話」であると考え、即ち堯の時、十日並びて出で、草木焦枯す。堯、羿に命じて十日を仰射せしむ。其九日にあたりて、日中の九鳥皆死して羽翼を墮せり。(「楚辞」・天問篇の王逸注に引く所の「淮南子」)

という内容である。これは「莊子」の

十日並びて出で、万物皆照さる。

といった説話が発展したもので、前者は早魃に関する太陽説話なのである。それは、古代農耕民族にとっての重大な関心事であって、後漢代においても広く親しまれていたとしても不思議ではない。また、この説話と樹木の関係は、

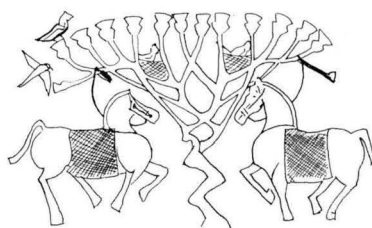
谷有り、温源谷いと曰う。湯谷上に扶木あり、一日方に至らんとするや、一日方にいでんとす。皆鳥を戴いた。 (「山海経」大荒東経)²⁵

という別の一文により、鳥いが戴いた日が交替する扶木という樹木のあったことを記している。これと同類の記事としてまた次のような一文もある。日、湯谷に出で、咸池に浴して、扶桑を扶いう。是れ晨明あけという。(中略)悲泉に至り、爰こゝに其馬を止め、爰こゝに其馬を思おもひしむ。是れ果車と謂いう。(「淮南子」天文訓)²⁶

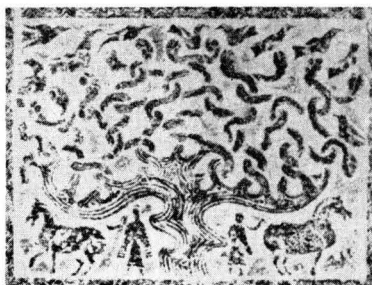
あるいは、

余が馬を咸池に飲いましめ、余が轡しを扶桑いに窓すぶ。(「楚辞」離騷)²⁷

といつて、湯谷に扶木、あるいは扶桑木と称する樹木があったということが、一般的に考えられていたようである。この扶桑木で日が交替する説話と、先の早魃にちなむ十日説話とは、本来別々の話であるが、日に関する性質上、容易に結合し得る可能性もまた多分に含んでいるものである。そして



図十二 嘉祥果画像



図十三 濟寧県両城山画像

『山海經』では扶桑木に至る日は明らかに複数とみなしており、また『莊子』の「十日が皆出て万物を照した」という話から、扶桑木に行きかう太陽も十個の太陽であったと考えられていたのではないだろうか。

郭泰碑陰画像は、この十日説話を最も忠実に画いた図であるといえる。

それは『淮南子』（『楚辭』所引）の一文の内容と合致するものである。また、両城山画像（其九—38）は、図像的には確かに半瓦当系の図であるが、画かれた鳥は十羽であること、また婦人らしい人物がみえることなどから、題材はこの扶桑樹説話をあらわしているのではあるまいか。先の『淮南子』天文訓や『山海經』の内容とくらべ、合致する点が多分に見つけられるのである。そのうちで婦人については、他の画像の図五・六・七などにも共通する問題であるが、これで注目されるのが、『淮南子』天文訓と『楚辭』離騷の記事である。つまり「其女を止め、其馬を息わしむ」「余が馬を咸池に飲ましめ……」の両者は、出石氏により古代中国における Sun-chariot ²⁸ 伝説であるとして指摘されたところであって、太陽を御するのは女性であると考えられていた事を『淮南子』は物語っている。したがって、画像の中に婦人が配されるのは、この点を表すものではないだろうか。私は、図十三はこうした点より、扶桑樹説話をあらわしていると考ええる。ただ同類の図十二はどちらとも断定する手がかりは見当らない。

さて、ここで十日説話にもう一度たちかえってみることにする。

孝堂山よりのちになると、両城山画像にせよ武氏祠の画像にせよ、單なる十日説話に関する要素ばかりでなく、他の要素が入ってくる。この点はずでに、様式上の観点よりみると、もう一方の画像が合成されたかたちであると先にのべたところである。今、その一方の画像が、同じく太陽にち

なむ扶桑樹説話であるということになると、この十日説話ときわめて似かよった内容をもち、両者が題材の上で結合するのは容易である。それはたとえ、記録の上で合成された説話として見いだせないとしても、くり返しくり返し一つの題材について画像をきざむうちに、いつしか民間に伝わる同種の題材が付加されていくことは、工人の手になる古代の画像発展の上で考えられてよいだろう。

図五・九までの画像は、この様な早魃に関する十日説話と湯谷の扶桑樹説話との合わさった図であると考ええる。従ってここに画かれた連木は、当然扶桑樹と解釈することができるであろう。そしてこれは武氏祠正面画像についても認められると考える。ただ、そこでは馬が馬車となっていることは他に例をみないが、それは武氏というとりわけ身分の高い一族のための祠堂として、特別な配慮をもって作成された画像石であることによったのではないだろうか。おそらく、良匠の一人である衛改ら²⁹が、当時の社会制度に照合して、風習にのっとって画きなおしたものと思われる。では、馬車の御者はどこにいるのだろうか。問題は扶桑樹説話における婦人の像が、巨樹の図として区切ったはんいには見えないことである。そこで注目されるのが、右側の建物上層の中央に坐っている婦人像である。これが下層と、題材的に本来別種のものであることはすでにふれた。この婦人像は左右数名の侍者にかしずかれ、貴い身分の者であるようだが、祠堂の画像中には別に西王母は画かれているため、西王母とみなす理由はない。やはり、前にのべた日御としての女性と解するべきではないだろうか。

私は、『淮南子』天文訓や『楚辭』離騷にあらわれたところの、一日の運行を終えて、湯谷の扶桑木に帰った太陽が、日御の女神を息わせ、馬を

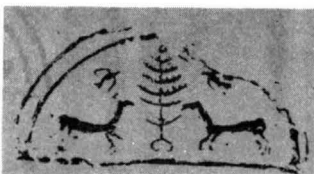
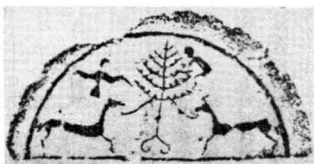
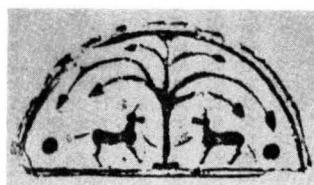
扶桑木の下で休ませる場面が画かれていると考える。

従って、武氏、祠正面画像の巨樹の図は、旱魃に関する十日説話と、日の運行についての日御の説話とが、扶桑木を中心に同一場面に表現された図であることになる。

五

広大な中国において、今日迄に発見された画像石は、おびただしい数にのぼっている。それらは地域的に集中して出土するが、これまでの考察に当っては、主に山東地方の連木状の樹木の図を検討した。その結果この連木は山東にあっては確かに扶桑木を意味するといえるが、他の地域の画像では必ずしも、扶桑木とは見なしえないのではないかと思われる。

例えば、先の洛陽出土磚（図十五）や徐州睢寧県旧朱集九女墩画像の連木には、前記の説話とする要素は何もない。先にものべたように漢代の



図十四 齊の半瓦当

連木は、一般に単なる瑞祥というだけであつたことから、これらの画像はそうした当時の瑞祥を画いたものと見るべきではないか。山東以外の地で扶桑樹を画いた画像としては、遠い四川省にあるのみである。

また同山東にても、永初七年銘の戴氏享堂画像（図十六）の場合はどうか。樹木は明らかに連木であるが、画面の左はじに寄り、中央の太鼓をたたく祭の場面にそえられている。この連木の周囲には、弓を引く人物もいなければ、また馬車もない。ただ鳥がとびかい、樹下では人が、手を叩き、拍子をとって歌でもうたっているのであらうか。傍らでは子供が逆立ちを演ずる。この連木の上方左には、両城山画像（図十三）、永和二年銘画像（図五）に見られるのと同じような婦人がたっている。こうした点から、はたしてこの連木が瑞祥のみの樹木であるといえるだろうか。山東における連木の特殊な意味が、強い伝統となつて浸透している中で、同じ頃、同じ地域で、全く別個の意味において連木が画かれ得るものか疑問に思う。この図は、たとえ瑞祥にせよ、彼らにとって特殊な意味をもつ樹木のそばで祭を行つている野外の風景である。

山東には、半瓦当の樹木中心文の流行に關し、すでに関野雄氏によって指摘されたように、樹木を中心とする特定の聖城への信仰が深かった。それは土地神である社への信仰であるが、出石氏は戦国頃になると、独立樹が崇拜の対象となり、一応の制度化をみるに至つて、前漢にかけての頃に社は最終的な発展段階に入つたという。⁽³⁴⁾それは彼らの精神的支柱である宗廟崇拜との結合が成立し、同位に置かれるに至り、後漢代頃に継承されていたと出石氏は説明されている。⁽³⁵⁾

樹木崇拜は、古代民族にあってはしばしば共通する原始信仰であるが、⁽³⁶⁾

古代漢民族にとつての生活で、いかなる位置を占めていたか。それは、E・シヴァンスが、独立樹を對象とする制度化された社について指摘されたところである。即ちその祭りは、主として日蝕・旱魃・大雨・出師の時に呪術的な儀式を行い、鼓を打ち鳴らして牲を供えたという。これらの祭りをみると、農耕を基盤とする彼らの社会で、社のしめる位置の重大さが察せられるであろう。更に右の祭りのうちでも、

秋大水、鼓するに牲を社に門に用つてするも亦常に非ざる也。凡そ天災は幣ありて牲無し。日月の害に非ざれば鼓せざるなり。〔左伝〕莊公二十有五年

といつて、秋の大水の時、社にて太鼓を打つて祭るが、凡そ太鼓を打つのは日月のわざわいの際であるという。つまり、日蝕・旱魃・大雨はいずれも太陽の異変現象で、一般の人々にとっては一大関心事であつた。そのため社の祭りに一般の人々が加わつた。「春、旱して雨を求む。県邑を合し、水日を以て民をして社に禱しむ」〔春秋繁露〕卷十六 求雨 第七十四といったのがその例である。古代生活においては、種々の祭りが行われたであろうが、太鼓をたたいてする祭祀として最も重要なものは、先の一文よりみて社の太陽異変の場合ではなからうか。



図十五 安丘県画像

戴氏享堂画像が、とりわけりっぱな太鼓を画面中央に象徴的に画いているのは、そうした県邑の中心的存在でもある社の祭りを表そうとしているのではないかと思うのである。そしてまた、「日月の害に非ざれば鼓せざるなり」の一文で明らかのように、社の太鼓は太陽異変に関する意味をもつのである。すると、連木は、太陽に関する説話を現す扶桑樹とみたられてゐた事から、両者は相共通する性格をもっていることになる。従つて、戴氏享堂画像が、ここでは連木をもつて社とみたて、そこで日月の祭りを行つてゐる場面と考えられなければならないか。日蝕・大雨の際に鼓するというのは、日に活気を与えるためであつたという。また、社における樹木が必ずしも特定の樹木ではなく、文献により様々な種類がみうけられる。ただ「社稷に樹有る所以は何ぞや、尊んで之を識し、民をして望かに見せしめば、即ち之を救わん。……」〔白虎通 卷二、社稷〕というように、はるかに望み見ることの出来る大樹であつたことが窺える。霊的地域にある大樹が、瑞祥であり、想像上の樹型である連木で現わされたと見なすことは出来ないであろうか。

補遺

以上、私は武氏祠画像石の巨樹の図について、その系譜をたどることによつて、題材の分析を試みたつもりである。要約すると、図像的には戦国時代における、同じ山東の地斉の半瓦当の樹木中心文にさかのぼる。が、前漢より後漢代にかけて河南地方では、連木型が成立する。その頃、つまり一世紀頃、山東では再び樹木を中心とした図があらわれるが、題材は十日説話であり、扶桑木としてみなされていたようである。これには図像的に

二つの系列があった。一つは戦国以来の樹木中心文の構図をうけついでいるもので、題材は太陽の運行についての扶桑木の説話、一つは早魃に関する十日説話で、弓を引く人物のいる図である。ただし両者とも樹木は連木である。やがて、題材の性質上、両者は画面の上で結合し、運行をたすける日御としての女性の姿まで画かれるようになった。それが武氏祠画像は、乗物は馬車となり、日御は右の建造物の上層にえがかれるに至った。又、他の画像では乗物は馬であるが、天空を行く馬として漢代には天馬という考え方があった。ただし天馬は汗血馬をさして呼ぶ場合が多く、要するに天空をとぶがごとくに疾走する馬を想像したのである。また空を飛ぶ馬として先の河南の塼に羽翼をもつ馬(図十五)があるが、ここには、天かける馬というのが、古来の太陽説話の馬と造形的に結びついていた形跡はないようである。また武氏祠画像の中にも、羽翼をもつて天を走る馬があり、この太陽を馳る馬にそうした形がとれなかったのはふにおちない。がそこには戦国以来の伝統的図像の流れを、強くうけていることによるのではないのであろうか。

これ迄、扶桑木ではないかと考えられていた武氏祠画像石の巨樹は、こうした理由により、扶桑木と呼ぶことが出来る。それは、山東画像に関する限りにおいていえる、特殊な意味付けである。

そこにまつわる伝説もまた一つではなく、断片的に、種々な形で伝わる話が付加されて出来上っている。正面画像がまことに複雑化しているのも、そのような理由による。

そこにまた建物が結合した。戴氏享堂画像が、祭りと結びついたときには、工人の意識の中には、社の祭りという現実の場面があったのではない

かと考えられる。が、はたして武氏祠画像においてはどうかであろうか。

一つの見方として、右の拝礼図(或いは供饌図)を、一般的な祖先への拝礼とみるならば、宗廟と社という関係に見たてて並置したとは考えられないだろうか、「墨子」の「明鬼篇」には「昔者、虞夏商周三代の聖王、其れ始めて国を建て、都を営むの日、必ず国の正壇を扱ひ、置きて以てて宗廟と為し、必ず木の條茂せるを扱ひて、以て



図十六 戴氏享堂画像

最位と為せり」⁽⁴⁾とあり、この習慣は、実際には戦国より前漢にかけて発展したという。「礼記」(祭儀の項)には「建国之神位は、社稷を右にし、宗廟を左にす」⁽⁵⁾といい、宗廟と社の位置が記されている。このような実際の宗廟という建物と、社稷という独立樹の關係からヒントを得て、構成された画面ではないだろうか。山東には古来有名な次睢社という大社が存したことも注目されよう。

戴氏享堂画像、或いは武氏祠画像にしろ、画像石という伝襲性の強い刻画においても、わずかではあれ、時としてすぐれた工人の創意が働いて、新たな画面が生み出されて行くものではないだろうか。

註

- ① 長広敏雄武氏「武氏祠左右室第九石の画像について」『東方学報』京都第31冊、一九六一年三月
- ② この点についても、長広氏は前掲論文にて、濟寧画像をとりあげて指摘されている。
- ③ 清・馮雲鵬・馮雲鵬編『金石索』
- E. Chavannes "La sculpture sur pierre en Chine au temps des deux dynasties Han," Paris, 1893, p.29
- 関野貞「支那山東省における漢代墳墓の表飾」一九一六年、本文五一頁これらに対し、扶桑樹という名称は、Mrs. Wilma Fairbank "The Offering Shrines of 'Wu Liang Tzu'" (Harvard Journal of Asiatic Studies, vol. 6, 1941) や、長広氏の前掲論文のなかで、このいわゆる扶桑樹の場面"という一節にみられる。

④ 江上波夫「漢代に於ける連木文とその西方への流伝」(『東方学報』東京第六冊、昭和七年)

⑤ ①参照

⑥ 巴利大学刊『漢代画像全集』初編 p. 177, (第三五二図)

⑦ 同 二編 p. 14 (第二二図)

⑧ 同 初編 p. 33 (第三七図)

⑨ 同 " p. 35 (第一〇八図)

⑩ 『文物』一九六四年第四期

⑪ 同 二編 p. 34 (第四二図)

⑫ 同 初編 p. 108 (第一〇八図)

⑬ 同 " p. 33 (第三八図)

⑭ 雨風・伯師ことに風伯という自然現象を表す神像が、孝堂山画像と武氏祠画像とは大いに異なる。前者は風を起す人物が、口で建物の屋根を吹き飛ばしているところを表している。それに対し後者では、雲の上ののって両師や雷公らと共に空を駆けめぐって、扇で風をおこしている。この図の画き方、或いは目の大きい人物の表現などの上で嘉祥画像(図十一)は孝堂山画像に非常に近いものである。孝堂山画像の成立時期は、来訪者のらくがき中に「永建四年」(29 A.D.)の年号があることによりそれを下らず、また様式からみて、一世紀後半とされた関野貞氏の見方(『支那山東省における漢代墳墓の表飾』1916)が認められている。

⑮ 関野雄「半瓦当略説」(4)系統と年代(『中国考古学研究』p. 516~517 1963, 東京大学出版)

⑯ 河南省文化局文物工作隊第一、二隊編『河南出土空心埴拓片集』一九

六三年、北京、三〇図

①⑦ 従上幸雍祠五時、獲白麟、一角而五蹄。時又得奇木、其枝旁出、輒復合於木上。上異此二物、博謀群臣。

①⑧ 凡諸衆瑞重至者希。漢文帝黃竜玉棂。武帝黃竜麒麟連木。宣帝鳳皇五至。麒麟神雀甘露醴泉黃竜神光。平帝白雉黑雉。孝明麒麟神雀甘露醴泉白雉黑雉芝草連木嘉禾。与宣帝同奇。

①⑨ 前掲『中国考古学研究』所収

②⑩ 同①⑧

②⑪ 長沙より出土した戦国時代の漆器には、明らかに植物系文様のモチーフが画かれている（拙稿「沂南画像石に現われた一植物系文様について」『美術史研究』第三冊早大美術史学会刊 1961 所収）。また戦国銅器にはしばしば花文を型どった文様が付せられている。

②② 太田晴子氏は「中国戦国時代に於ける樹木中心文様の西方からの伝来について」（『美術史研究』第三冊早大美術史学会刊 1961）において、齊の半瓦当にあらわれた樹木中心文が、西方の聖樹中心文に由来すると説明された。結論的には当時可成りの影響があったであろうことは、認められてよいだろう。

②③ 堯時十日並出、草木焦枯、堯命羿仰射十日、中其九日、日中九鳥皆死墮羽翼。

②④ 十日並出、万物皆照。

②⑤ 有谷曰温源谷、湯谷上扶有木、一日方至一日方出、皆載于鳥。

②⑥ 日出于暘谷、浴于咸池、扞于扶桑、是謂晨明。登于扶桑、爰始將行、是謂旦明。至于曲阿、是謂旦明。至于曾泉、是謂蚤食。至于桑野、是謂

晏食。至于衡陽、是謂隅中。至于昆吾、是謂正中。至于鳥次、是謂小還。至于悲谷、是謂餽時。至于女紀、是謂大還。至于淵虞、是謂高春。至于連石、是謂下春。至于悲泉、爰止其女、爰息其馬、是謂乘車。至于虞淵、是謂黃昏。至于蒙谷、是謂定昏。

②⑦ 飲余馬於咸池兮、惣余轡乎扶桑。

②⑧ 出石誠彦「天馬考」（『支那神話伝説の研究』昭和十八年刊）

②⑨ 武氏一族に関しては、今日あまり明らかでない。ただ一族の一人である武斑氏の事跡を記した碑文に、

敦煌長史武君諱斑字宜長。昔殷王武丁克伐鬼方。元功章炳、勲威王府。官族分析因以為代焉。武氏蓋其後也。商周微藐、歷正壙遠、不隕其美。漢興以來、爵位相踵、□朝忠臣。（以下略）

という。武氏が殷王武丁の後裔であると文中でいう点は、いささか付会にすぎようだが、漢代の高官として家名を誇る家があったらうことは窺える。武斑はその一人として、敦煌長史となった人であった。

③⑩ 『隸釈』巻六に引かれた「武梁碑」文にその名がみえる。

③⑪ 江蘇省文物管理委员会編著『江蘇徐州漢画像石』図二十七、科学出版社刊、一九五九年

③② 聞宥集撰『四川漢代画像選集』一九五六年、北京、第三十一図

③③ 参照

③④ 出石誠彦「社を中心として見たる社稷考」（『支那神話伝説の研究』所収）三七九—三九〇頁

③⑤ 同右

③⑥ J. G. Frazer "The Worship of Nature," (The Golden Bough: vol. 1).

③⑦ E. Chavannes, "De T'ai Chan," *Essai de monographie d'un culte Chinois, appendice Le dieu du sol dans la Chine antique*, VI, VII, X, p.478-501, Paris, 1910.

③⑧ 夏六月、辛未朔、日有食之、鼓用牲于社。非常也。唯正月之朔、慫未作。日有食之、於是乎用幣于社、伐鼓于朝。

秋大水、鼓用牲于社于門、亦非常也。凡天災、有幣無牲。非日月之食不鼓。

③⑨ 春旱求雨、令縣邑以水日令民禱社。

④⑩ 出石氏前掲論文註③④ 三六七頁

④⑪ 社稷所以有樹何、尊而識使人望見、師(即)敬之。

④⑫ 漢天馬歌曰、太一脫沾赤汗、沫流赭志椒儼、精摧奇籙騰浮雲、跪上馳体容与、遡万里、今安匹竜為友。(芸文類聚卷九十三、馬部所引)

④⑬ 「供饌罔」という名称は、長広氏が前掲論文註①にて、左右室の同場面に対して用いられた。

④⑭ 且惟昔者、虞夏商周三代之聖王、其始建国當都日、必圻国之正壇、置以為宗廟、必圻木之脩茂者、立以為最位。

④⑮ 建国之神位、右社稷而左宗廟。

ラジオ的表現論

庄司 寿完

1

「テレビ時代」という言葉が日常的な用語として通用するにいたった今日、ラジオについての表現論は、ほとんど姿を絶つてしまっている。それほど圧倒的なテレビの普及なのである。しかし、新しいメディアムの登場で、すっかり影の薄くなったラジオはその表現上の可能性のすべてを出しつくして、二次的メディアムに退き下がっているといえるのであろうか。即物的な情報伝達におけるインフォメーション量ということになれば、視聴覚メディアムであるテレビの方が、ラジオに当然のことながらまさっている。そうであればこそ、速報はラジオで、詳細と解説はテレビ、反省と検討は新聞・雑誌で、という報道情報受容のパターンが成立しているのである。しかし、伝達ではなくて、表現の問題として考えてみるとどうであるうか。ラジオという音のみによる表現手段は、その自律的な表現ジャンルを確立しえたであらうか。「音のみ」という属性が、制約条件としてのみ解され、そこにおいて可能な表現の領域が探索されつくさないまま、

「画の加わった」メディアムに、安易に関心をそらしてしまったことはいであらうか。芸術が、人間性の自由な表現であるならば、人類が生み出した表現手段を十全に活かした努力を、要求されるのは、当然ではなからうか。ここで「ラジオ的表現」とよぶのは、そうしたメディアムの属性自体を、積極的に評価して、そこにおいて試みられる芸術表現の意である。

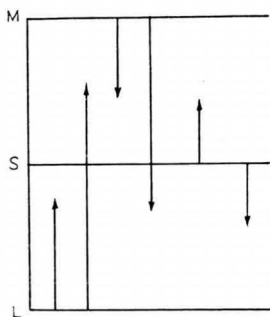
この属性はひとことでいって、「音による表現」である。「音」とはなにか。そこには楽音を頂点とする秩序立てられた音響というものがある。そこには、言語体系の具象的な表現である語音がある。またそこには、秩序立てられないさまざまな音が混在している、いずれにしても、すべては「音」で表現される。

たしかに音楽というものはラジオの得意とするジャンルである。しかし、いわゆる音楽——ラジオという表現手段を介してはじめて存在しうる音楽は除く——は、その存在に必ずしもラジオというメディアムを必要とはしない。レコードによる音楽体験というものの自体、音楽美学上さまざまな問題をはらんでいることは、すでにいわれていることであるが、本来の音楽体験ということであれば、それは一回性と臨場を要件とする演奏への接触においてはじめて成立するものである。ラジオによる音楽の放送は、ラジオを通じての音楽の伝達であり、これをラジオによる表現とよぶわけにはいかない。

一方、象徴である言語記号による伝達ないし表現がある。言語はそもそも、その音声的な性格に特異性を有しており、その象徴はまさに音響に由来している。当然、ラジオの得意とするジャンルとなる。詩の朗読、ラジオドラマなどは、ラジオ独自の領域として評価されてきた。しかし、これ

が、あくまでも「意味をもつこと」、いいかえれば、語象徴の特定機能たる、ある思考または指示をよび起すことを意図として持つ場合、簡単にいうならば、それが言語表現にとどまる限り、いかにラジオドラマとよんでみても、それは演劇あるいは文学の代替行為の場における表現となり、言葉の正しい意味において、エクスペリメンテーションとはいえないのである。

それでは「ラジオ的表現」はいかにして自律的な表現ジャンルたりうるであろうか。それは、なにかすでにあるものの再生的伝達ではないはずである。それはすでに確立された表現ジャンルの媒介にとどまるはずもない。ラジオがあくまで「音」において表現をする手段である以上、それは一方に音響の秩序たる音楽を、他方に、語象徴の機能の發揮たる言語表現を持つ「音」表現のスペクトルの中間において成立するものだ、というよりほかはない。これを簡単に図示するとつぎのようになる。



Mは音楽であり、これは人間の音響感覚の特性に基づいて秩序立てられた「音」の芸術である。Lは「ことば」であり、人間の語象徴の特定機能

たる意味の伝達の面での極である。Sは「音」であり、これはMの方向にも、Lの方向にも可能性として志向を持っている。あるいは、L自体がSに向かう志向を、また、M自体がSに向かう志向を有しているともいえる。そこで、LからSに向かうが全面的にSにはならない、あるいはLからMに向かうが、全面的にMにはならない状況、MからSに、またLに向かうが、全面的にSに、またLにはならない状況、さらに、SからMに、あるいはLに向かうが全面的にMに、あるいはLにはならない状況、こういった中間において成立する表現の場が、ここで対象としている「ラジオ的表現」の場となる。

中間という言葉は、価値評価を加えられたものとして受け取られやすいが、比喩的にいえば、「ことば」が意味伝達機能の衣裳を脱ぎかけた状況、音が音としての指示性の手袋をとりかかった状況、音楽が絶対音楽的な音の秩序とハーモニーの胴着をはずしかかった状況、いいかえると、そういった本来の——ということはいくまで現実世界の——外見を保たせている磁場から離れかかっている状況である。

2

こうした「ラジオ的表現」が具体的にはいかなる形をとって可能となるかを、作品例を通じていささか明らかにしたいと思う。とりあげる作品は、シュールレアリスムの詩人アンドレ・ブルトンの「ナジャ」に基づいて、アンドレ・アルミューロが書いた「星にきらめくナジャ」である。両作品については少し解説を加える必要があるが、その前に、「ラジオ的表現」とシュールレアリスムの関係について二三言及しておきたい。

『ナジャ』においてもそうであるが、シュールレアリスムの作家は好んで夢や狂気の状態をとりあげる。これはシュールレアリスムにとってはその本質に関わる問題である。すなわち、夢や狂気において、はじめて無意識的自我——ブルトン^{ブルトン}はこれを *soi* とよび、フロイトはかつてこれを *ego* とよんだ——が自己をあらわす。シュールレアリスムの独自の手法である自動記述法は、まさに、この無意識からのメッセージを記述するものである。それではなぜ無意識的自我は、そうした夢や狂気の状態においてしか自己をあらわすことができないのであろうか。人間は、覚醒した状態にあっては、意識的自我——ブルトン^{ブルトン}はこれを *moi* とよび、フロイトは *Ego* とよんだ——が、社会的動物としての人間の社会に対する外面的適応を確保している。

「フロイトに言わせると、この世界〔*soi*〕の世界……引用者」は各種の無意識的な欲望や人に打ちあけがたいさまざまな性向の象徴であり、この世界を理解することによって、人間は自己の全的な意識に達しうるのはずである。人はややもすると、この財宝を闇のなかに放置し、実人生において成功しようとして動きまわることがつまずき、われわれ自身の存在を分断することにほかならない」（イヴ・デュプレシス『シュールレアリスム』邦訳「文庫クセジュ」四二～四三頁）

本来、自己の全的な意識を保障されている人間が、現実の社会においては、さまざまな制約・抑圧——社会制度上、慣習上の「秩序」——によって、存在を分断されているのである。

そこで考えてみよう。例えば言語、ソシュール流に言えばラングであるが、これはいわば、言語社会の成員の心に貯えられた象徴・印象の体系で

ある。「ことば」が「ことば」としての象徴機能を充分に發揮するためには、勝手な——体系から外れた——使用は認められない。シュールレアリスムは、こうした抑圧された「ことば」の現実をくつがえす。位置転換による慣習の否定、象徴機能の剥奪からことばの記号化、そうした手法は「音」のみによる表現であるラジオにおいて、きわめて適用自由な場を見出すことができるわけである。

同じことは、シュールレアリスムの重要な概念である「オブジェ」についてもいえる。シュールレアリスムにおけるこの概念について、稲田三吉氏はつぎのようにいっている。

「……chose のほうは、そのラテン語の語源からしても、人間と対象であるものとの関係をつねに考慮した……つまり、両者の間の相関関係においてとらえられたものである。だから、人間が何らかの使用目的をもって自然から奪いとってきたもの、あるいは自然のなかのさまざまな素材を組みあわせて作ったもの、つまりわれわれの日常生活の周囲に見いだされるもの、それがすべて chose である。……objet（客体）とは、もちろん *sub*（主体）に対照しておかれた概念であるが、chose のように主体との相関関係においてとらえられたものではない。objet はそれ自体、*sub* とは無関係に、独立して存在している。このような、人間によって飼いならされていないもの、つまり何らかの使用の目的をはなれて、それ自体で存在しているようなものは、おそらく近代生活をいとなんでいるわれわれの身边にはひとつもないにちがいない。……シュールレアリスムは、chose からその使用目的を奪い、あるいはその chose が本来そこにおいてのみ使用されるべく定められた場所から、他の場所へとそれを移しかえて

「*Onna*」を作ったわけである。」（ブルトン「ナジャ」の解説、稲田訳「ナジャ」現代思潮社、二二・三・二五頁）

引用が長くなったが、ここでも「ことば」と同じように、ものについての制約とその解放が課題になっているのである。この課題と「ラジオ的表現」とがいかなる関係にあるのか。ここでミュージック・コンクレートの問題が出てくる。ミュージック・コンクレートを創案したビエール・シェフェールは、鐘の音を収録し、その衝撃音部分を切り離して、新しい、異なった音を得たとき、これを「音のオブジェ」と呼んだ。つまり、音を生み出したものの、「音体」*corp sonore* から切り離され、それ自体で独立したものの、いいかえればオブジェとして存在するものである。それは、音の「意味」からの剥奪であり、こうした音の与件から採取された素材で構成されたコンポジションという立場を、シェフェールはミュージック・コンクレートと呼んだのである。これはまさに、シュールレアリスムの根本的思想と一致する。そして、なによりも収録・編集・再生を生命とするミュージック・コンクレートは、ラジオにおいてどこよりも自由な表現の場を見出しうるのである。ミュージック・コンクレートが、楽音のような「概念化された」音や、楽曲のような形式による表現をもこえて、直接に人間の内奥に訴える音の表現力の開拓になりうるとき、それはまた、シュールレアリスムの究極の目的とした人間精神の自由な飛躍へと、われわれを導くものになるのである。

3

原作「ナジャ」は、アンドレ・ブルトンが一九二七年の夏、書いたもので、

シュールレアリスムの思想の具現化として、広く知られている。（邦訳は前記のように詩人稲田三吉氏によるすぐれたものが、一九六二年に出ている。）「ナジャ」はブルトン自身の体験から生まれた具体の世界の中の超現実の記述である。ナジャはどこから現われたか分らない妖精のような女であるが、「私」がこの女性と出会い、自分の合理的な因果の判断の外で生起するさまざまな偶然に導かれて、捕え難い超現実の体験をする。「ナジャ」の、分量でいってはじめの三分の一は、ナジャとの物語に入る序の部分で、過去十年間のさまざまな不思議な出来事が語られている。その序の中に完全な記述として、フォンテーヌ街の「二反面劇場」で見た吸血鬼と同性愛のにじんだ芝居「氣の狂った女たち」の大体の筋が入っている。ナジャとの物語に入ってから、かなりクロノロジカルに物語が進んでいる。この不思議な、コカイン中毒かも知れない女性、最後には精神病院に入れられてしまう。

ラジオの方の「ナジャ」は、この原作にもとづいて、アンドレ・アルミエロが書いたもので、時間にして七十一分半のものである。アルミエロは序の部分に出ている「氣の狂った女たち」の芝居を、ナジャと「私」とのランデヴーの間に、七つの部分に分割して折り込んでいく。ごく単純に説明するならば、アルミエロは「ナジャ」の原作を、ブルトンであるナレーターの「私」と、コカイン中毒らしいナジャとの物語の線と、これに交錯して、「氣の狂った女たち」の芝居の線を、ということはいいかえれば、ナジャと同じ女優によって演じられるコカイン中毒らしいソランジュが美しい少女を殺害し、その死体が戸棚から発見されるといふ異常なクライマックスに終わる「氣の狂った女たち」の線と、ナジャが精神病院に入れら

れて姿を消すにいたるという線とを、同じ高みにいたるら、旋のように交錯させている。さらにアルミューロは、原作にないブルトンの詩句を自由に加えている。ことに最後に近い部分の三分間には、ブルトンの詩『自由な結合』の全篇を入れている。

4

はじめに図示したところから察せられるように、このラジオ作品の表現について大まかにいって分析は、「音」、「音楽」、「ことば」の各領域において可能である。各領域について典型的なものをあげて説明したいと思う。

1 「音の領域」

a 街頭ノイズ

「私」はナジャとランデヴーを重ねるがその場面は当然、街頭となる。その街頭では二〇年代の自動車のエンジンがひびき、石だたみを急ぎ足で近づいてくるナジャの足音がコツコツと聞えてくる。人声もする。そうした音声はかなりリアルなものとして扱われる場合もあるが、ナジャが自分の思い出にひたったり、少しばかり錯乱に陥ったりするシーンでは、その背景である街頭の人声に変質する。これはノーマルなスピードで収録されたものを半分のスピードに落すことによって行なわれている。人声のノイズとして感じられるが、しかし、それは現実の中の超現実としての性格を与えられている。

b 「気の狂った女たち」の

芝居の中の時計の音

この芝居は女学校長室を舞台にして進行するが、その第三、第五の挿入部分に時計の音が使われている。第三部分は時計の振子の音、第五部分は時を打つ音。第三部分はいらいらしてソランジュの来るのを待っている女学校長の前にやっとソランジュが現われ、二人で美しい少女のことを夢中になって話す場面。ここでははじめから時計の音が聞えている。久しぶりに会って日常的なせりふのやりとりのあと、どうやらソランジュはコカインの注射をするらしいが、それから二人は秘儀的な話合いをはじめ。美しい少女をめぐる血のおう話。この後半部分になると、それまでの時計の音が急に半音下がる。ここでも時計の音と識別されるものの、現実の音それ自体ではない。第五部分は一人の美しい少女の姿が見えなくなったというので、女学校長、学校医、ろれつの回らない頭のおかしな庭師などが集まって、こういうことは去年もあった話しかっている場面。ここでは、はじめから時計が時を打っている。ところが途中から、「死」がしのびよっていることが観客に分かる頃から、この時計の音のテンポは急に落ちる。

c 駅の汽笛

「私はしだいに彼女のひとりごとについてゆくのが苦しくなってきた」と「私」が意識し出したある夜、二人はバリを離れてどこかへ行こうとサン・ラザール駅に向かう。駅でナジャは、「いったいだれがゴルゴンを殺したの。ねえ、だれ？」と、反復し、口ばしる。その場面の背景が汽笛であるが、これはテープ処理されている。その結果、GとAの二度音程の開きで音は交錯している。それは汽笛そのものではなくなっ

ている。しかし。なお、汽笛らしいものとして——指示の機能をコンテキストの中で——認識される。

2 音楽の領域

この作品で音楽を担当しているのはモーリス・ジャールである。全体的にいえることは、ここで書かれている音楽は、ミュージック・コンクレートの明らかな影響を受け、音楽を旋律性の優位の上に考える考え方が排除され、音色と衝撃のインパクト、マスとしての音のかたまりの表情的なクレシエンド、ディクレッシェンドとして扱われている。

冒頭、この全体の作品の性格を明らかにするように、フル・オーケストラによるマッシヴな音塊の急迫するクレッシェンドの反復、その中からソロ・バイオリンの高音域のトレモロが引き出される。この部分全体、テープ速度は倍に早められている。こうしたテープ処理は随所に見られる。ある場合には、マッシヴな音の上に、テープ処理——速度に關しての——をしない弦の持続音がのせられる。

オブセッシヴな反復は、ミュージック・コンクレートの技術的な本質ともつながりがあるものであるが、この作品の音楽も音も、そして「ことば」も、すべてが、その原則の上に流動しているといえる。セーヌ河岸にそって歩いていたある夜、ナジャは錯乱の状態で叫ぶ。その場面、河岸のランデヴーの音楽は金管楽器の幅の厚い波のうねりである。As↓G↓F↓A↓G↓F↓Gといううねりが幾度も幾度もくり返される。その上に乾いた音でシロフォンが走る。音楽処理において、音の動く幅が

狭いのが、この作品の音楽の特色である。旋律性を排除し、一方でオブセッシヴな表現を意図して、音はきわめて狭い範囲を執拗に上下する。

3 「ことば」の領域

この作品では、この「ことば」の領域においてこそ、脚色者（アンドレ・アルミエロ）、作曲家（モーリス・ジャール）、演出者（ジャンジャック・ヴィエルヌ）三者の「ラジオ的表現」を目指しての、コラボラシオンの密度が高く、成果をあげていると考えられる。

「私」がはじめてナジャに会った日、ナジャは「私」が結婚していることを知って落胆する。その場面につづいて、打楽器の連打となり、その中からトランペットのフィギュアが浮き出てきて、コーラスとなる。このコーラスの「ことば」は、「ボワジ・シャルボン」、カメ・デュール、「メゾン・ルージュ」、「ボリス」といったものである。まず、「ボワジ・シャルボン」というのは、「新炭商」の看板の文字であり、原作の序の部分で、現実の中の超現実的偶然のエピソードの一つになっているものである。ある日曜日、歩きまわって、新炭商の店がどこに現われるかを不思議に「私」は当てることができた。それは、「私」は、「あの幾つもの円形をした薪の一つのイメージによって、教えられ導かれていったのである。これがオブセッションとなって、「私」の頭にこびりつく。原本にはこの看板をかかげた店の写真が出ている。「カメ・デュール」というのは、「らでん細工」という看板の文字のことで、これは序ではなく本文の中にあり、写真が出ている。ある日、「私」とナジ

ヤが町を歩いていると一人の老婆が鉛筆をかしてくれという。その老婆

は、自分はカメー夫人を尋ねてきたのだが、あいにく留守だとつづる。

ところがその事件は不思議にも、「カメ・デュール」つまりらでん細工の店の前で起ったのである。つぎに、「メゾン・ルージュ」と「ポリス」は序の部分に出てくるものであり、「私」がルイ・アラゴンに教えられることである。つまり、「メゾン・ルージュ」というホテルの看板が、ある角度から見ると「メゾン」が消えて「ルージュ」という文字が「ポリス」というように読めるといった視覚の幻影である。この体験がそれだけではなく、同じような体験がつづくというところに意味があるわけであるが、ラジオでは、こうした視覚の幻影を音のモニタージュで表現している。打楽器の連打はすぐに四拍子のリズムとなり、そのリズムにのせて男声が「ボワジ・シャルボン、ボワジ・シャルボン」とはじめる。それに重ねて女声で「カメ・デュール、カメ・デュール」とつづき、さらに、「メゾン・ルージュ」、「ポリス」と重ねられる。カメ・デュール」が出るころには打楽器のリズムは消えて、声のモニタージュだけになる。なお、看板の方は本来「*bois charbon*」なのであるが、音楽的処理のため *bois* を入れて、「ボア」の *bois* を有声化し、四シラブルにしている。

こうしたモニタージュの中で、「ことば」がその意味伝達の機能から脱却して、音 (phonemes) の方向へ、そして音楽の方向に向かっていくのである。しかも、そこでも、意味をすっかり失うほどには遠ざからないのである。

5

この小論では、「ラジオ的表現」を、ラジオにおいてのみ独自に可能な表現として、音楽でもない、ドラマでもない、いわば「あいまい性」の領域の積極的評価を試みた。あるいは、例としてあげた作品のためもあるが、あまりにシュールレアリスムに即しすぎたきらいがあるかも知れない。しかしこれは、おそらくは今日ふたたび検討が行なわれ、新らしく評価が下されようとしているシュールレアリスムを通過することによって、より一般的な現代表現論の一環たりうることであらう。

いずれにせよ、「音」による表現手段であるラジオの表現上の可能性はまだ探究されつくしているとは考えられない。現代における人間性の十全の発現という大きな問題とのかかわり合いの中で、「ラジオ的表現」がより広く論議され、作品のうちに実現されることを切望してやまない。

なお、ブルトンの原作による『星にきらめくナジャ』の録音テープを聴く機会を提供されたNHKの放送文化研究所のご好意に対し厚くお礼を申し述べたい。

イレクトリック・タイプライター

(その普及と効用)

井口美登利

さのみ遠くない過去においては、高度のぜいたく品とみなされていた各種の家庭電化器具が、今日では完全に日常生活の必需品となってきたており、われわれもまた、それを至極当然のこととして受け入れている。いささか大げさな表現をあえてするならば、これは家庭生活すくなくとも家事作業における産業革命であり、技術革新であると言ってもよいであろう。

しかし、家庭における動力の導入は、もとより大量生産によるコストの減少とか、製品の均一性とかを目標とするものではなく、むしろ家事作業に対する労力の節約、時間の短縮をその主要な目的としているのである。

電気洗濯機の購入価格は、木製洗濯板のそれに百倍する。しかもそのすみやかな普及を可能としたことには、価格の大差を補って余りあるだけの効用があまねく使用者に認められたからに外ならない。

十九世紀末にはじめて開発された「字を書く機械」——タイプライターと、ペン、鉛筆における関係も、これに類似するものであった。現在欧米

においては、およそ字を書くという仕事に関するあらゆる方面でタイプライターは使用されている。オフィス・カレッジから、さらに進んで一般家庭にいたるまで、その普及はめざましく、今日では、「あらゆる文字——唯一の例外、署名を除き——タイプライターで書いてよく、いや書いた方がよい。」という習慣になってきている。

この間の事情を示す好例として、エミリー・ポスト女史は次のように述べている。

USING THE TYPEWRITER FOR PERSONAL CORRESPONDENCE

The personal use of portable or standard typewriters has created a certain amount of confusion concerning the occasions when it may or may not be used in writing letters.

First of all, the typewritten letters is not only proper but also preferred for all personal letters of any length. Yesterday's objection to the typewritten personal letter was the result of the practice of dictation such letters to a secretary or stenographer. But now, when almost everyone can use a typewriter himself, the objection no longer holds, and the ease with which a typed page can be read is, for most of us, more than compensation for the loss of a handwritten letter that is difficult to decipher.

Whether the letter is written by hand or on the machine, the

manner of composition is the same.

Page 529, *Emily Post's ETIQUETTE (The Blue Book of Social Usage)*, 1957, Funk & Wagnalls Company, New York

実用的に見て、タイプライティングのスピードは、ハンドライティングに数倍する。そしてまた、ポスト女史がいみじくも指摘しているように、タイプライトされた文書を読むために必要な時間は、どんなにいいに書かれたハンドライティングよりも格段にすくないのである。

タイプライターの効用は次の三点に要約されるであろう。

(1) スピード……ハンドライティングに比らべて決定的に速い。これは一定の文書を作るための時間を短縮し、一定時間内に作る文書の量を増大させる。

(2) 読み易く、整った印字……だれにでも読めるくせない字が、一定の大きさにそろって書ける。これは単に文書の体裁を向上させるだけでなく、読むための時間と労力を大幅に節約し、また一定時間内に読む文書の量を飛躍的に増加させる。

(3) ファイル・コピーの得易さ……カーボン・ペーパーを併用すれば、オリジナルをタイプすると同時に必要な枚数だけのコピーが取れ、コピーを整理・保存することによって後日の照合ができる。

(ファイル・コピーの作製は、近年開発されたケミカル・カーボンペーパーないしカーボンレス・カーボンペーパーを使用することにより一層容易となった。これは表裏とも無色の特種加工紙を

所望枚数だけ重ねてタイプするだけで、明瞭かつ永久的なコピーが得られる。従来のように、いちいちカーボンペーパーを挿入する手間がかからないわけである。)

以上の効用は、ローマ字を使用する欧米語のタイプライターについては、まさに決定的であった。そして現在では、オフィス・カレッジにとどまらず、あまねく一般家庭にまでタイプライターの普及してきたことは既に述べた通りである。

「漢字カナまじり文」という複雑な文字構成を持つ日本語の宿命としていわゆる邦文タイプライターの効用には大きな制約がある。国語表記の方法が「カナ文字化」さらには「ローマ字化」された暁はいざ知らず、すくなくとも現在および近い将来の時点においては、その普及が欧米の例のように一般家庭に及ぶことは到底想像できないであろう。それは、当用漢字・制限漢字といくら整理を進めたとしても漢字の絶対量が百ないし千を単位とすることから、最大の効用、スピードに著しいハンディキャップがあるからである。しかし読み易さ、コピーの取り易さという利点については、ある程度、欧文の場合に近く、これがオフィスを中心とする邦文タイプライターの普及をもたらしてきた。

さて、日本における欧文タイプライター——主として英文タイプライターの普及についてはどうであろうか。前掲三ヶ条の効用は欧(英)文を書くということに関する限りそのまま通用する。従って欧(英)文による文書の作製を必要とする場所においては、欧米なみの普及度に達してよいは

ずである。

当然のように欧(英)語は、わが国の母国語ではない。従って家庭は普通の場合その対象外となるが、オフィス特に欧(米)語の文書を往復する必要がある公私の諸団体、諸機関にあって、タイプライティングがまさに不可欠の要素となってきたことは、もはや周知の事実であろう。

ただ、わが国におけるもうひとつの欧(英)語をあつかう場所、学校にあって、その普及度の著しく低いことは、まことに不思議という外はない。わが国では、義務教育である中学校よりはじめて、高等学校、短期大学、大学・大学院に至るまでも外国語の科目がおかれてある。にもかかわらず、生徒、学生の提出する欧(英)文のレポートをはじめ、教師の作製・頒布する外国文の試験問題までをふくめて、はたしてその何パーセントがタイプライトされているであろうか。わずかに、短大、大学の外国語学・外国文学科の学生の卒業論文の大部分がふくまれている程度に過ぎない。すくなくとも高等学校以上の学校で教師が作製する文書ないし印刷物の原稿は、タイプライトするのが当然であろう。読み難く不揃いなハンドライティングでお茶をにごすのは、不勉強、不親切のそしりを免れないであろう。これは、外国語を実用とする経験ないし能力に欠けている教師が外国語もしくは外国語による諸学科を担当することの多いという、まことに憂うべき現状に大部分の原因があるものと思われる。

現在わが国のオフィスでハンドライティングによる欧(英)文を実用としていたところは、皆無といってよい。一般商社における事務系職員数に対するタイプライター設備台数の比率は、その規模の大きさ、業務の性

格等にもよるが、およそ十名に対し二、三台といったところであろう。タイプライターの種類は、その大部分が手動タイプライター——主としてスタンダード、ごく一部にポータブル——であり、電動タイプライターは比較的少数に止まっている。すなわち全タイプライターに対する電動タイプライターの比率は、およそ一〇パーセント内外に過ぎない。これは、欧米のオフィス・タイプライターの半分以上が電動によつて占められている現況に比べて、著しく差があるのである。しかしわが国においても大企業の貿易商社等の例を見れば、電動化の傾向は急速に進行しつつある。

(1) M物産においては、すでに数年前より新規購入(設備台数増加のための購入もあるが、既設のものの更新購入が主である)のタイプライターのすべてがイレトリック・タイプライターであり、現在同社の使用する約五百台のタイプライター中、その三分の一が電動化されている。

(2) 次表は欧文タイプライターのディーラーであるK社の最近の販売実績を示したものであるが、電動タイプライターの占める比率は着実に増加していることがわかる。

手動	電動	1964年	1965年	1966年 (前期)
		73%	65%	60%
手動	電動	27%	35%	40%
		73%	65%	60%

なお、この資料は、オフィス向けのみならず、国内における全タイプライターの販売数を基礎としているから、オフィスにおける実数

としては、電動の比率はさらに大きくなることが予想されるのである。

オフィス・タイプライターにおける電動化の傾向は、欧米にあっても、その進行に相当の時日を必要とした。その原因のひとつは、オフィスにおけるタイプライター購入の決定者が、多くの場合タイプライターの直接の使用者ではないということにあった。電動化によってもたらされる多くの利点について、もっともよく理解できるはずの使用者の発言に耳を傾ける経営者ないし管理者のすくなかったことは容易に想像される。また保守的であったのはひとり経営者・管理者のみではない。時として一部の書記やタイピストは未知の機械に対するおそれと、再訓練を必要とするかも知れない自己の技術に対する防衛本能から、電動タイプライターの採用に否定的ないし消極的な態度を示した。

第二は当然のことながら費用の問題である。電動タイプライターの価格は、手動スタンダード・タイプライターのそれに数倍した。特に設備台数の多いオフィスにあつては、全部もしくは一部の電動化に要する費用は相当の金額に上り、その決定権は多くの場合、上級管理者ないし経営者に委ねられた。彼等にこの価格差を補うに足る数々の利点を納得させることは、しかく容易ではなかつたであろう。また消費電力をふくむ雑推費の問題も——実際にはほとんど無視してよい程の額であつても——無理解な経営者に否定的に作用した。

第三は初期の電動タイプライターにおける機構上の欠点である。新しく

開発された機械の宿命として、当初予期し得ぬトラブルの発生したことは事実であり、めざましい改良が進められた後までも、不信を抱いた人々の多かつたことである。

もちろん、大規模な事務組織をかかえる進歩的な諸団体では、早くから電動タイプライターの効用に着目し、綿密な比較研究の結果、そつ先してタイプライターの全部もしくは一部の電動化にふみ切つたところもあつた。しからば電動化によって得られる長所・利点にはどのようなことがあつたのであろうか。

第一は、スピードの増大である。電動タイプライターはその機構上同じ程度の技術を持つタイピストが操作した場合、手動タイプライターに比し、確実にタイピング・スピードを増大させる可能性をもっている。これは当然、同一量の仕事に要する時間の短縮、あるいは同一時間内の仕事量の増大に役立つ。

第二は疲労の軽減である。手動タイプライターにおいては、キイをたたいて印字し、レバーでキャリエージをもどす操作は、当然のことながら専ら人力に依存する。難解な原稿を判読し、複雑な作表を行い、整つた文書を完成させるという智的な労働に加えて、文字通り筋肉的な労働もまた相当な量に上り、これはそのまま疲労の原因となつて蓄積されてくる。しかも、智的なタイピングに習熟した後といえども、筋肉労働による疲労因は解消せず、むしろ仕事量の増加に伴つて加重される結果となるのである。電動にあつては、印字も改行も、さらには大文字・小文字のきりかえさえ

も、キイを軽くおさえるだけでよい。すなわちキイはもはやスイッチにすぎず、動力は電気モーターによって供給され、人間の労力は大いに軽減される。すなわち、筋肉労働による疲労因の大部分はここに除去されるわけである。これはまた間接に、智的労働による疲労の軽減にも大きな効力をもたらし、作業量の増加と作業内容の質的な向上の両面に同時に作用するのである。

第三は、モーターによる印字という機構からくる印字の明瞭性、均一性である。手動タイプライターの場合、明瞭にして均一な印字を得るためには高度の熟練を必要とした。しかし電動タイプライターにあつては、いかなる初心者でも、キイのタッチを誤らぬかぎり均一で明瞭な印字が得られる。これは文書のタイポグラフィカルな品質を大いに向上させる結果となる。このことは、オリジナルの文書のみでなく、ファイル・コピーについても同様であり、手動に比し、多くの枚数の良質のコピーが得られるということになってくる。オフィスにおけるファイル・コピーの重量性を考えるとき、これはまことに大きな利点であるといわねばならない。

このような数々の長所があるにもかかわらず、電動タイプライターの普及、すくなくともオフィスにおける手動タイプライターとの交代がかなりの日日を要したことは既述の通りであるが、次にその事情をさらに詳細に分析して見よう。

電動タイプライターの普及と発達をはばんだ多くの障碍を究明する過程を通して、電動タイプライターの効用と利点を明らかにすることが本稿の目的のひとつであるからである。

(1) 用途および性能に対する誤解

はじめ経営者・管理者の多くは、電動タイプライターの用途をきわめて限定されたものとして考えてきた。すなわち一般の文書、書状の作製というよりは、トップ・マネージメントが直接に関与することの多い長文の報告書議事録の類、ないしは写真製版・オフセット印刷用のマスター・シートのような特に美しい印字の望ましい種類のものに対して試験的に使用した例がすこぶる多かったことはこの間の事情を示すものである。これはまた、仕事の分業が未分化の小規模な企業——だれもがタイプライターをたたく、ファイルもやり、計算機をあつかうような小人数のオフィス——では、電動タイプライターの採用が最後まで見送られたという事実にもあらわれている。しかし一たんオフィスで使われたイレクトリック・タイプライターは、着実にその成果を上げてきた。その明瞭で均一な印字は文書の体裁を著しく向上させたばかりでなく、使用者が機械に習熟するにつれて仕事の量もまた飛躍的に増加してきたのである。

しかも経営者にとってさらに重要な事実とは、電動タイプライターの使用によって、タイピストは大いにその肉体的労力を軽減され、それに反比例して仕事そのものの智的な注意力が増加するという、予期しなかった利益が目に見えて得られたことである。綿密で正確な仕事の遂行には、疲労が最大の敵である。特に肉体的な疲労は智的な集中力をさまたげる。疲労したタイピストは往々にして到底理解できないようなケヤレス・ミス・タイクをやるものであるが、こうしたミス・タイクがほとんど跡をたつたばかりでなく、現実にタイピストの欠勤率にまでまことに好ましい影響をもたら

して来た。これはひいては事務管理費の節減にも通じることと言うまでもない。

電動タイプライターの使用により得られる経営上の利益が、購入時の価格差を補って余りある事実を認識させたことは、従来手動タイプライターの果たしてきたすべての用途に、あるいはそれ以上の多目的にわたって電動タイプライターを採用させる契機となったのである。

電動タイプライターを使用した結果、その団体・企業の発するすべての文書の体裁が著しく向上したことによる、業務上・取引上の無形の利益について考えをおよぼすようになったのは、むしろ後のことであつた。

(2) トレーニングの問題

わが国においてはもちろん、欧米諸国にあつてもタイプライティングの基礎練習は多く手動タイプライターにより行われてきた。従つて当然完成された新人の電動タイピストの数はきわめてすくなかつた。さらにまたオフィスにおいて実際に仕事に従事している熟練した現役のタイピストを再訓練することもまた多くの困難な問題があつた。電動タイプライターがその本来の性能を発揮するためには、正しい操作の必要であることは論をまたない。しかしそのための訓練に長期間を要することになれば、事務の渋滞は目に見えている。さらに既成の手動タイピストの無理解な抵抗もあつたろう。しかし電動タイプライターの改良が進むにつれ、手動から電動への移行の問題は、比較的早い時期に克服されてきた。はじめこそ「食わずざらい」であつた保守的なタイピストさえも、ひとたび電動の使用に慣れた後はふたたび手動にもどらうとしないのが常であつた。今日では、完成

した手動タイピストならばいかなる種類の電動タイプライターに対しても三〇時間以内の練習で移行できるのが常であり、二、四週間後には、手動タイプライター使用時に比べて確実に仕事の量が増加することが示されている。もちろん作製された文書のタイポグラフィカルな質は使用の当初より、手動のそれにまさっているのである。

電動タイピングがオフィスにおける不可欠の要素であれば、職業としてのタイピストの訓練もまた電動タイピングの技術修得を目標としなければならぬ。それは手動から電動の移行は、オフィスにおけるよりも教室において、一層容易に行われ得るはずだからである。欧米では今日、ビズネス・タイプライティングの技能には当然数種の電動タイプライターの操作に習熟することをふくんでいるし、中には、基本訓練のはじめから電動タイプライターを使用することによつて、修得時間の大幅な短縮を果たしている例もある。

もつとも欧米では、ほとんどの家庭が手動タイプライターをもち、幼時からそれこそ試行錯誤的に、母国語をタイプライトしてきているから、教室ではじめてタイプライターに取組むという学生はきわめてすくないことを忘れてはならない。

(3) 操作音の問題

次にあげられたのは、電動タイプライターの操作音が手動に比し大きかつたことである。この欠点は、たしかに初期の電動タイプライターについては著しかったが、その後の研究と改良により、現在では手動タイプライターのそれとほとんど差のないところまで軽減されてきている。

しかし、能率的な事務管理に関心と理解を持つ進歩的なオフィスにおいては、早くからいわれる「サウンド・コンディショニング」が大きな問題として採り上げられてきていたから、こうした操作音については必要以上に敏感であつたし、特に操作音の減少に留意した構造の電動タイプライター——ノイズレス・タイプライター——の支持者も多かったことは事実である。

操作音の問題については、タイプライターを操作する際に発する音響の絶対量と同時に、その音響の性質——周波数と波形——が大きな要素となってくる。ノイズレス・タイプライターでは、その名の示すように、音響の絶対量のみならずその音質を改善することによって、人体に対する不快感を軽減させる方法をとっている。

最近の電動タイプライターにおいては、印字の際の噪音を極力防止する機構と材質を採用しているばかりでなく、いわゆるアイドリング・ノイズ——電源を入れ、モーターは回転しているが、印字も改行も行っていない準備・休止期間中の噪音に至るまで、その静粛化にめざましい成果をあげている。

アイドリング・ノイズが実用上、ゼロに近くなるにつれ、一日の仕事を終えたタイピストが、スイッチを切り忘れたまま帰宅するといふような新しい問題が生じてきた。そのため、スイッチを入れてから一定時間以上機械を操作しないと自動的にスイッチ・オフされる安全装置を備えた機械があらわれているほどである。

オフィスにおける噪音の問題は、その音源となる事務用機具その他に原因があることはもちろんであるが、オフィス自身の構造・配置・建築材料

さらにはデスクをはじめとするオフィス・ファニチャーにこれを倍加させる要因の内在していることが意外に多く、サウンド・コンディショニングはむしろこうした方面に対して一層の配慮をはらうべきであろう。

(4) 維持費の問題

初期の電動タイプライターにおいて、手動タイプライターに比べ、比較的高額の維持費を必要としたことは事実である。しかしそれとも通常の使用量では、せいぜい年間一本のパワー・ロールおよび数種のカムを交換する程度費用が追加されたに過ぎない。また、たしかに、初期の電動タイプライターでは、モーターの減速機構によるパワー・ロールの消耗がある程度避けられない構造をもっていた。しかしこれととも、自動車におけるタイヤ交換と同じ性質のものであったが、まもなく定速モーターを採用することにより、現在ではこの欠点はほとんど解消している。続いて、ナイロン・カムおよびナイロン・ギヤの開発は、旧型の電動タイプライターにおいて時として発生したカム・ギヤ関係の故障を事実上一掃したのである。電動タイプライターは、タイピング・リボンの消耗が早いという苦情も多かった。これは、高速でしかも走行距離の多い自動車のタイヤが当然すみやかに消耗するのと同じく、仕事の量を考えないでいう幼稚な場合もあったが、これもナイロンをリボンの素材とするようになってから、手動電動にかかわらず、インクが完全に使い果たされる以前にリボンの切断ないし損傷する事故は皆無といつてよからう。

消耗電力については、これに必要な事務経費として考えれば、ほとんど無視してよい程度の量である。ただし、電気モーターの性質上、スイッチ・

イン直後一時的に大きな電流の流れることは当然である。数台の電動タイプライターをいっせいにスイッチ・オンするような非常識なことをさへしなければ、オフィスのヒューズを飛ばすおそれはない。普通の電動タイプライターの消費電力は六〇ワットにすぎず、大型の蛍光灯一本を点燈するのと同じことである。

タイプライター——特にオフィス・タイプライター——の電動化の問題は、基本的には洗濯機や掃除機の場合と同じく動力の導入により、労力と時間とを節約する目的から始まっている。

しかしながら、電動化はタイプライターそのものの持つ効用を飛躍的に向上させるという要素を本質的に持っていたといえる。すなわち、

- (1) スピードの増加——時間の短縮・生産量の増大
- (2) より良質でしかも均一な文書の作製
- (3) 良質で多数のコピーの作製

この効用こそは、かつて急速にタイプライターを普及させたものに外ならず、電動化によるその量・質両面にわたる向上は、これを決定的なものとした。

次いで事務管理における人件費の関係がある。事務管理の総費用に対する人件費の比率がある程度まで高くなれば、機械購入時における手動と電動との価格差はもはや問題にならなくなる。むしろ価格差以上の収益が期待出来るか、すくなくとも十二分にペイする投資であることがあきらかとなった。人件費比率の増加は世界の大勢であり、これは間接的にタイプライター

イターの電動化を促進する結果となった。

わが国においても、オフィスにおけるタイプライターの電動化は今後一層進行するであろう。従って職業教育としてのタイプライティングもまた、電動タイプライターを中心とする内容に発展させる急務があるのである。

引用参考文献

- Baty, Wayne Murlin. *Business Communication & Typewriting*. San Francisco: Wadsworth Publishing Company, Inc., 1962.
- Crane, Willard T. *The Typist's Guidebook*. Chicago: Benson Publishing Company, 1960.
- Fratley, L. E. *Handbook of Business Letters*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1965.
- Gavin, Ruth E. and Hutchinson, E. Lillian. *Reference Manual for Stenographers and Typists*. New York: McGraw-Hill Book Company, Inc., 1965.
- Gregg, J. R., Fries, A. C.; Rowe, M.; and Travis, D. L. *Applied Secretarial Practice*. (Fifth Edition) New York: McGraw-Hill Book Company, Inc., 1962.

- Himstreet, William C. and Baty, Wayne Martin *Business Communications*. San Francisco : Wadsworth Publishing Company, Inc., 1961.
- Maze, Coleman L. (ed.) *Office Management-A Handbook*. New York : The Ronald Press Company, 1947.
- Nevner, John W. and Haynes, Benjamin R. *Office Management-Principles and Practices*. Chicago : South-Western Publishing Company, 1953.
- Niles, Henry E. and Niles, M. C. H. *The Office Supervisor-His Relations to Persons and to Work*. (Second Edition) London : John Wiley & Sons, Inc., 1955.
- Post, Emily. *Etiquette*. New York : Funk & Wagnalls Company, 1957.

“To the Lighthouse” ニ関して

小林 幹 男

Virginia Woolf の小説は大体三つの部類に分けることができるが、そのうちで小説史的にみて意義をもってくるのは、彼女が第一次大戦以前の小説の伝統から脱して、独自の所謂「意識の流れ」の手法を実験し、確立していった“Jacob's Room” から“The Waves” への中期であり、また彼女の所謂外面的と内面的の合一がなされた、即ち、この新しい手法を小説の伝統の方向へ融合させた“The Years” と“Between the Acts”の後期である。

彼女はその小説の中に表面の下にある物事の動き——思想や、感情や、洞察の自由な動き——を運ぶような手法を見出したのである。その小説で取扱われているのは、大抵が平凡な家庭環境なのである。Woolf が彼女の幾つかの評論の中で見せている高い知性を捨てて、小説では余りに日常茶飯にこだわると言われる程、日常生活が彼女の小説の舞台となっている。

けれども、彼女が興味をもって取り組んだのは、そうした日常の平凡な

時の平凡な心、そのように表面では何事もない瞬間の意識の世界であったのである。そのことは次の一節にもうかがえるのである。

And, with her basket and her parasol, there she was again, ten minutes later, giving out a sense of being ready, of being equipped for a jaunt, which, however, she must interrupt for a moment, as they passed the tennis lawn, to as, Mr Carmichael, who was basking with his yellow cat's eyes ajar, so that like a cat's they seemed to reflect the branches moving or the clouds passing, but to give no inkling of any inner thought or emotion whatsoever, if he wanted anything.

そして、その深奥へと沈んでゆくことによって、主として、人間について、生と死の問題（これは彼女は常に意識しているようである）を描こうとし、そしてそれを成功させているのである。

こうして彼女は第一次大戦以前の小説の伝統を破る独自の Style を作り上げたのではあるが、勿論、それは新奇さを意図して試みたのではなく、自分の書きたいと思うことの最も適当な表現方法を求めて、苦しみのうちに創り上げていったものであって、小説の伝統に一つの新しい要素を付け加えたと見るべきである。そして、こうした Woolf を刺激したのは、彼女の同時代の Dorothy Richardson であり、Marcel Proust である。Woolf にとって、彼らから得たものは多大であった。

彼女は小説のあるべき姿について、その評論“Mr. Bennett and Mrs. Brown”の中で次のように述べている。

Look within, and life, it seems, is very far from being “life

this". Examine for a moment an ordinary mind on an ordinary day. The mind receive a myriad impressions—trivial, fantastic, evanescent, or engraved with the sharpness of steel. From all sides they come, an incessant shower of innumerable atoms; and as they fall, as they shape themselves into the life of Monday or Tuesday, the accent falls differently from of old; the moment of importance came not here but there; so that if a writer were a free man and not a slave, if he could write what he choose, not what he must, if he could base his work upon his own feeling and not upon convention, there would be no plot, no comedy, no tragedy, no love interest or catastrophe in the accepted style, and perhaps not a single button sewn on as the Bond Street tailors would have it.....

It is, at any rate, in some such fashion as this that we seek to define the quality which distinguishes the work of several young writers, among whom Mr James Joyce is the most notable, from that of their predecessors. They attempt to come closer to life, and to preserve more sincerely and exactly what interests and moves them, even if to do so they must discard most of the conventions which are commonly observed by the novelist. Let us record the atoms as they fall upon the mind in the order in which they fall, let us trace the pattern, however disconnected and incoherent in appearance, which each sight or incident scores upon the consciousness. Let us not take it for granted that life exists more

fully in what is commonly thought big than in what is commonly thought small.....

よ。「この様だ」即ち Wells と Bennett と Galsworthy が物質的な面に偏重している、彼らの小説が彼女の小説に比べては何の助けにもならなう、いや何くもない。

Woolf は彼に愛をいひなへ、内面へ向って動き、出来事の世界から遠ざかっている。B. Blackstone 氏の言葉を借りるなら、渦巻の中の二つの反対の方向、その一方にある求心的な動き、静かにして物を知れ、やうう回想の文字ならいふ。

In the maelstrom of "movements" that make up the rate and literature of our time and country, we may distinguish two contrary directions. There is the centrifugal and there is the centripetal current. There is the literature of action — 'in the destructive element immerse', there is the literature of recollection — "be still and know". One current goes with the age; the other opposes it. Yet both are integral to our time, the maels from could not exist without them.

That double position accepted, there is no difficulty in pointing out the major figures. On the one hand, Joyce, Lawrence, and the novel of violence; on the other, Forster, Myers, Virginia Woolf. In poetry, similar distinctions can be made. There are political overtones, more audible perhaps in the the thirties than today. Still retching a few points, we can sniff religious odours: here, incense

and guttering candles, there, dusty hassocks and the cold stone of college chapels. The one school, floating in a refined air of mystical agnosticism, looks askance on the sex-cum-blasphemy of the other.

(Virginia Woolf)

やがて、"To the Lighthouse"を、彼女の日記を通してみてみよう。そこには一作毎に心身をすりへらす程に苦悶する様子が克明に記られている。その中で、この作品に手をつけ始めてから完成するに至る間は、流れるようにペンが進むというような言葉が見られる。遅筆の彼女にとっては、多くの作品が最も喜びを味わいつつ書くことができたものと思われる。

I am blown like an old flag by my novel. This one is *To the Lighthouse*. I think it is worth saying for my own interest that at last, at last, after that battle *Jacob's Room*, that agony — all agony but the end — *Mrs. Dalloway*, I am now writing as fact and freely as I have written in the whole of my life; more so — 20 times more so — than any novel yet. I think this is the proof that I was on the right path;

(Diary, 23 Feb, 1926)

この作品には、従って彼女の意図するところがほとんど完璧に盛られていると思われるのである。また、書き上げられた原稿を読んだ彼女の夫の Leonard (政治批評家、彼女の作品のよき理解者であり、よい批評者の) 称

賛の言葉が、喜びをあらわす書物である。

Well Leonard had read *To the Lighthouse*, and says it is much my best book and it is a "masterpiece" He calls it entirely new "a psychological poem" is his name for it.

(23 Jan, 1927)

又、David Daiches は、この作品が彼女の作品中随一の完璧を示すものであると、次のように評するのである。

Two years after *Mrs Dalloway* there appeared the book which marks the perfection of Virginia Woolf's art: *To the Lighthouse*. ("Virginia Woolf")

In *To the Lighthouse* Virginia Woolf found a subject that enabled her to do full justice to her technique.

(ibid)

次にこの作品の構想について触れてみたいと思ふ。この点については彼女自身次のように述べている。

I'm now all on the strain with desire to stop journalism and get on to *To the Lighthouse*. This is going to be fairly short: to have father's; and St. Ives; and childhood; and all the usual things I try to put in — life, death, etc. But the centre is father's character, sitting in a boat, reciting *We perished*, each alone, while he crushes a dying mackerel.

(14 May, 1925)

そして又その後の日記では、更に細部にわたって述べている。

But this theme may be sentimental: father and mother and child in the garden; the death; the sail to the Lighthouse. I think, though, that when I begin it. I shall enrich it in all sorts of ways: thicken it; give it branches — roots which I do not perceive now. It might contain all characters boiled down; and childhood; and then this impersonal thing which I'm dared to do by my friends, the flight of time and the consequent break of unity in my design. That passage (I conceive the book in 3 parts. 1. at the drawing room window; 2. seven years passed; 3. the voyage) interests me very much.

(20 July, 1925)

実際に書き上げられた小説“*To the Lighthouse*”は、このように作者が日記中に述べていた構想をかなり忠実に実行したことを示している。ただ Ramsay 氏に力を入れて描くという点については、その描写に Ramsay 夫人と同様に力を注がれているが、作品全体を通じて中心という印象を受けるのは、Ramsay 氏ではなく、むしろ夫人の方である。彼女は第三部“*The Lighthouse*”では既に死んでいるが、Lily Briscoe の意識を通して、そのことは一層彼女の存在価値を印象づけている。最後まで、彼女は女主人公としての立場を堅持しているのである。

この小説中の Ramsay 夫妻は先の日記にも明らかのように、Virginia

が自分の父母を写したものであり、又彼らを取りまく人物や子供たち、またその春景や燈台行きのことなどは、Virginia 自身の子供時代の思い出とからまわっている。これらの材料は、Woolf が創作を始める以前にすでに彼女の身边にあり、この小説に至る間に彼女の心の中にあつて、次第に熟してきて、時を得てこの作品が生みだされたのであらう。

Woolf の父は、ヴィクトリア朝の碩学者の一人に数えられ、ケムブリッジに学び、特待研究生となり、聖職者としてとどまったが、数年後には、宗教に対して懐疑的になって、文筆生活に入るべくロンドンに出て、コーンヒル・マガジン (Cornhill Magazine) の主筆となり、又「大英人名辞典」(Dictionary of National Biography) の編纂に携わった。そのような仕事柄、彼はその時代一流の知識人たちと広い交渉をもつようになつたが、性格的にはかなり風変りな人物であつたようである。小説中、Ramsay 氏に見られる日常の奇異な言動は、まさに父の Leslie の特徴を写したものである。

母は Leslie の二度目の妻で、フランス系の美貌で気品のある婦人で、ウルフが十三歳の年に急死している。Virginia が生れたときに、詩人 James Russell Lowell は次の一詩をおくつて、彼女が健康と富と慧智とに恵まれることを祈り、その父の機知を譲り受けることを願つた。

I wish her next,.....

Her mother's beauty — nay, but two

So fair at once would never do.

Then let her but the halfpossesses,

Troy was besieged ten years for less.

Now if there's any truth in Darwin,

And we from what was, all we are win,

I simply wish the child to be

A Sample of Heredity.

そしてこの小説を読んだ彼女の姉の Vanessa が “an amazing portrait of mother” (Diary, 16 May 1927) と言っていることから、又、母の家にについて Virginia 自身「極くつまらないものであったが、芸術好きで、社交的であった」と言っているところからしても、Ramsay 夫人と母なる人との類似を見ることができるのである。

先に Woolf は独自の手法を模索し、それを発展させていると言った。彼女は決して、従来の小説が行ってきたように、人物達を直接紹介したり、締めくくったりしていない。Ramsay 夫妻と共に彼らに接するいろいろな人物を描き、彼らを通して見た Ramsay 夫妻への観察という形で描いている。すなわち、伝統的人物創造ということと離れて、Woolf の印象主義を通して人物を描いているのである。恰も印象派の絵画に接するような筆致を見ることが出来る。このような彼女の印象主義的人物観は、彼女の評論 “Mr. Bennett and Mrs. Brown” に於てなされているが、それは又次に引用する一節に於ても見る事が出来る。Lily の意識を通して述べられている。

One wanted fifty pairs of eyes to see with, she reflected. Fifty pairs of eyes were not enough to get round that one woman with, she thought. Among them must be one that was stone blind to her beauty.

このようにして、Woolf は “Mrs. Dalloway” に於て確立した手法を駆使して、このような人物描写の創造に成功している。彼女は常に眼前にあって最も強く印象に訴えるもの、或はその時の最も強い感情を直接描いて、その説明なり関連する事柄なりをあとまわしにする方法をとっているのであるが、この小説に於ても、冒頭から Ramsay 夫人と末息子の James との描写に始まる。そして次にどういう関係なのか、どんな様子をしているのかもよくわからない人物が現われてくる。従ってそこには story-telling の形は全く見られないのである。

この小説の舞台はスカイ島の小漁村のはずれにある Ramsay 家の夏の家である。起伏のあるテラスになった広い庭をもち、家も大きい、それは古びていて少々荒れたものである。第一部 “The window” は、この家における或る年、或る夏、或る日の昼過ぎから夜への半日間である。Ramsay 家の末息子 James は息づまるような喜びをもって燈台行きを待ちかまえている。けれどもその夢は “But it won't be fine” 「しかし、天気はまず駄目だよ」という Ramsay 氏の苛酷な言い方に破れ、特に感受性の強い James はひどい打撃を受けてしまう。そのことが夫人にはよく分るのである。彼女も又暗い気持ちにさせられる。一体 James をどうやっていたわつたらいいのか悩む。そうした Ramsay 夫人の思いがこの第一部の底を流れている。

やがて Ramsay 夫人は親切で世話好きである。この夏の家には、Charles Tansley を始め幾人かがこの半日間に食客になったりして、その人々が夫

々に勝手に振舞いながら、夫人の意識の中に様々な影を落すのである。

Lily Briscoe は三十歳を過ぎた独身の絵かきであるが、彼女は才能には恵まれていない。しかし、自分の絵に全魂を打ち込んで、非常に努力している。今しも彼女は庭の芝生に画架を立てて、そこから母子（即ち、Ramsay 夫人と James）を画材として、一心に描いている。彼女はまた Ramsay 夫人へ強い敬愛の念を抱き、唯一人の心の頼り手としている。William Bankes は Ramsay 氏の古い親友で、すぐれた生物学者である。妻に死別し、子供もなく、寂しい境遇の人である。

Augustus Carmichael も又孤独な老人で、巨軀の持ち主である。彼は人生の敗残者のような貧しい姿だが、崇高な精神の詩人である。彼は Ramsay 夫人にやっかいになっていながら、夫人が神経過敏で、気性も女としては少し激しすぎると思い、なんとなく敬遠して打ち解けないでいる。それを夫人は時々気に病んでいる。

また一組の若い男女 Paul Rayley と Minta Doyle がいる。Minta は美しく潑刺としたおてんば娘である。Paul は彼女を恋しているが、おとなしく気の弱い青年で、それが言えない。けれども Ramsay 夫人に元気づけられて、この日海岸に散歩に出た時に恋を打ち明けて、二人は婚約する。

滞在している客は以上の人々だが、Ramsay 夫妻には八人の子供がいる。十九歳か二十歳位をかしらに、男が四人（Andrew, Roger, Jasper, James）と、女が四人（Prue, Nancy, Rose, Cam）である。この中で末の二人 Cam と James 以外は年齢も順序も明らかでないし、又全篇を通じて、特に重要な役割も果してはいないが、しかし当然のことながら、これら大

勢の子供たちがいつも Ramsay 夫人の意識の中をうろついている。

この日は Ramsay 家ではたまたま晩餐会が開かれることになっていた。常々ひとりで静かに食事をするのを好む Bankes 氏も、珍らしく夫人の招宴に応じたので、早めに床につく幼児の他は、家族と客とこの家に居る人々全部が食堂に集まることになる。けれども、いよいよ食卓のまわりに集まってみると、偏屈者の夫をはじめ、それぞれ気むずかしい人々だったりして容易にうち解けた楽しい雰囲気にはならない。ここでも Ramsay 夫人がやはり中心となって、努力してそれを盛り上げてゆくかなければならない。彼女は自分の神経に手にとるように伝わってくる皆の感情に氣をつかって、皆の氣持を融和させるために努力をしなければならぬので、神経はづたづたに引き裂かれてしまう。けれども結局、Ramsay 夫人は今日のこの晩餐会が成功したと確信した。たとえ自分が死んでも、今日ここに集まった人々の心の中に自分は生き残ることができるだろう。絶えず変転し、流れ去ってゆく人生のある瞬間を永遠なものに固定し得たという確信であった。ここで第一部は終っている。

このように、第一部は非常に短い時間内に、様々な人物を登場させ、それぞれの人物の生活感情を追っているが、しかし全体を通じて強調されているのはやはり Ramsay 夫妻の生活、殊に夫人の姿である。

第二部“Time Passes”はその後の十年の推移が述べられた部分であるが、作者の日記には次のようにある。

Yesterday I finished the first part of *To the Lighthouse*, and today began the second. I cannot make it out — here is the most difficult abstract piece of writing — I have to give an empty house,

no people's characters, the passage of time, all eyeless and featureless with nothing to cling to; well, I rush at it, and at once scatter out two pages. Is it nonsense, is it brilliance?

(30 April, 1926)

この十年間に戦争がある。Ramsay 家では三人の家族を失う。まず Ramsay 夫人の急死。この死については何の説明もない。それに Andrew の戦死と結婚した Prue が初産で死ぬ。けれどもこうした出来事はカッコに入れて、所々に短く挿入されているにすぎない。悲劇の十年は全く象徴的に一夜の悪夢として描かれている。人間的要素は引込まれ、家は朽ちるにまかされている。

第一部の終りで更けた夜は、第二部へ入って風の夜となる。そして But what after all is one night? という言葉がある。誰一人として来なくなつた Ramsay 家は、ただ自然の手にゆだねられて、荒れるにまかされ崩壊寸前の廃屋となつてゆく。やがて十年ぶりのある夜半にやってきた Lily Briscoe がこの家のベッドの上で目を覚まして、その陰惨な一夜も明けて、第三部、午前中の半日間へと移つてゆくのである。

第三部 "The Lighthouse" では、妻を失つた Ramsay 氏がすっかり老人になつてしまひ、Cam が十七歳、James が十六歳に成長し、正に十年後であるが、同時にその翌朝でもある。かつて中止のままになっていた燈台行きが、この日に親子三人によって決行されることの他は、新しい事件や話の筋の発展はない。三人が乗っているボートの中の情景と、芝生で絵を描きながらボートを見送っている Lily Briscoe の心理とが交互に描かれる。彼女は、Ramsay 夫人が Bankes 氏と結婚すればいいと思つてい

たが、Bankes 氏とも遂に結婚せず、四十歳を過ぎても相変らず独身で、描こうとする絵もなかなか描けずに苦悶している。彼女の心には、Ramsay 夫人の十年前の印象が今再び更に鮮明に生き返り、狂気の如く Ramsay 夫人を呼び求めるのである。そして主として、この Lily の独白の形で第一部の人々に関する説明が加えられ、その後の彼らの消息も伝えられている。

この様に、この小説には story-telling の様は全くなく、吾々の「次に何が起るか」という期待は、この小説の最初の部分に於てすでに全く覆されてしまふのである。この作品全体は完全に意識の世界に没してしまつてゐる。そして吾々は、一旦その世界へ足を踏み込んだら最後、その底へ底へと引きつり込まれてしまふのである。そしてこの作品を読み終えた時、「次に何が起るか」という興味よりも、もっと深い思索の中へ入つていくことに気づくのである。

この「意識の流れ」の手法を成功させている主な要因は、『時間』の扱い方にあると言える。所謂 story-telling の様相を持つてゐる小説に於ては、大体吾々が日常生活で感じているような時間の流れを示しているようである。この小説に於いて Woolf は "Mrs. Dalloway" に於てなしたように、時間を普通の時の流れに合わせなかつたのである。このことに關連して J. K. Johnstone は "Mrs. Dalloway" と對照させ、"Virginia Woolf は "Mrs. Dalloway" では一日を大体一生涯に拡大し、"To the Lighthouse" に於て十年間を一日の形に凝縮した"と言つてゐる。

「意識の流れ」の手法には、実際、従来の時間の扱い方ではどうしても合わないであって、この「時間」の扱い方は Woolf が自から苦心して作り上げた方法なのである。彼女はこの問題について

It took me a year's groping to discover what I call my *tunneling process*, by which I tell the past by instalments, as I have need of it.

(15 Oct. 1923)

と説明し「“Mrs. Dalloway” を書き始めて一年の手探りのうちにようやく発見したと述べてゐる。」この *tunneling process* は「意識の流れ」の手法と密着して、この作品に芸術作品としてのまとまりをもたらすものとなっているのである。

これは伝統的小説のもつ大切な要素である *story-telling* と人物描写の方法にとつては、一つの大きな革新的態度となっており、更に、小説の中で時間を著しく短縮することになったのである。「Mrs. Dalloway」に於いては、Dalloway 夫人の或る一日の生活を取り、朝十時頃に彼女がその夜のパーティのために買物に出掛けるところに始まり、その夜のパーティが終りに近いところで終っている。

「時間」に関する Woolf の考えの最もよく現われているのはこの小説「To the Lighthouse」であると言われている。第三部「The Lighthouse」では第一部「The window」の中心となっていた Ramsay 夫人は既に死んでしまつて居ない。けれどもそこには記憶と意識の世界だけが残っており、現在は過去に置き換えられている。

さて次に作品中に描かれている「色」(colour) について触れ、小論を

終りたいと思う。この colour とは「技巧」だとか「あや」という意味でなく、この場合は colour そのものを言うのである。

Datches 氏はそれを colour symbolism として扱っている。この作の初めの部分で、Lily Briscoe はなかなか思うようにはかどらない絵を画がき上げようと努力奮闘してゐる。彼女は「あざやかな董色と純白」を見る。

The Jacmanna was bright violet; the wall staring white. She would not have considered it honest to tamper with the *bright violet and staring white*, since she saw them like that, fashionable though it was, since Mr. Pauncefort's visit, to see everything pale, elegant, semi-transparent.

そして、作品の終りの部分で、彼女は、自分の vision をとらえてその絵を完成した時、燈台が青い霧の中へととけ込んでしまったことに気付くのである。

"He must have reached it" said Lily Briscoe aloud, feeling suddenly completely tried out. *For the Lighthouse had become almost invisible, had melted away into a blue haze, and the effort of looking at it and the effort of thinking of him landing there, which both seemed to be one and the same effort, had stretched her body and mind to the utmost.*

そして彼女は最後の線を描く前に一瞬はきりとキャンパスを見たのであるが、その暗示は、この色彩が漠然としていて、彼女の vision と結びついたままになっている。

Ramsay 氏は、遙か彼方に輝いている「赤」として、哲学に於ける

最後の達し得ない段階を具象化している。Lily は青や緑をよく使う。Ramsay 夫人は Lily のキャンバスに “the triangular purple shape” として示されている。更に Datches 氏は次のように真に興味深い言葉を述べている。

Red and brown appear to be the colours of individuality and egotism, while blue and green are the colours of impersonality. Mr. Ramsay, until the very end of the book, is represented as an egoist, and his colour is red and brown; Lily is the impersonal artist, and her colour is blue; Mrs. Ramsay stands somewhere between, and her colour is purple. *The journey to the lighthouse is the journey from egoism to impersonality.*

又、色彩は物語の image を吾々に伝えるのにかなり効果的である。吾々は白黒の画面を見る、そして colour の画面を見る、すると、当然のことながら、colour をほどこされた画面の印象の方がより具体的に現実感をもして迫ってくる。それは印象派の絵画などに於ては、心理的な面へも連なってくるように思われる。

この小説 “To the Lighthouse” の中にそれが使われると、単にその背景となっている自然、木の色だとか、花の色だとか、海の色だとか、人物たちの衣服の色だとか、テーブルや椅子の色だとかいうように、直接に吾々の観念の中の視覚に訴えるためのものではなく、なっているように思われる。実際の色は同時に心理的な、言い換えると意識の象徴とでもいうようなものと混合されており、「色」は単なる芝生の緑ではなくなっている。この作品では「色彩」は心理の表象としての役割を多分に果しているのだ。

460°

Always, Mrs Ramsay felt one helped oneself out of solitude reluctantly by laying hold of some little odd or end, some sound, some sight. She listened, but it was all very still; cricket was over; children were in their baths; there was only the sound of the sea. She stopped knitting; she held the long reddishbrown stocking dangling in her hands a moment. She saw the light again. With some irony in her interrogation, for when one woke at all, one's relations changed, she looked at the steady light, the pitiless, the remorseless, which was so much her, yet so little her, which had her at its beck and call (she woke in the night and saw it bent across their bed, stroking the floor), but for all that she thought, watching it with fascination, hypnotized, as if it were stroking with its silver fingers some sealed vessel in her brain whose bursting would floor her with delight, she had known happiness, exquisite happiness, intense happiness, and it silvered the rough waves a little more brightly, as daylight faded, and the blue went out of the sea and it rolled in waves of pure lemon which corved and swelled and broke upon the beach and the ecstasy burst in her eyes and waves of pure dilight raced over the floor of her mind and she felt. It is enough! It is enough!

ここに於いて “waves of pure lemon” はそれに続く “waves of pure dilight” と深い関係をもっている。純粋なレモン色は「清

純な歓喜」へと発展している。この「レモン色」は実際の光の色として Ramsay 夫人の目に映っているのであるが、同時に、それは彼女の意識と融合して、「清純な歓喜」の象徴となっているのである。

参考文献

- 英文学研究と鑑賞（第十一号）早大英文学会
Virginia Woolf, by David Darches (The Makers of Modern Literature)
Virginia Woolf, by Bernard Blackstone.
The Bloomsbury Group, by J. K. Johnstone
A Writer's Diary (1959)

冷凍鯨肉及び加工鯨肉中の カルボニル化合物について

太 田 禎 子
Teiko Ōta

日本の食生活の特徴の一つとして、動物性タンパク質の摂取量が少ないことがあげられている。酪農生産物に乏しい今日、栄養上から、又価格の点からも鯨肉は重要なタンパク給源と考えられるが、一般家庭の食膳にはそれ程使われていない。その理由の一つにその特異な臭気が考えられる。

そこでこの臭気についてその本体を究明すべくすでに、増井氏¹⁾らは鯨肉の臭気成分中特に塩基性物質であるアミン類について、又堀金氏²⁾らは酸性物質についての研究を行ない、鯨肉臭気成分の検索第1報として家政学会に報告がなされている。本報はそれに引き続き中性成分のカルボニル化合物について、冷凍鯨肉及びその加工品である鯨肉水煮罐詰、及び鯨ベーコン中の臭気成分を検索した。

鯨肉の臭気成分として、Kawahara³⁾らは、ギ酸、酢酸、プロピオン酸、イソ吉草酸、アミン類を検出した外、ホルムアルデヒド、高級アルデヒド類を含むことを明らかにしている。更に太田氏⁴⁾は「魚類中の揮発性カルボニル体の生成とその検出」の中で、市販のサバ、イワシ、カレイの肉質からアセトアルデヒド、ブチルアルデヒド、アセトインの存在を認めている。又北沢氏⁵⁾はサバ生肉よりアセトアルデヒド、プロピオンアルデヒドを検出し、石井氏⁶⁾は生鯨肉より水蒸気蒸留法でクロトンアルデヒドを得ている。

本報では、臭気成分の分離は今までなされてきた水蒸気蒸留法を止めてエーテル抽出法により行なった。抽出液中のカルボニル化合物は、2, 4-ジニトロフェニルヒドラズンとし、液体クロマトグラフィにより単離精製し、これについて融点測定、及びペーパークロマトグラフィによる R_f 値、分光光度計による吸収極大値を測定し推定を行なった。又それらでなお不明なものについては、赤外吸収曲線の測定を行なってより確実性をはかった。

実 験 方 法

1. カルボニル化合物の分離

試料は市販の冷凍鯨肉と、加工品としては市販の鯨ベーコン及び極洋漁業株式会社製品の鯨水煮罐詰（須の子水煮）を用いた。なお罐詰は内部と汁部に分けて抽出を行なう。

試料に脱水芒硝を加えよく磨碎して一夜エーテルに浸漬し、このエーテル抽出液に硫酸2、

4-ジニトロフェニルヒドラジン（2, 4-ジニトロフェニルヒドラジン 2 g + メタノール 100 ml + 硫酸 5 ml）を添加してエーテル液中に溶出しているカルボニル化合物を2, 4-ジニトロフェニルヒドラジンの形に誘導し、ヒドラジンの結晶として取り出す。反応を速進させるため温浴中で加温し後冷蔵庫に放置する。

ヒドラジンの溶けているエーテル液を分液ロートにとり、同量の水を加え反応しなかったヒドラジン硫酸塩、及び混入しているメタノールや硫酸をエーテル不溶部として水洗除去する。

次にエーテルを回収、濃縮し、カルボニル化合物のヒドラジン結晶を濃赤色の粘稠な結晶として得た。さらにこれを石油エーテルで洗浄して脂肪等の不純物を取り去り粉末結晶を得た。

第1表「カルボニル化合物の単離法」参照。

第1表 カルボニル化合物の単離法

試	料
	磨砕・エーテル抽出
エーテル抽出液	
	硫酸 2, 4-ジニトロフェニルヒドラジン添加 加温・後冷却
エーテル可溶部	
	エーテル回収・濃縮
濃赤色粘性結晶	
	石油エーテル洗浄
ヒドラジン結晶	
	液体クロマトグラフィ 吸着剤 シリカゲル：スーパーセル（2：1）
1. 溶出液	2. 3.
石油エーテル	石油エーテル… 1 エーテル… 1
	エーテル

2. カルボニル化合物の単離

上記結晶を液体クロマトグラフィによって各溶出部に分け結晶の単離、精製を行なう。

内径 1.5 cm、長さ 35 cm のガラス管を用い、吸着剤は 110°C で 1 時間乾燥させたシリカゲルと 150°C で 1 時間乾燥させたスーパーセルを 2：1 の割合で混合し、100 メッシュの篩にかけて使用した。

はじめに石油エーテルで洗浄し、結晶を入れ、展開剤は、石油エーテル、石油エーテル：エーテル（1：1）、エーテルの順に通したが、石油エーテル部では殆んど溶出されず、混合部及びエーテル部で各々の試料によって 1～2 種の留分液を回収した。

回収液を濃縮、洗浄し、単離された各カルボニル化合物の 2, 4-ジニトロフェニルヒドラジンの結晶について下記の測定を行なった。

3. 融 点 測 定

ベール法で行なった。

4. R_f 値 測 定

ペーパークロマトグラフィー・一次元上昇法で求める。ロ紙は東洋ロ紙 No. 51, $2 \times 40\text{cm}$, 展開溶媒は石油エーテル：メタノール（1：1）を用い、室温で約4時間展開した。

5. 吸 収 極 大 の 測 定

結晶をメタノールに溶解し、日立製分光光度計で波長 $320 \sim 400\text{m}\mu$ の間を測定した。

一方純粋なカルボニル化合物を試料と同様の方法でヒドラゾンに導き、融点、 R_f 値、吸収極大について測定を行ない、これらを比較同定して各留分のカルボニル化合物を推定した。

実 験 結 果 と 考 察

結果は第2表に示すとおりで、石油エーテル、エーテル溶出部からは、冷凍肉及び罐詰においてはそれぞれ一種の結晶を、又ベーコンからは二種の結晶を得た。

冷凍肉の結晶については、融点からはアセトアルデヒドが推定出来るが、 R_f 値、吸収極大を見るとプロピオンアルデヒドにも近いので更に赤外吸収曲線の測定を行なった。

この結果は第3表のようで純粋のプロピオンアルデヒドヒドラゾンにみられる $1,460\text{m}\mu$ の $-\text{CH}_2-$ 基による吸収が認められず、アセトアルデヒドの場合と同一の吸収を示しているので、この結晶はアセトアルデヒドのヒドラゾンであることが確定した。

罐詰内部も結晶が微量のため融点は測定出来なかったが、 R_f 値、吸収極大によりアセトアルデヒドと考えられる。

罐詰汁部及びベーコンの第一溶出部の結晶は微量のため良いデータが得られなかったが R_f 値からはホルムアルデヒドと推定される。なお、ベーコンの第二溶出部は R_f 値が大きいためプロピオンアルデヒドと推定したが、なおよく検討する必要がある。

エーテル溶出部からは冷凍肉及び罐詰からそれぞれ二種の結晶を、又ベーコンからは一種の結晶を得た。冷凍肉の第一溶出部の結晶は、各性状がヒドラジンとほぼ一致するので更に赤外吸収スペクトルを測定しヒドラジンであることを確認した。罐詰内部、汁部も同様ヒドラジンと思われる。第二溶出部の結晶は吸収極大や R_f 値にずれがあるがアルカリ性における退色度を調べた結果、ケトン類であることが確認されたので、アセトンかあるいは他のケトン類かとも考えられる。

総 括

鯨肉の臭気成分中主として油脂の変敗によって生ずると考えられるカルボニル化合物の検索を目的として、冷凍鯨肉、鯨水煮罐詰、鯨ベーコンから、カルボニル化合物をヒドラゾン誘導体として分取し、液体クロマト法により分別し、融点測定、ペーパークロマト法、吸光曲線測定により次の結果を得た。

第2表 鯨肉中より単離されたカルボエル化合物及び純試料のDNPHの性状

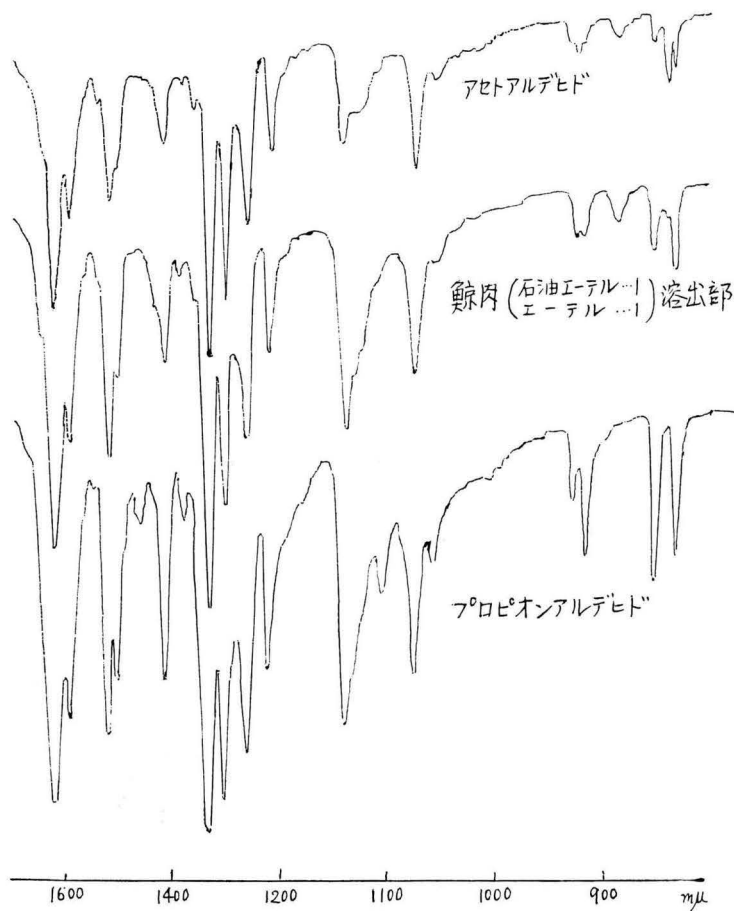
	冷 凍 肉		水 煮 罐 詰						ベ ー コ ン			純 試 料				
			肉 部			汁 部										
			m. p. (°C)	Rf. (<i>mμ</i>)	Max (<i>mμ</i>)	m. p. (°C)	Rf. (<i>mμ</i>)	Max (<i>mμ</i>)								m. p. (°C)
溶出液	m. p. (°C)	1) Rf. (<i>mμ</i>)	2) Max (<i>mμ</i>)													
石油エーテル1							—	0.69	355	—	0.68	—				
エ ー テ ル1	148~ 149	0.74	356	—	0.73	356										
										118	0.77	356				
エ ー テ ル	181~ 182	0.58	352	184	0.68	351	181	—	353							
	119	0.70	354	118	0.51	356	—	0.73	360	115	0.69	359				
								</								

1) ロ 紙.....東洋口紙 No. 51, 一次元上昇法 展開溶媒...石油エーテル: メタノール (1:1)

2) 溶 剤.....メタノール, 波長...320 ~ 400 $m\mu$

第3表 ヒドラゾンの赤外吸収曲線

第3表 ヒドラゾンの赤外吸収曲線



即ち冷凍鯨肉からアセトアルデヒドとアセトン。

水煮罐詰肉部からアセトアルデヒドとアセトン。

同 上 汁部からホルムアルデヒドとアセトン。

鯨ベーコンからホルムアルデヒド、プロピオンアルデヒド、アセトン。

が検出された。

これらのカルボニル化合物は前回報告されたサバ肉及び牛レバー⁷⁾の臭気成分から検索されたものと同種のもので、鯨肉特有のカルボニル化合物は見出されなかった。

臭気成分中のカルボニル化合物は主として食品成分中の油脂を構成する不飽和脂肪酸基の酸化分解によって生成するものと考えられているので、油脂含量の多いベーコンではもっと多数のカルボニル化合物が検出されるものと予想していたが、予想に反して少数であったのは、その加工処理条件である燻製の際に生ずるフェノール系化合物により、酸化防止作用を受けたためかとも考えられるがこれについては更に研究を続けたいと思う。またカルボニル化合物の検索方法としての2,4-ジニトロフェニルヒドラゾン法は簡便な方法であるがその液体クロマトグラフィーの溶出条件や、ペーパークロマトグラフィーの *R_f* 値、紫外吸収曲線などが非常に近似しており、その確認にはかなり困難を感じたので、今後はガスクロマトグラフィーや薄層クロマトグラフィーによる分析を行なって各カルボニル化合物を確認し、更に微量成分をも検索したいと考えている。

本研究に当り御懇篤なる御指導をいただいた実践女子大学染野亮子教授、市邨学園短期大学水野伸子氏に深謝し、又御協力いただいた実践女子大学卒業生、石井清子氏、本間怜子氏、宮内和子氏に謝意を表する。

(第13回 家政学会—1960—発表)

引用文献

- 1) 増井 庸子, 等々力聖子: 第11回家政学会発表 (1959)
- 2) 堀金美美子, 山村 尚子: 同 上
- 3) F. K. Kawahara, and H. J. Dutton;
Am. Oil Chemists. Soc., **29**, 372 (1952)
- 4) 太 田 冬 雄: 日本水産学会誌 **24**, 334 (1958)
- 5) 北 沢 静 江: 第12回 家政学会発表 (1959)
- 6) 石 井 清 子: 実践女子大卒業論文 (34年度) 未発表
- 7) 志 賀 妙 子: 第12回 家政学会発表 (1959)
- 8) 清 水 静 子: 実践女子大卒業論文 (31年度) 未発表
坂本 富子, 依田 陽子: 同 上 (32 ") "

A Study on Two Books, "Moby Dick" and "Adventure of Huckleberry Finn"

Kumiko Kondo

I

"Call me Ishmael!" Ishmael by his very name is the symbol the wanderer in life's desert; more tragically Ahab by his scar is Cain cursed by life to wander eternally unsatisfied.

Ishmael was a man who realized Man's being essential loneliness. Ishmael is everyone. Ishmael will be Melville himself. Ahab, Starbuck, Queequeg, Fedallah, Falsk, Pip and others are all phases of Ishmael.

In Carpenter and Blacksmith you will see the people who had lost "hope in life." They are the people who are haunted to despair.

Ahab is the excess of "Ego" Pip is in the lack of self-identity. Ishmael said, "we mortals should not be conscious of so living and so striving. we should take Queequeg as a model. Queequeg indeed acted with instinctive good sense. Where Father Mapple was the extreme intensity of spiritual consciousness, Queequeg is, on the other hand, the instinctual and unconscious self. "Queequeg seemed entirely at his ease; preserving the utmost serenity; content with his own companionship; always equal to himself.

"Queequeg is always master of himself, and so of every situation in which he plays a part. when he rescues the man, his erstwhile tormentor who falls from the Nantucket Packet into the ocean, he makes nothing of his unselfish, heroic act, merely asking politely for some water with which to take off the brine. Was there even such unconsciousness? Observe Queequeg at "Ramadan" Scene where he was going to die—"Queequeg in his Coffin"—and later rose up saying, "I left something to do in the harbor," and became high-spirited right at once. At "Ramadan" Chapter you will see Melville's religious view. After Ishmael's effort to persuade Queequeg—that is like the attitude of the Missionaries in Polynesia, he realized: "After all I do not think that my remarks about religion made much impression upon Queequeg." He realized also that Queequeg knew a good deal more about true religion than he himself did. Ishmael. After taking the attitude of a Missionary, suddenly became Melville, student of comparative religions and the most tolerant of men.

Outwardly all the characters in Moby Dick seem unreal or abnormal. But as a matter of fact they are all true to life. Those kinds of people are actually found out everywhere. Those who have never fought at the bottom of life, but spending days in decent, warm parlors in self-satisfied condition, could never imagine or think of lives of such tragic

people. Those people, however, are practically breathing the same air in some corners of the world. They are indeed swarming around everywhere in the world.

Melville's, however, is not Rousseuism. He is too realistic to perpetuate in fiction the myth of the goodness of natural man. Melville had seen too much of mankind in its baseness, both the primitive and the civilized in two hemispheres. In the eyes of Melville, even Ahab is not described as an evil man, but he is depicted as a tragic hero. He seems both sides both sides of the man, good and evil.

The Pacific Ocean is the American Lake and the Whalers are the Pioneers. However, Cooper's Works are nothing in comparison with Moby Dick. Cooper's people are merely the products of Imagination Melville's are gushed out of stern reality, out of his bloody life experience.

Moby Dick is a strange sort of book, and yet it is great. It is *terrific* in its true sense of the word. The writer can not find any other expression for this tremendous work. Apart from its greatness of being terribly allegorical and symbolical, the readers will be admiringly surprised at Melville's enormously energetic, conscientious, academic research concerning with the whales and whaling—his cetology, and its exactness of his scientific observation and knowledge concerning with the whales and whaling. His tremendous vitality of sketching the dreadful lives of the seamen and the bloody records of the naked people including various tribes, races and their customs and manners, psychology and religion, *fighting against the irresistible power of nature*.

Moby Dick is not a more fiction nor a novel. It is an Epic of 19th century. It is a tragic drama of th century, It is a product of the time when Capitalism—Commercialism or Industrialism you may call—is going into its full bloom, yet it does not reach its highest stage, This is a whaling story in 1850, not in 1950, You see the difference, There is still something crude and primitive in technique of whaling, Ahab would not have lost one of his legs if he had been whaling one century later. "By 1840's the crew were the bottom dogs of all nations and all races. Of the 18,000 men, one-half ranked as green hands and more than two-thirds deserted at every voyage."

Moby Dick is a prose in poetic form ; an epic composed in blank verse. Blank verse ? If you doubt it, please read carefully the parts of Ahab's Soliloquy. He is sobbing and weeping, crying Hamlet ! Read aloud Ahab's monologue ! Even chant them. You will see Melville is chanting ; Melville is writing in blank verse in those parts of Ahab's soliloquy. You will realize the sorrow of the man, victim of the mechanic civilization in 19th century. You will also realize the beauty of the Ocean, beauty of nature unchanged eternally in contrast with a man's sorrow.

Moby Dick is an American classic. It is not only a whaling story, but it is a kind of autobiography of a man who was struggling to realize *himself*. He is struggling in search for his own "Ego" amidst the chaos, political, economical, social, religious.

Primitive man was unable to distinguish clearly between Ego and Non-ego. The tragedy in the modern times is inrealization of Ego. With the spread of industrialism throughout the world, there has been consciousness of the theory of "Individualism." With the awakening of "Ego," people have begun to realize the tragedy around them which hand come from the mechanization of commercialism and industrialism.

Though so-called "Psychology" research was in its immature stage, people have begun to fear something in the dark prospect of the future, that is, people have begun to realize the fact of "Man's essential loneliness," That is realization of Ego.

Moby Dick is rich and complex above any other novel in American literature. It is a product of America's material civilization, interpreted as a satire of 19th century, and also as a vast nature myth like Beowulf, as an allegory of man's search for Paradise.

Moby Dick is a tremendous literary work, produced the heavy pressure of tragic civilization. It is a record of a man's searching after the truth facing with bloody, stern reality.

II

"Adventure of Huckleberry Finn" is a dark book. It tragic. It is as tragic as "Moby Dick." But it is a different kind of tragic book from "Moby Dick." Melville is utterly pessimistic. Melville describes people who are fatally struggling against the irresistible power of Evil. There is a few places in "Moby Dick" where we can laugh to tears. He describes the metaphysical evils of existence. He deals with them symbolically. On the other hand, in spite of thorough-going tragic atmosphere in "Huck Finn," there are so many amusing scenes which make us smile, even laugh to tears. Also Huck never encounters actual human beings such as feudists, mobs, rogues, nigger-hunters and murderers. Mark Twain's treatment of this adventure story is more like Cervantes' "Don Quixote."

"Moby Dick" has many digressions—tremendous study of whales, wonderful sketch and psychological analysis. It has a great amount of digression and yet it leads up the readers breathlessly to the climax; to make the readers face with unconquerable tragedy of a man who is cursed by life to wander eternally unsustained in the desert of life, and it strongly teaches us that there exists irresistible Power of Nature, symbolized as a white whale, Moby, Dick. Huck Finn, on the other hand, is episodic and discontinuous. It is a succession of incidents unrelated with each other. There is narrative, but there is not narrative purpose; no end toward which the story is moving. There is sequence, but there is no development and no intensification. The frame work of "Huck Finn" is faulty: the adventure is not admirably skilful. The movement is sometimes aimless and dull. The movement is desultory till the raft is wrecked; from that on it has a direction till the end of the Wilks Family episode.

However, it has a vigor, a depth and a multiplicity. It is an expression of a great democratic judgement on the energies of Democracy and on the limits that confine them. As the editor of "Huck Finn" suggests, the greatness of this book lies in its power of telling the truth. It has a lifegiving power and the tremendous truth of moral passion.

In "Moby Dick" the characters are type charcters. The characterization is symbolical. Ishmael is everyone. Ishmael is Melville. Ahab, Starbudk, Queequeg, Fedellah, Falsk, Pio and others are all phases of Ismael. Carpenter and Blacksmith are type characters (rather than individual) who had lost desire and hope in life. They are the people who are haunted to despair. In "Huck Finn," however, almost every character is individual,

except some myth-making elements in the Grangerford family. The tragic love-story and the elopements of Miss Sophia and Harney Shepherdson remind us of Romeo and Juliet, and the large-scale slaughter between the two feudists reminds us of the Sicilian Tragedy of the same type families, enemies with each other. Old man Finn, the Duke of Bridge-water and the Dauphin, Looney the Seventeen, son of Looney the Sixteen and Mary Antonette are the wonderful creations which have the elements to make "Huck Finn" a comedy. They have "Falstaff" elements. In "Moby Dick" we find this comedy elements in the three pagans, Pip, Queequeg, and the other. But the comical elements are much stronger in "Huck Finn."

The description of Mrs. Judith Loftus occupies only a few pages of dialogues : but she is complete as a characterization. The vividness of the conversation scene ! The scene where Huck began trembling upon her asking his real name. (What is your real name ? Is it Bill, or Tom, or Tom, or Bob ?—Or what is it ? I reckon I shook like a leaf, and I didn't know hardly what to do.) This scene almost makes me feel sure that Mark Twain had certainly had this sort of experience.

In "Moby Dick," Ishmael is the story-teller who represents "everybody." Ishmael might be Melville. The story-teller is a grown up person, intelligent, tolerant and keen observer. In "Huck Finn," Huck, 12 year-old boy, homeless and vagabond, is the story-teller. The boy from the conventional view-point is a "hard lot" and a bad boy. Huck does not represent anybody. He is individual—more than Ishmael. If we try to find some identification, we may say Huck is an expression of the American mass of people, an expression of the folk mind. The folk mind in the Mid-America in the frontier period. He is a distillation of the humble minds of humble folks.

If there are any characters we can compare both in "Moby Dick" and "Huck Finn," we can compare Ahab with Old Man Finn, Queequeg with Nigger Jim. The former two are tragic heroes and representatives of Evil and the latter two Pagan, Innocent and representatives of Good. Both Ahab and Old Man Finn are victims of the evils of society rather than they themselves are evil men. Both of them are fatally tragic. They lost the hope and desire in life and there is no salvation. Both of them are desperate in pursuit of happiness and fail in grasping it. Both of them are crazy with dissatisfaction, oppressed by the heavy pressure of so-called mechanization or capitalism of the civilized. Both of them are the excess of Ego. Ahab shows the excess of Ego in his Depravity. Old Man Finn as well as Ahab is a tremendous character, but he could contribute little to narrative—once Huck had escaped from him and there was nothing more. He has to be killed—while the latter, Ahab was the hero till the last moment of the story.

On the contrary to Ahab and Old Man Finn, both Queequeg and Nigger Jim are essentially good-natured, innocent, naive and even noble. Both of them are superstitious, instinctual and unconscious self. You will see in the Chapter 14, "Was Solomon wise ?" that Jim is more free from the conventional idea than Huck. Nigger Jim excells even Huck in fidelity and innate manliness, to emerge as the book's noblest character. Jim has all the virtues Mark Twain admired. He is kind, staunch and faithful : a brave man, a friend who risks his life and sacrifices his freedom for his friend. Faithful and mysterious, and warmly humane, Jim is a triumphant in genuine negro characterization. While Quee-

queg, though Melville's keen observation does not escape his defects in some degree, is also admired by Melville: "We mortals should not be conscious of so living or so striving. We should take Queequeg as model." Queequeg, indeed, acted with instinctive, good sense; Queequeg seemed entirely at his ease: preserving the utmost serenity, content with his own companionship, always master of himself, and so of every situation in which he plays a part. When he rescues a man, his erstwhile tormentor, who falls from the Nantucket packet into the Ocean, he makes nothing of his unselfish, heroic act merely asking politely for some water with which to take off the brine.

"I never seen anybody but lied one time or another." Huck Finn's life begins with telling a lie. He lies to Mrs. Judith Loftus, to the raftman, to the ferryboat captain, to the Grangers, to the vagabonds (the King and the duke) to everybody in whose interest or curiosity may lurk a threat to his private purposes. He erects round his privacy ramparts of protective untruth. And yet he has never told a lie not betrayed his bosom friends, Tom Soyer and Jim. In Huck the shrewdness, common sense, endurance, staunchness as well as skepticism, darkness, fear, ignorance superstition, inferiority complex. Suspicious are predominantly existing. Through these tendencies, however, you will see strongly in him also warm friendship, loyalty and courage. In spite of miserable environment as the lowest dog in the society, in spite of the torment by his "Pa", and lack of education, his wonderful nature is not twisted nor distorted. He reveals himself intelligent and realistic. In contrast to Huck, Tom Sawyer is much more romantic, idealist and lover of conventional forms and principles. Tom Sawyer's I. Q. might be inferior to that of Huck. Tom is more childish and less intelligent, though Tom has a heart and courage as well. Huck's, however unenlightened; therefore his conscience is troubled by the voice of conventional idea of slavery. However, he is essentially intelligent, shrewd, generous, tolerant, brave, loyal and honest in spite of his fertility in lies.

We find at the last stage that Huck without being taught by anybody, came to the highest reach after a long struggle and consideration with imperatives of his upbringing and his decision to stand for decency against the moral law of slavery, "All right, then, I'll go to Hell." He has chosen the way to Hell. But this was the voice from his inner heart.

His sensitiveness to cruelty and injustice is one of his strongest traits and it can be seen everywhere through the book. "I began to think how dreadful it was, even for murderers to be in such a fix. I says to myself there ain't no telling but I might come to be a murderer myself yet, and then how would I like it?" Thus Huck always displays a frontier neighbourliness, even trying to provide a rescue for three murders dying marooned on a wrecked boat. At the same time Huck is ashamed of the baseness of human race. "It was enough to make a body ashamed of the human race." "Well, I never see anything like that old blister for clean out-and-out cheek." He is astonished at the lowness of the King at the episode of the vagabonds, both the Duke and the King, at the Wilk's Home. When Huck heard, however, that these two vagabonds were arrested at last and tarred and feathered, he sympathetically said: "I know it was the king and the Duke though they were all over tar and feathers, and don't look like nothing in the world that was human—just looked like a couple of monsters big sol-

dier plumes. Well, it made me sick to see it, and I was sorry for them poor pitiful rascals, it seemed like I couldn't even feel any hardness against them any more in the world. It was a dreadful thing to see. Human beings can be awful cruel to one another.

His sensitivity to cruelty and injustice is a strong train in him. But the stronger one is his aspiration for freedom and his keen sense to the beauty of Nature and his love of outdoor things. This strong trait as a child of Nature can be seen at almost every chapter, at every scene. Like the hero in "The Jungle Book," he hated to lie in bed in a house. The great nature is his home. Even tho Christian Spirit of the widow, the gorgeous Aristocratic life in the Grangerford family, the warm, pastoral life at the Phelps plantation do ont appeal to him. The money, wealth, power, those have no charm to him. He aspires for freedom. He wants to have a direct contact with nature. The raft which floats on the Great Mississippi is his home, his paradise.

"We said there wasn't no home like a raft, after all. Other places do seem so cramped up and smothery, but a raft don't. You feel mighty free and easy comfortable on a raft."

Owing to the luck of proper education, he failed to express his sensitiveness to the beauty of nature to such an extent as to make the other people see him from another angle. He was always thought to be a rough, ignorant bad vagabond boy. But Huck has a poet's eye towards the nature and he is able to appreciate the greatness and beauty as a poet is. And his attitude is always optimistic.

In "Moby Dick," the social evils are symbolically described. But in "Huck Finn," you see the social evils in the concrete examples. You have the vivid picture of the American society, people's struggling life along the coast of the Mississippi River. The life is primitive. The houses are tough and rough. The wooden houses and cabins for the slaves. The cotton plantations. The lumber mills. The rafts floating on the River. Hogs are roaming here and there in the wilderness. Widow Douglas is an ardent Christian. Uncle Silas is a good-natured farmer-preacher. The religious revival is fantastic and fearful. The mob is noisy. The lynch is cruel and miserable. The epidemic disease of small-pox is terrific and fearful. The endless slaughter between the two families. Sheburn's vigorous speech, representing the brave yankee spirits! These are the social backgrounds in "uHck Finn" is quite often smiling, though sometimes seriously grim. It is even humorous and makes us laugh to tears. Therefore you may call Mark Twain a humorist. But I would rather not call him a humorist. His humour is something like a table-cloth which covers the blots on the table. It is said that his inner most desire is to write the biography of Jesus Christ. He has seen, as well as Melville, too much misery, daseness and tragedy and misery in life and in human beings. He could not help putting a mask on as a sentiment toward reality, the evils and injustice of the world.

Note : Herman Melville (1819-1891), Mark Twain (Samuel Clemens) (1838-1910)

論叢 (第一号) (創刊号)

昭和四十一年十月二十五日印刷
昭和四十一年十月二十九日發行 非売品

發行者 東京立正女子短期大学
東京都杉並区堀之内一の三三九
電話 (三二三) 五一〇一〜三番

印刷者 有限会社 三和 (印刷部)
東京都北区志茂町二ノ五〇

編集委員

太田	榎子
小林	幹男
庄司	寿完
土居	淑子
山辺	吉也

(五十音順)

Tokyo Rissho Junior College for Women

Ronso

Contents

Preface	Tsunemaru Iwamoto
The Prospectus of the Establishment of Tokyo Rissho Junior College for Women	
Crisis in Modern Education and Educational Reform	Tsunemaru Iwamoto
Development of Postwar Higher Education for Woman	Manji Fujimoto
Independent Girls' Schools and their Curricula — In Case of Protestant Girls' School —	Yasumitsu Kanbe
On 'Big Tree' of the Wu-Shi'Tzu Reliefs	Yoshiko Doi
Radiophonic Expression	Jukan Shoji
Electric Typewriter — Its Use and Advantages —	Midori Iguchi
An Approach to "To the Lighthouse"	Mikio Kobayashi
Carbonyl Compounds in Frozen Whale Meat and Manufactured Whale Meat	Teiko Ota
A Study on Two Books : "Moby Dick" and "Adventure of Huckleberry Finn"	Kumiko Kondo